

飯田における古墳の出現と展開

—資料編一

長野県飯田市教育委員会

飯田における古墳の出現と展開

—資料編—

長野県飯田市教育委員会



高岡 1号古墳 横穴式石室



姫塚古墳 横穴式石室

卷頭図版 2



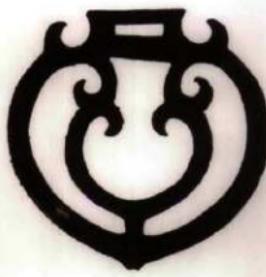
御猿堂古墳 画文帶四仏四獸鏡



兼清塚古墳 二神二獸鏡



鐘塚古墳 横矧板紙留短甲



上満天神塚古墳 带金具



溝口の塚古墳 剣装具



上満天神塚古墳 銀装圭頭柄頭

例　　言

1. 本書は、『飯田における古墳の出現と展開』の資料編として、市内を中心に所在する主要古墳（前方後方墳1基・前方後円墳24基・帆立貝形古墳5基）の概要をまとめたものである。
2. 本書は、古墳ごとに墳丘・埋葬施設・出土遺物等のデータおよび関連する図・写真を掲載している。
3. 各古墳のデータ作成にあたっての基準は以下のとおりである。

①各古墳に付した番号は分布図の番号と対応している。古墳は所在地の北から順番に記述した。
②各古墳についての名称およびデータは、下伊那誌編纂会 1955 『下伊那史』第二・三巻（以下、『下伊那史』という。）を基準としている。『下伊那史』には、故市村成人氏による当地方の古墳に関する綿密な聞き取り調査や現地での確認作業で得られた情報が掲載されており、現在でも古墳の調査を進めるにあたっての基礎資料となっている。出土資料については、正式な発掘調査によらないものが多いため、その帰属に問題もあるが、発掘調査でも得ることのできない情報も多く含まれていることから概要を記載し、さらに新たに得られた情報を合わせて記載した。

③各古墳の記述については以下のとおりである。

所在地－古墳の墳丘部分を中心とした主な地番を掲載

調査歴－『下伊那史』刊行後の発掘調査・測量調査の履歴を掲載。

形態・規模・外部施設・埋葬施設・出土遺物－『下伊那史』のデータをもとに作成し、発掘調査や測量調査により正確な数値が得られたものについてはそのデータを掲載している。各データについては、（ ）に引用した文献を記載している。

概要－古墳の概要を記載。

時期－各古墳の時期については、現時点で判断される年代を記載した。発掘調査によらないものが多く、今後の参考として提示している。また、時期区分については、近藤義郎編『前方後円墳集成 中部編』1992 株式会社山川出版社（以下、『集成』という。）を合わせて掲載した。『集成』刊行後、発掘調査等により新たな古墳資料の追加がなされており、これまでに知られていた古墳の状況とは、墳形や築造時期等の捉え方が大きく変わっているものもある。

引用文献－各古墳の項には、基礎的な記述や使用した図の出展となる文献を掲載した。

4. 墳丘・石室・出土遺物図は、これまでに刊行物に掲載されているものについては、図ごとに引用文献を明記した。引用文献を明記していないものについては新たに作成したものである。新たに作成したもののうち、水佐代獅子塚古墳の墳丘測量は東海大学文学部考古学研究室 北條芳隆助教授に依頼した。羽場獅子塚古墳・おかん塚古墳・権現堂1号古墳・大塚古墳・兼清塚古墳・塚原3号古墳・鏡塚古墳・金山二子塚古墳・馬背塚古墳の墳丘測量については株式会社ジャステックに委託した。塚原古墳群・金山古墳群全体図は有限会社M2クリエーションに委託した。

出土遺物についてはすべてを掲載していないが、各古墳の状況が把握できるよう図ないし写真を掲載した。遺物図については、引用文献を明記していないものは新たに作成したものである。航空写真以外の古墳全景・横穴式石室・遺物の写真については、西大寺フォト杉本和樹氏に依頼した。

- 上記以外は、飯田市教育委員会が実施した発掘調査によるものである。
5. 本書作成にあたって、掲載図のうち各文献から引用した墳丘測量図・石室実測図は再トレースしてある。編集上、図の配置や表現方法（構造物・アミ掛け等）を変えているものがある。
 6. 図は各古墳共通となっている。墳丘図は1／500、石室は1／80とし、出土遺物は遺物の種類ごとに同じ縮尺となっている。
 7. 本書の記載については、1～6・29・30を坂井勇雄、7～14を下平博行、17～24を羽生俊郎、15・16・25～28を馬場保之が分担執筆し、図・写真図版を含めた全体の編集は瀧谷恵美子が行った。
 8. 写真撮影・掲載にあたっては、以下の方々にご協力いただいた。

下伊那教育会－故市村威人氏撮影写真（市村文庫）

雲彩寺－飯沼天神塚古墳出土銅鏡・金環（飯田市上郷考古博物館寄託）

竜丘小学校－兼清塚古墳出土鏡4面（飯田市美術博物館寄託）・大塚古墳出土埴輪（水鳥）

開善寺－鎧塚古墳出土馬鐸・短甲・金山二子塚古墳出土三環鏡（以上は飯田市美術博物館寄託）・

御猿堂古墳出土四仏四獸鏡

また、古墳・石室の撮影にあたっては各古墳の地権者および周辺の方々にご協力をいただいた。

9. 本章に関する資料のうち、写真資料および発掘調査にかかわる資料については飯田市教育委員会が管理している。

目 次

座光寺地区

1. 高岡1号古墳（前方後円墳）	1
2. 北本城古墳（前方後円墳）	6
3. 新井原12号古墳（帆立貝形古墳）	12

上郷地区

4. 溝口の塚古墳（前方後円墳）	15
5. 番神塚古墳（前方後円墳）	25
6. 飯沼天神塚（雲影寺）古墳（前方後円墳）	26

松尾地区

7. 代田山狐塚古墳（前方後方墳）	32
8. 茶柄山3号古墳（前方後円墳）	34
9. 御射山獅子塚古墳（前方後円墳）	38
10. 羽場獅子塚古墳（前方後円墳）	40
11. 姫塚古墳（前方後円墳）	43
12. 上溝天神塚古墳（前方後円墳）	46
13. おかん塚古墳（前方後円墳）	54
14. 水佐代獅子塚古墳（前方後円墳）	60
15. 代田獅子塚古墳（前方後円墳）	63
16. 八幡山古墳（帆立貝形古墳）	67

童丘地区

17. 権現堂1号古墳（前方後円墳）	68
18. 塚越1号古墳（前方後円墳）	70
19. 丸山古墳（前方後円墳）	73
20. 大塚古墳（前方後円墳）	75
21. 兼清塚古墳（前方後円墳）	78
22. 塚原二子塚古墳（前方後円墳）	82
23. 塚原3号古墳（帆立貝形古墳）	88
24. 鎌塚古墳（帆立貝形古墳）	90
25. 鐘塚古墳（帆立貝形古墳）	93
26. 金山二子塚古墳（前方後円墳）	97
27. 御猿堂古墳（前方後円墳）	104
28. 馬背塚古墳（前方後円墳）	111

川路地区

29. 久保田 1 号古墳（前方後円墳）..... 118

下伊那郡喬木村

30. 郭 1 号古墳（前方後円墳）..... 126

資料編



1. 高岡1号古墳 2. 北本城古墳 3. 新井原12号古墳 4. 清口の塚古墳 5. 番神塚古墳 6. 飯沼天神塚古墳 7. 代田山狐塚古墳
 8. 茶柄山3号古墳 9. 御射山獅子塚古墳 10. 羽場獅子塚古墳 11. 姫塚古墳 12. 上溝天神塚古墳 13. おかん塚古墳
 14. 水佐代獅子塚古墳 15. 代田獅子塚古墳 16. 八幡山古墳 17. 権現堂1号古墳 18. 塚越1号古墳 19. 丸山古墳 20. 大塚古墳
 21. 麦清塚古墳 22. 塚原二子塚古墳 23. 塚原3号古墳 24. 鏡塚古墳 25. 鐙塚古墳 26. 金山二子塚古墳 27. 御猿堂古墳
 28. 馬背塚古墳 29. 久保田1号古墳 30. 郭1号古墳

挿図1 主要古墳分布図

1 高岡1号古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市座光寺3338-1他
- 2) 立地 飯田市座光寺地区の北東部低地、天竜川右岸の河岸段丘の緩斜地に位置する。北から東にかけては飯田市と高森町を画する天竜川の支流である南大島川、西は山間地によって画された狭小な地域に立地し、標高440mを測る。
- 3) 現状 墳丘はほぼ全形を留めており、現在は高岡神社の境内地として後円部墳頂には神社の社殿が建てられている。墳丘は老杉に覆われており、地元では「高岡の森」の名で親しまれている。
- 4) 調査歴 昭和57年 墳丘・石室測量調査（文献c）
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N83°E 墳丘長約72.3m
後円部径約35.2m・高さ6.2m 前方部幅約35.7m・高さ6.3m（文献c）
- 6) 外部施設 葦石・埴輪（文献a）
- 7) 埋葬施設 横穴式石室 主軸方向N41°E 石室全長5.6m
奥壁幅2.0m・開口部幅1.85m・玄室高約1.7m 側壁の一部に赤彩あり（文献c）
- 8) 出土遺物 円筒埴輪片・朝顔形埴輪片・形象埴輪片（蓋1・家？1他多数）・人物埴輪片（巫女1他）・馬形埴輪片？（要珠？1・鞍？1他）
馬具（辻金具2・杏葉片2・鉗具片2・鎖1・留金具1・金具1他）
金環1・玉類（切子玉5・管玉2・小玉3・勾玉1）
土師器破片22・須恵器破片1
（文献a）

2 概要

横穴式石室を持つ全長72.3mの前方後円墳であり、飯沼天神塚古墳に次ぐ飯田下伊那最大級の古墳である。この古墳の特徴は横穴式石室にあり、墳丘規模に反して石室は小規模で、墳丘中腹に開口する。石積みは壁面の最下段に平石を立てて並べ、その上に2段程度小型の石を横積みしている。入口の両側に平石を立て、開口部を狭めている。入口部より石室内部の床面がかなり低くなり、形態的にはいわゆる豊穴系横口式石室に属すると判断される。壁面に赤彩が施されており、現在でもその痕跡が残る。

これまでに知られている出土遺物は極めて少ない。埴輪はいずれも表採資料のため、配列は把握できていないが、人物・形象埴輪などの出土が多い。昭和35年、県史跡に指定された。

3 時期

出土遺物及び周辺部の古墳の横穴式石室との比較から6世紀前半と判断される。

『集成』では、埴輪は川西埴輪編年のV式にあたることから、8～9期に比定されている。

4 周辺の状況等

座光寺地区には他に横穴式石室を持つものとして前方後円墳である北本城古墳や、円墳ではあるが銀製重飾付耳飾が出土している畦地1号古墳が存在する。これらの古墳と高岡1号古墳の石室は石の積み方や玄室の構造に共通点が多くみられ、一つの特徴を示している。また、古墳の北東一帯には帆立貝形古墳である新井原12号古墳をはじめとする5世紀代の新井原古墳群があり、高岡古墳群と合わせ、この一帯が南側に広がる該期の集落遺跡である恒川遺跡群の重要な墓域であることを示している。恒川遺跡群は律令期の伊那郡衙所在地である。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
- b 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第三巻
- c 松尾昌彦他 1982「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」『信濃』第34巻第11号
- d 長野県史刊行会 1968『長野県史』全一巻(三)
- e 白石太一郎 1988「伊那谷の横穴式石室(一)(二)」「『信濃』第40巻第7・8号



古墳全景（北西より）

昭和28年撮影（下伊那教育会 市村文庫）

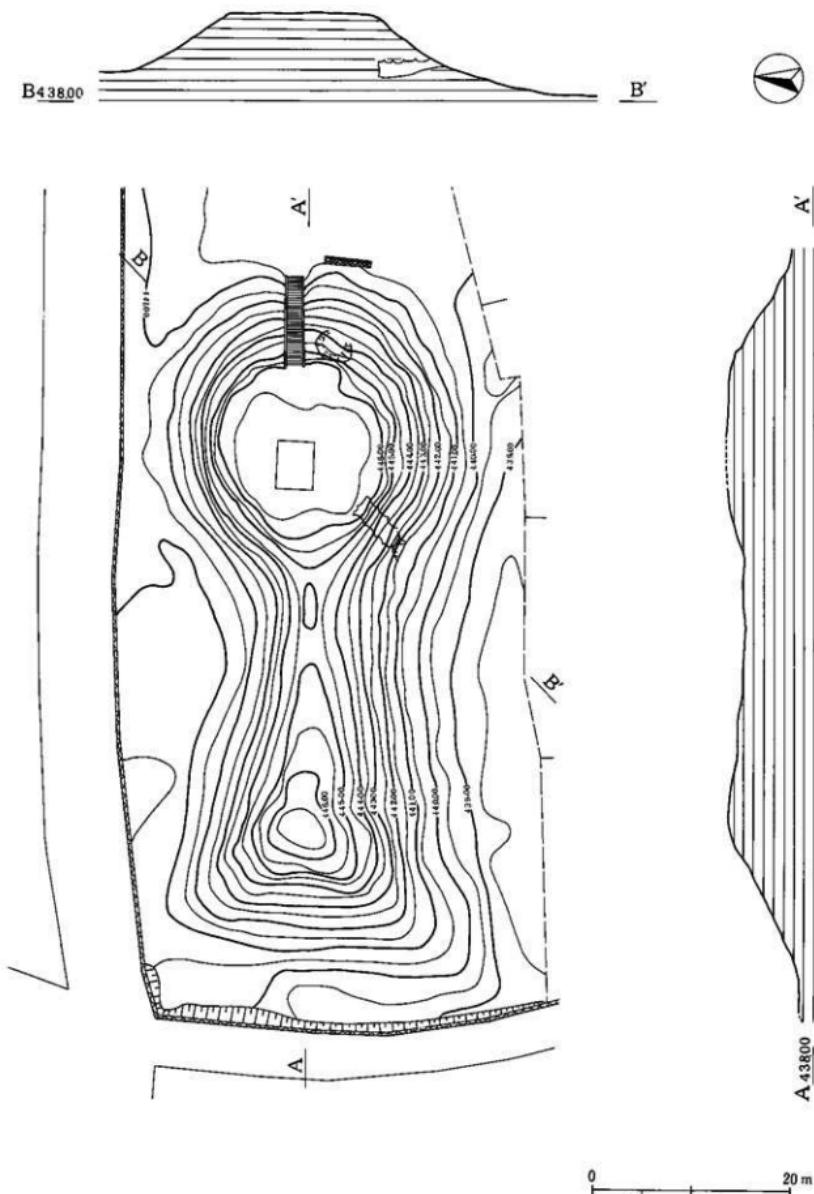
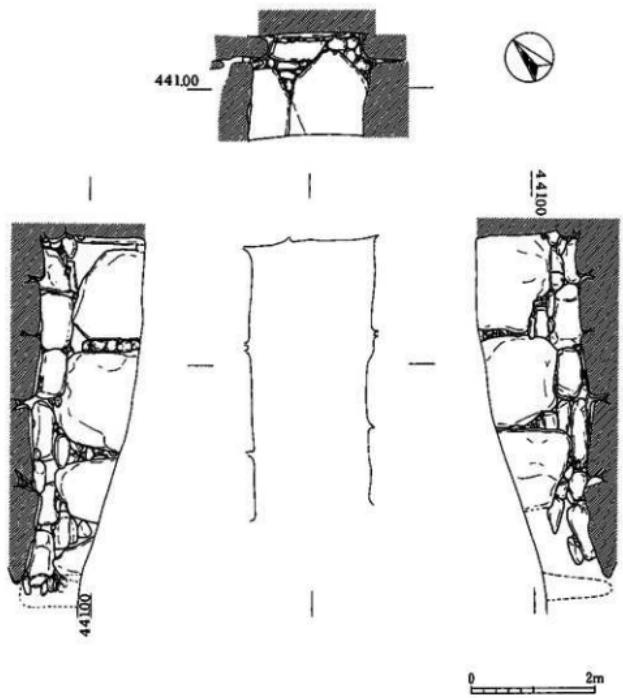


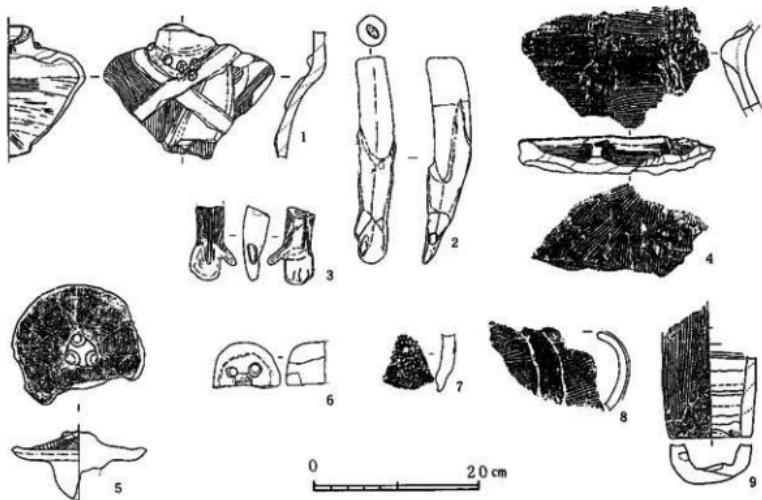
插圖2 墳丘測量圖

（文献Cより再トレース）



挿図 3 横穴式石室実測図

(文献 C より再トレス)



挿図 4 人物埴輪・形象埴輪

(文献 C より)



横穴式石室入口

(平成18年撮影)



横穴式石室内部

(平成18年撮影)

2 北本城古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市座光寺1745
- 2) 立地 飯田市座光寺地区の上位段丘端部に位置し、天竜川の支流である土曾川と南大島川に画された天竜川に面した段丘端部の東隅に立地する。
- 3) 現状 昭和56年度の発掘調査後、石室のみを解体して、新設された座光寺小学校内の原位置に近い場所へ移転復元し、学校教材として活用されている。
- 4) 調査歴 昭和56年度 座光寺小学校移転工事に先立つ発掘調査（文献 b）
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N74° E 墳丘長24m（周溝を含む全長推定30m）
後円部径16m・高さ2.5m 前方部幅推定13m・高さ2.3m（文献 b）
- 6) 外部施設 周溝・葺石・埴輪－北側くびれ部で埴輪配列確認（文献 b）
- 7) 埋葬施設 橫穴式石室 主軸方向N30° E 石室全長6m
幅奥より1.6～1.7m・高さ1.4m 入口部段差有 前庭部有（文献 b）
- 8) 出土遺物 円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪片
石室内…鉄刀片・鉄片1・鐵鎌・刀子1・馬具（素環鏡板付轡1・兵庫鎖1・鉢具3・留金具20・飾金具片2・辻金具1・資金具1）・釘5・漆皮膜・土師器破片（杯2・高杯1）・須恵器（杯蓋2・杯身2・平瓶1・提瓶1・趨1・長頸壺1）
石室外前庭部…鉄地金銅張精円形鏡板付轡1・鐵鎌・土師器（高杯10以上・杯20以上・小形甕3以上）・須恵器（杯蓋4・杯身1・高杯5・有蓋高杯2・壺1・短頸壺1・平瓶2）
周溝…須恵器（蓋杯・甕1・趨1）
- (文献 b)

2 概要

中位段丘端部の下位段丘上にある新井原・高岡古墳群・恒川遺跡群などを見下ろす場所に築造されている。中世山城である北本城跡を調査中に新たに確認された古墳である。確認時は、築城時の土塁としての改変が著しかったが横穴式石室を持つ前方後円墳であると判断された。石室は両側壁の最下段に平石を立てて並べ、その上に2段程度小型の石を横積みする石の積み方がされており、入口部には片側に石が立てられ、石室底部と段差がみられることから、いわゆる、竪穴系横口式石室に属すると考えられる。

3 時期

出土遺物及び石室の形態から6世紀初頭と判断される。

『集成』では、川西氏の埴輪編年のV式にあたるとされ、8期に比定されている。

4 周辺の状況等

座光寺地区の主要な古墳は下位段丘上に分布し、本墳のみが段丘突端に築造されている。本墳及び高岡1号古墳・畦地1号古墳の3古墳は共通した石室構造を呈し、特定の集団の存在や関連する他地域の考證に大きな示唆を与えている。

引用文献

- b 飯田市教育委員会 2003『北本城々跡・北本城古墳』

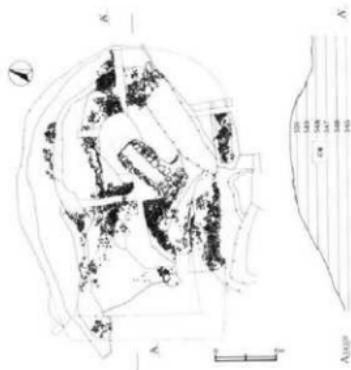


図5 塗丘測量図 (文献bより一部改変)



壇丘全景（北より）

(昭和56年度調査時)

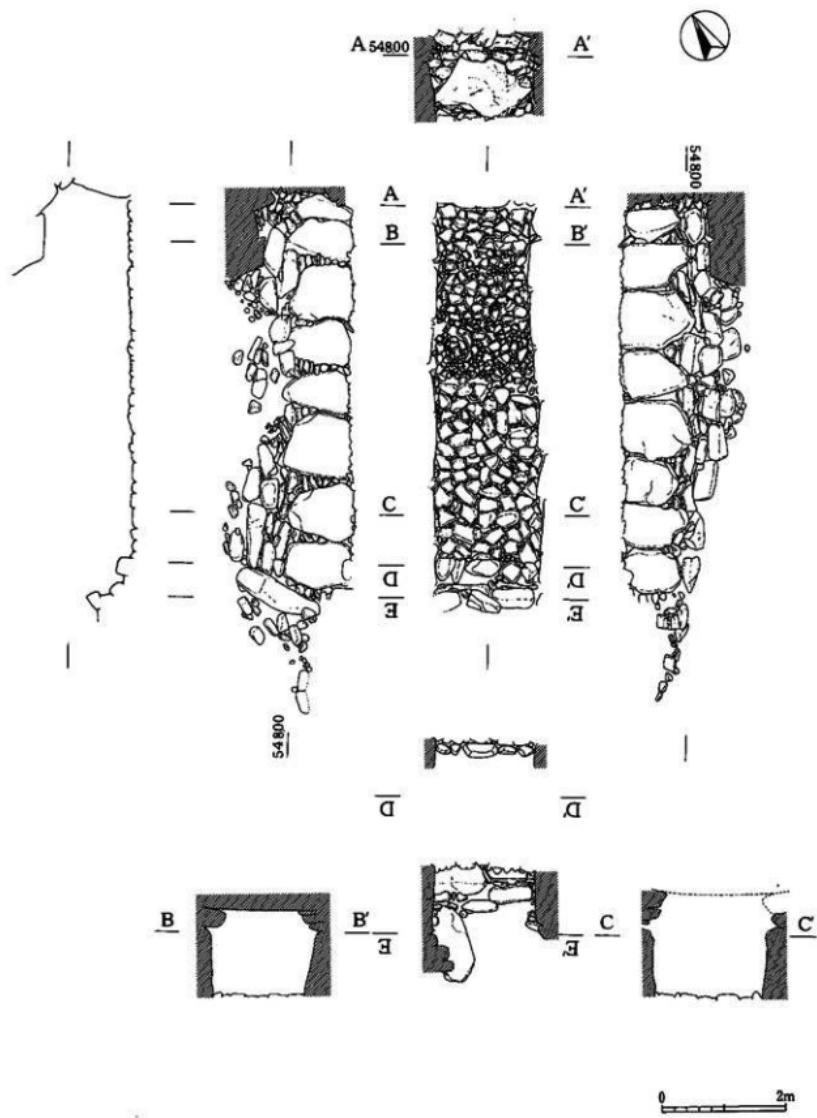


図6 横穴式石室実測図

(文献6より一部改変)



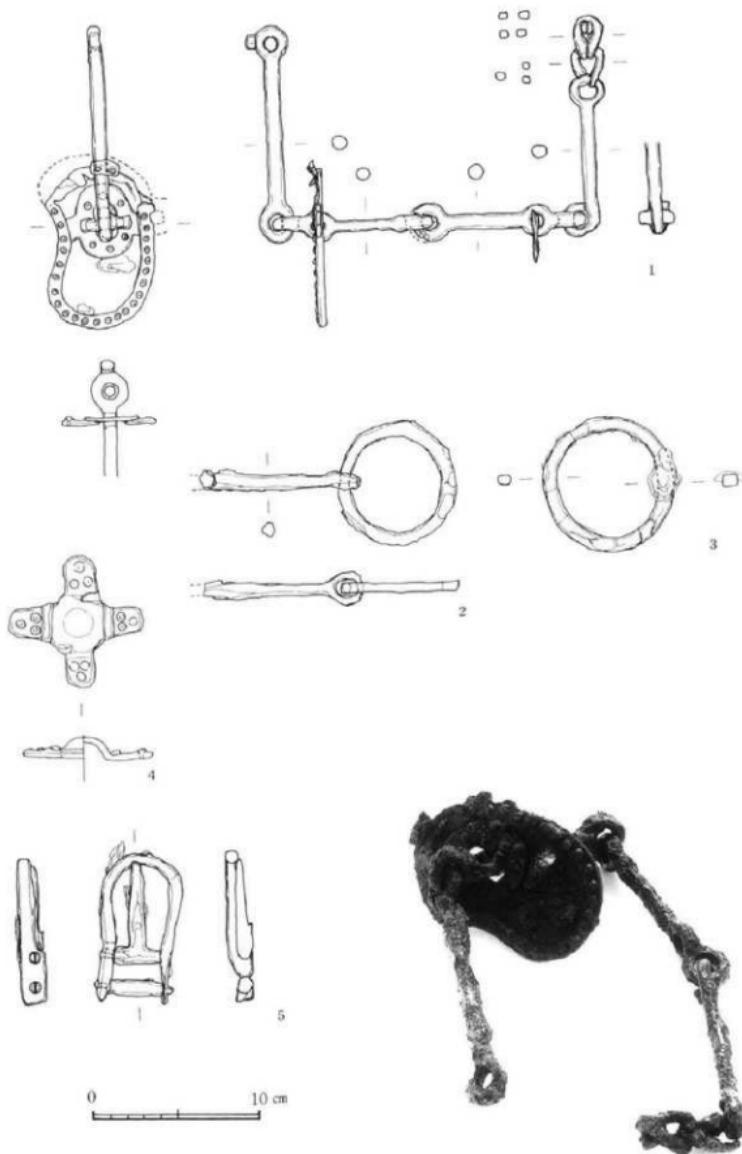
横穴式石室全景（東より）



横穴式石室底部



横穴式石室入口（石室内より）



挿図7 馬具 (1- 石室外、2~5- 石室内)
(文献bより)

精円形鏡板付轡



横穴式石室内出土須恵器



石室前庭部出土須恵器



西側周溝出土須恵器

3 新井原12号古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市座光寺4782
- 2) 立地 飯田市座光寺地区の北東部低地、天竜川右岸の河岸段丘の緩斜地にあり、高岡1号古墳の北東240mの位置にある。
- 3) 現状 墳丘の大部分はJR飯田線と一般国道153号座光寺バイパス建設で破壊されており、墳丘の封土の一部が痕跡程度に残存している。
- 4) 調査歴 大正11年 伊那電車鉄道の線路建設に先立ち内務省担当官による竪穴式石室発掘調査（文献a）
昭和55年 一般国道153号座光寺バイパス建設に先立ち墳丘・石室の一部を発掘調査（文献b）
- 5) 形態・規模 墓立貝形古墳 主軸方向N50°E 墳丘長25m（周溝を含む全長36m）
後円部径推定22~23m 前方部幅推定15m （文献b）
- 6) 外部施設 周溝・葺石・埴輪 - 前方部西側で埴輪配列確認（文献a・b）
- 7) 埋葬施設 竪穴式石室 長軸2.3m 短軸1.9m 高さ0.83m 朱有（文献a）
- 8) 出土遺物 円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪片（甲？1他）（文献a・b）
石室内…鉄鎌3・金具1・朱・木棺の一部
石室外…鉄刀1・鉄鎌2束・横矧板銛留短甲1・金具片7
その他…鞘破片1・土師器破片6・須恵器破片15（文献a）
鉄劍2・鉄鎌40（文献b）

2 概要

文献aでは、竪穴式石室を持つ径28m、高さ5.5mの円墳とされていたが、昭和55年の調査で墓立貝形古墳であることが確認された。新井原古墳群の主墳的存在であり、古墳の北東部には金銅製の馬具を装着した馬一頭が埋葬された土壙（4号土壙）が確認されている。

3 時期

出土遺物及び石室の形態から5世紀後半と判断される。

『集成』によると、7期に比定されている。

4 周辺の状況等

新井原12号古墳の周辺には10数基の円墳が集中して造られており、新井原古墳群を形成している。その中の全長40mの円墳である新井原2号古墳からは甲冑・刀剣類とともに鹿の線刻のある埴輪など特徴ある埴輪が数多く出土している。また、西側周溝からは馬を埋葬した土壙3基が確認されている。この周辺には高岡古墳群、石行古墳群も立地しており、集落域から隔離された墓域を形成している。また、

これらの古墳群の南側には該期の集落遺跡である恒川遺跡群があり、その後は律令期の伊那郡衙所在地となる。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
- b 長野県史刊行会 1988『長野県史』全一巻(三)
- c 下伊那誌編纂会 1991『下伊那史』第一巻

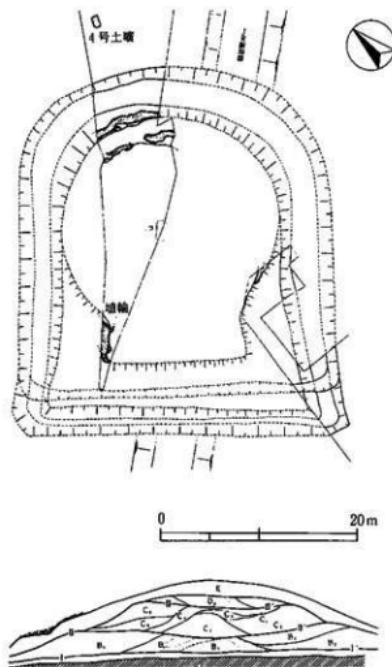
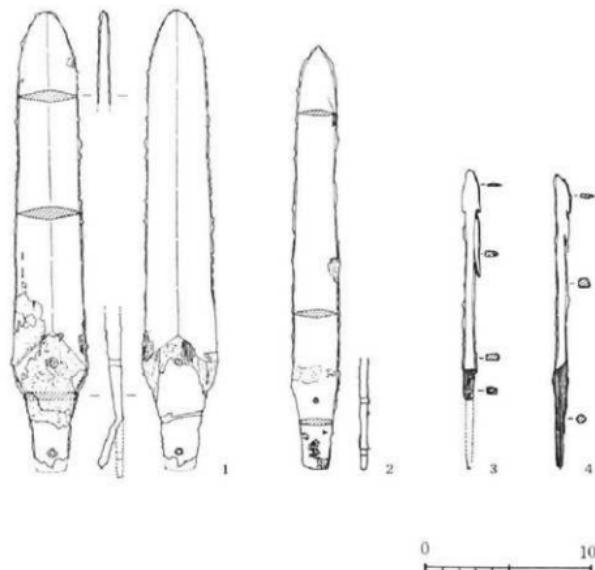


図8 墓丘測量図（上）・墓丘断面模式図（下）

（文献bより）



挿図9 鉄剣・鉄鎌

(文献bより)



埴輪

4 溝口の塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市上郷別府1327
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川の氾濫原を南に見下ろす標高427mの低位段丘上に位置し、南西から北東に向かって低くなる緩傾斜地に古墳は築造されている。
- 3) 現状 一般国道153号飯田バイパス建設のため現在は残っていない。
- 4) 調査歴 平成8~10年度 国道153号線飯田バイパス建設に先立つ発掘調査（文献b）
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N36°E 墳丘長推定47.5m(周溝含む全長推定65.5m)
後円部径約28m 高さ5.2~5.9m 前方部幅推定34m（文献b）
- 6) 外部施設 周溝および周溝の外側を区画する溝・葺石・埴輪・くびれ部盛土内より土師器（高杯6）出土（文献b）
- 7) 埋葬施設 穹穴式石室 主軸方向N32°E 木棺
石室基底部長5.55m・幅0.9~1.05m・高さ0.95~1.1m（文献b）
- 8) 出土遺物 円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪
墳頂部…鉄刀4・短刀1・鐵鎌7・石突1・箇1・碧玉製管玉1
石室内…人骨・鉄劍1（剣装具付）・鉄刀3（うち2点鹿角装具装具）・鐵鎌64
(1群36・2群28)・鉄矛1・横矧板銅留衝角付冑（板鏡）1・三角板銅
留短甲1・頸甲1・肩甲1・横矧板銅留短甲1・琥珀製丸玉12・滑石製
白玉7・不明鉄製品・鹿角製品・漆皮膜（盾か）
周溝内…鉄劍1・土師器（壺1・長胴壺1・杯1・広口壺1・高杯1）須恵器
(杯蓋1・罐1・壺1・壺破片)
くびれ部盛土内…土師器（高杯6）
墳丘盛土内…鉄製鏃先1
- (文献b)

2 概要

文献aでは円墳とされていたが、発掘調査を進める中で前方後円墳であることを確認した。前方部は削平されていたが、葺石および周溝が確認できたことから、古墳の形態・規模について把握が可能となった。周溝は前方部側で底部幅約7mになり、全周すると判断される。さらに、前方部前端部側から墳丘西側にかけて周溝の外側を区画する底部幅1~3mの溝を確認した。調査区外となるため、区画溝の範囲は把握できなかった。

埋葬施設は、僅かに残る後円部の墳丘から未盗掘の穹穴式石室がほぼ完全な状態で確認され、内部から40歳前後の男性の人骨や甲冑・武器類を中心とする残存状態が良好な副葬品が多数出土しており、副葬品配置を把握することができた。

また、後円部のみではあるが、墳丘盛土および石室構築の工程を把握することができた。

3 時期

竪穴式石室内の副葬品や墳丘盛土内から出土した土師器類より5世紀後半と判断される。

4 周辺の状況等

溝口の塚古墳の周辺には、実態不明な番神塚古墳、宮の前垣外古墳、伊那谷最大級の前方後円墳である飯沼天神塚古墳が、古墳南側には連続して宮垣外遺跡の墓域群がある。北側は集落遺跡の高屋遺跡に連続している。特に宮垣外遺跡からは溝口の塚古墳との極めて密接な関連を持つ円形・方形の墳丘墓群とそれらに伴う馬の埋葬土壙が確認され、近隣集落の墓域を成している。

墓域を形成した集落の特定はされていないが、宮垣外遺跡の東縁部及びさらに東側に位置し、水田可耕地をひかえた矢崎遺跡・兼田遺跡、北側の高屋遺跡・高屋下遺跡との関連が伺える。

引用文献 a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻

b 飯田市教育委員会 2001『溝口の塚古墳』

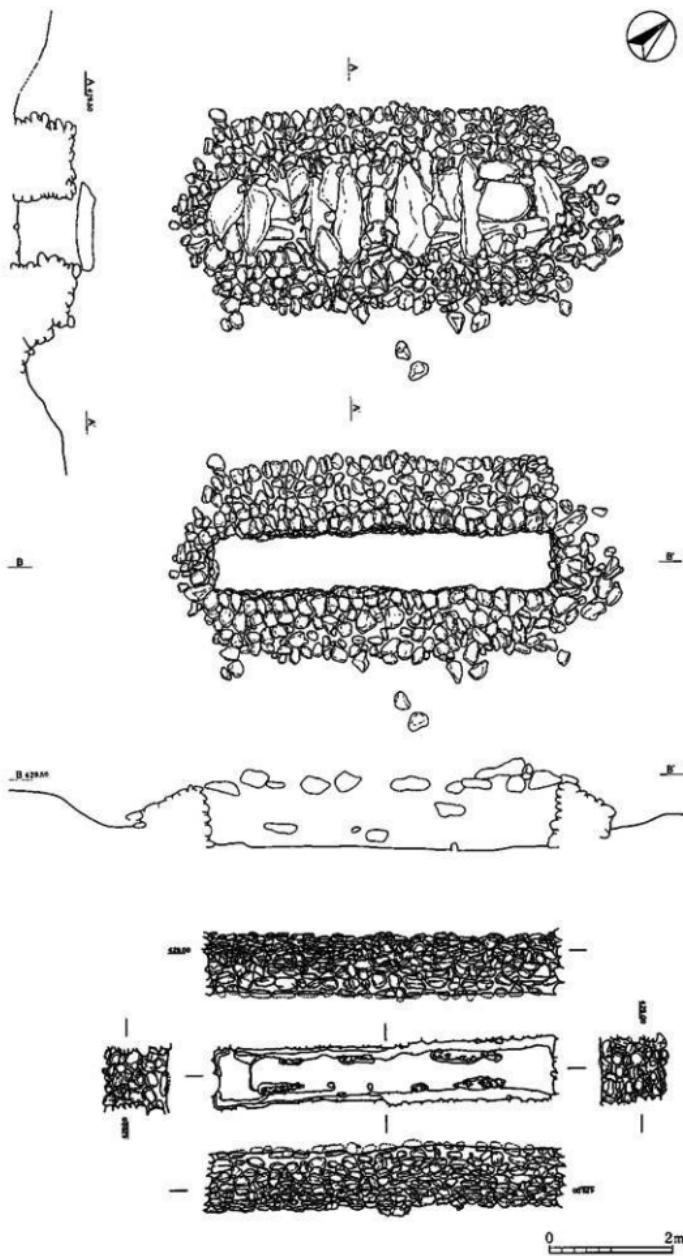


竪穴式石室　遺物出土状況



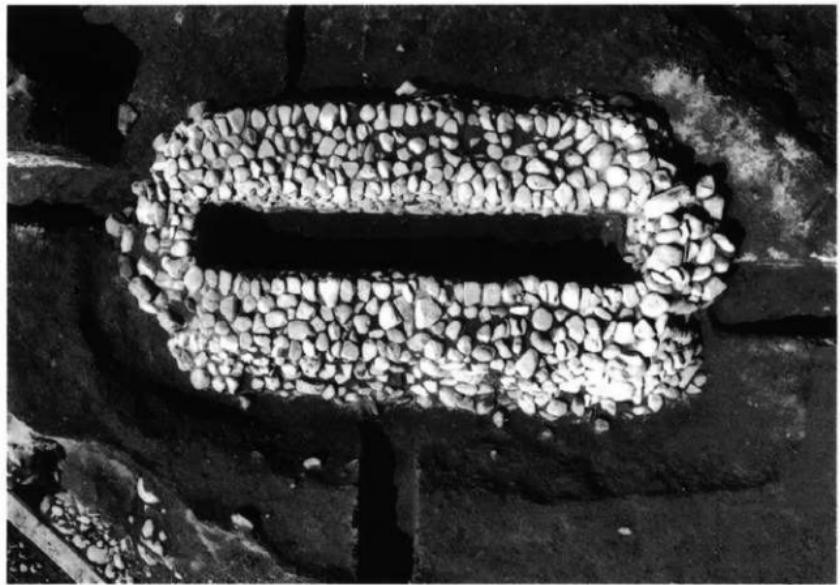
挿図10 墓丘測量図

(文献bより)



挿図11 積穴式石室実測図

(文献6より)



竪穴式石室全景

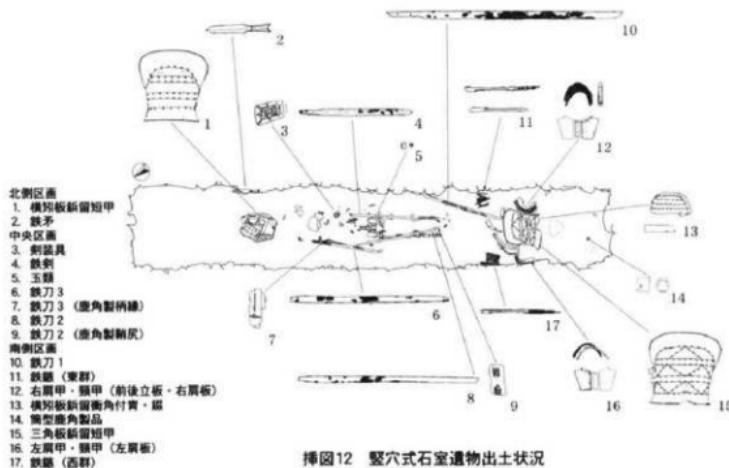


図12 穹穴式石室遺物出土状況

(文献bより)



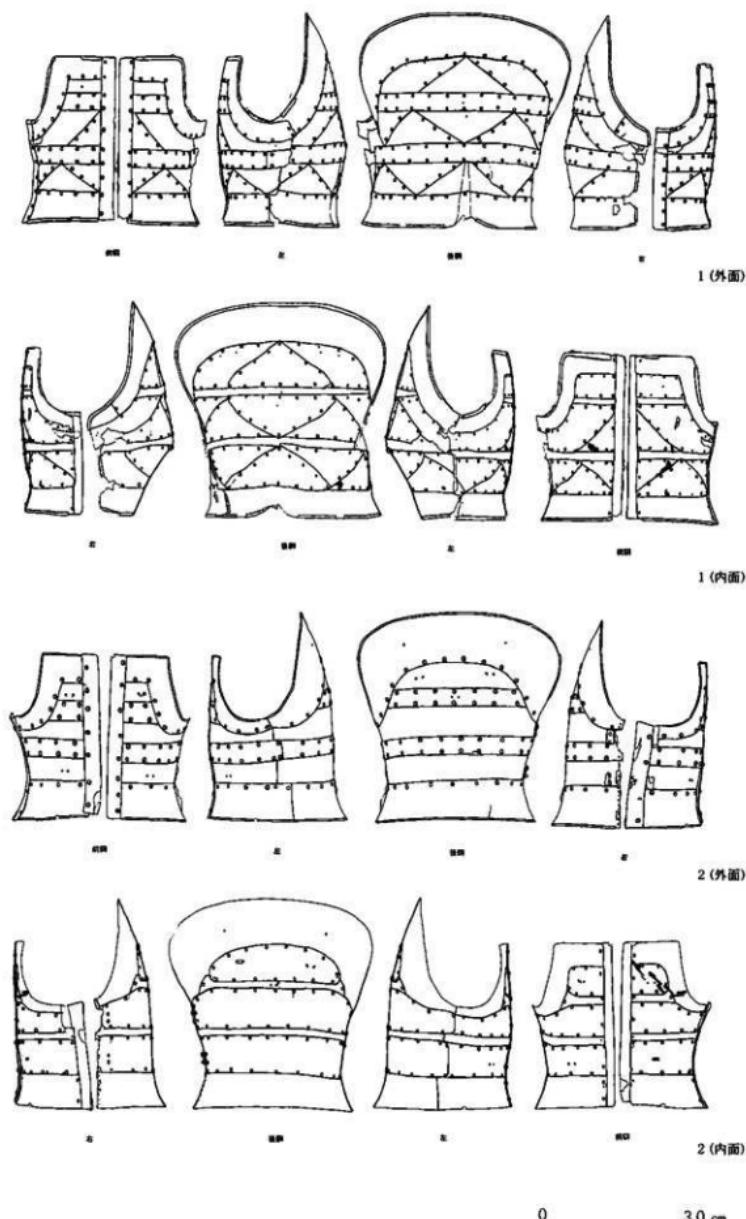
鉄劍 鉄刀・鉄矛 (上から出土状況 No.10・No.8・No.6・No.4・No.2)



剣装具 (出土状況No.3)

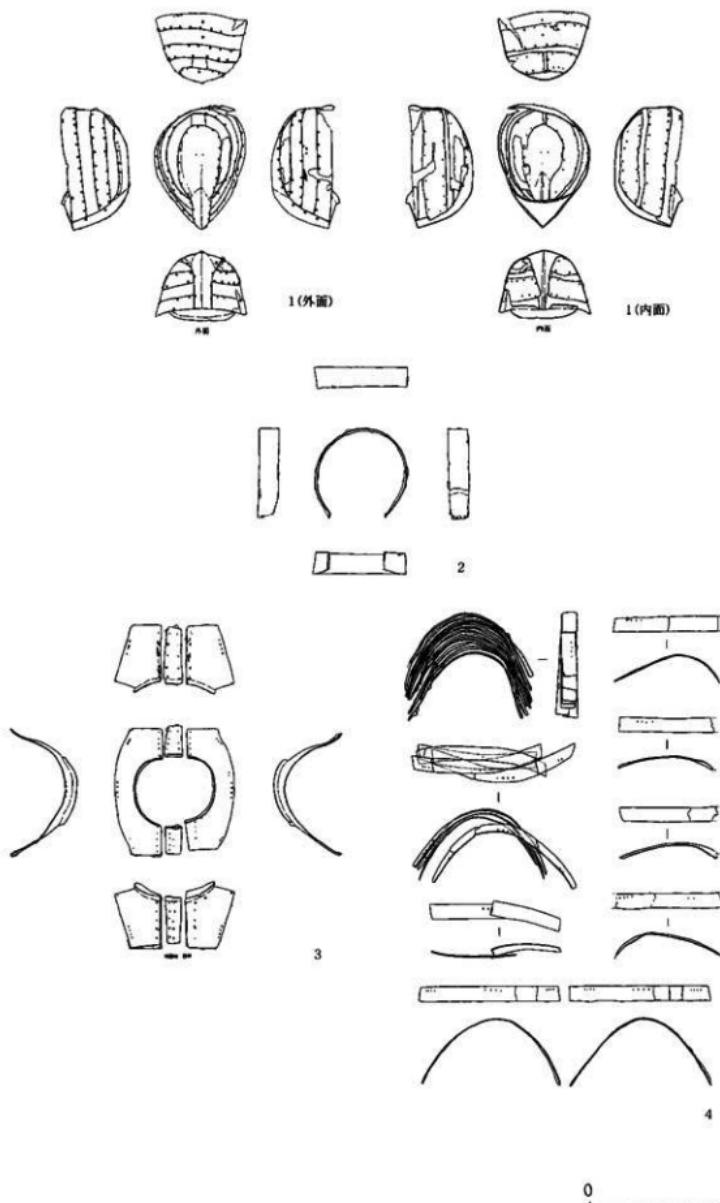


刀装具 (出土状況No.7)



挿図13 甲冑（1-三角板紙留短甲No.15 2-横矧板紙留短甲No.1）

(文献6より)



摺図14 甲冑 (1- 衛角付冑No.13、2- 板鎧No.13、3- 頸甲No.12・16、4- 肩甲No.12・16)

(文献bより)



甲冑一式



後円部墳頂部出土鐵刀・鐵鎌・石突・鏃



動物の線刻のある埴輪



円筒埴輪



円筒埴輪（線刻）

5 番神塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市上郷別府1683
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川の氾濫原を南に見下ろす標高427mの低位段丘上に位置し、南西から北東に向かって低くなる緩傾斜地に立地する。
- 3) 現状 消滅してその痕跡を留めない。
- 4) 調査歴 なし
- 5) 形態・規模 前方後円墳 東西24m 南北35m (文献a)
- 6) 外部施設 墓輪 (文献a)
- 7) 埋葬施設 石室 長5.5m (文献a)
- 8) 出土遺物 円筒埴輪片
五鈴鏡1・直刀3・馬具(金銅製杏葉1他)・玉類(勾玉・管玉・小玉他)・環珞・須恵器10以上(杯10以上・罐)・金環3・砥石1 (文献a)

2 概要

文献aによると、番神塚古墳は飯沼天神塚(雲彩寺)古墳の東南約100mの所にあった石室を有する古墳であったとされ、明治34年、地主が古墳を掘った際、石室内より鏡・馬具・玉類・須恵器他が多数出土したことが記述されている。筆者は、かつて転形であったとされ、古墳の跡が長楕円形の小高い畠となつて残っていること、出土が伝えられる遺物が豊富であることから前方後円墳の可能性を指摘している。

3 時期

墳丘は削平され、出土遺物についても残っていないことから、詳細な時期については不明である。

4 周辺の状況等

古墳は高屋遺跡内にある。番神塚古墳を挟んで、南側には5世紀代の溝口の塚古墳、北西側には6世紀代の飯沼天神塚(雲彩寺)古墳という2つの前方後円墳が位置している。平成10年度には、古墳隣接地において、一般国道153号飯田バイパス工事に先立つ発掘調査が実施されたが関連する遺構は確認されなかった。

引用文献 a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻

6 飯沼天神塚（雲彩寺）古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市上郷飯沼3334-1他
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川の氾濫原を南に見下ろす標高430mの低位段丘上に位置し、西側で上郷地区を上段・下段に分ける比高差40mを計る急な段丘崖と接する。
- 3) 現状 雲彩寺の境内地であり、東側くびれ部周辺が本堂造営のために削平されている。後円部の西側はほぼ墳丘の形態を保っているが、前方部と後円部東側は墓地が石垣によって何段かに作られている。墳丘周辺も道路建設、宅地化が進んでいる。
- 4) 調査歴 なし
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N22°W 墳丘長74.5m
後円部径31m・高さ8.5m 前方部幅推定39.4m・高さ7.5m（文献a）
- 6) 外部施設
- 7) 埋葬施設 横穴式石室 主軸方向N105°E 石室全長12.6m以上
玄室長4.6m以上・幅約2.3m・高さ約1.6m
羨道部長8m以上・幅奥より0.8~0.6m・高さ0.8m（文献b）
- 8) 出土遺物 四鈴鏡1・神獸鏡?片1・單鳳環頭柄頭1・鐵鐵1・馬鈴2・鈴2・杏葉4・雲珠2・金環1・銀・金銅製空玉3・金銅製蜜柑玉1・切子玉1・白玉2・棗玉3・小玉1・須恵器（杯2・平瓶1）
（文献a）

2 概要

全長74.5mを測る飯田下伊那地方最大の前方後円墳である。前方部に古くから天神様が祀られていたことから天神塚古墳というが、現在雲彩寺の境内地にあることから雲彩寺古墳とも呼ばれている。

寛政5年に寺地を拡張するために後円部東側を中心に墳丘を削平した際、横穴式石室の玄室部奥壁が壊され開口したと寺の住職が記した『雲彩寺略記』に記述されている。この時、馬鈴、鏡類等の副葬品が多数出土し、市岡智寛が記した『雲彩寺所藏古物之図』に出土遺物が図示されている。現在それらの遺物は散逸し、馬鈴2個と金環1個が残るのみである。石室は奥壁の破壊により、北側側壁の一部が積み替えられているため天井石が一部下に落ちているが、羨道部は閉塞されたまま完全に残っている。現在でも赤影が残る。昭和40年、長野県史跡に指定された。

石室は比較的小型の石材を用いて構築され、狭長な羨道部に特徴があり、これに類似する横穴式石室は当地方において他に例がない。

3 時期

石室の形態や『雲彩寺所藏古物之図』に図示されている遺物から6世紀前半から中頃と判断される。『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

本古墳の周辺には古墳が多く存在する。南側には横穴式石室を持つ円墳である化石1号、2号古墳があり、また東南部には前方後円墳の可能性が指摘されている番神塚古墳がある。さらに南には、横穴式石室導入前夜の様相を示す溝口の塚古墳やそれに関連する宮垣外遺跡の円形・方形の墳丘墓群があり、5世紀から6世紀にかけて連続して前方後円墳を中心に古墳が築造される様相が見てとれる地域である。

該期の集落としては、古墳より北側に立地する蔽越遺跡で竪穴住居址等が調査され、東側の一帯も集落城と推測される。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
- b 白石太一郎 1988「伊那谷の横穴式石室(一)(二)」『信濃』第40巻第7・8号
- c 長野県史刊行会 1988『長野県史』全一巻(三)
- d 松尾昌彦 1985「信濃の馬具」『東日本における古墳時代遺跡・遺物の基礎的研究』



古墳全景(西より)
大正11年撮影
(下伊那教育会 市村文庫)



古墳全景(南西より)
(平成18年撮影)

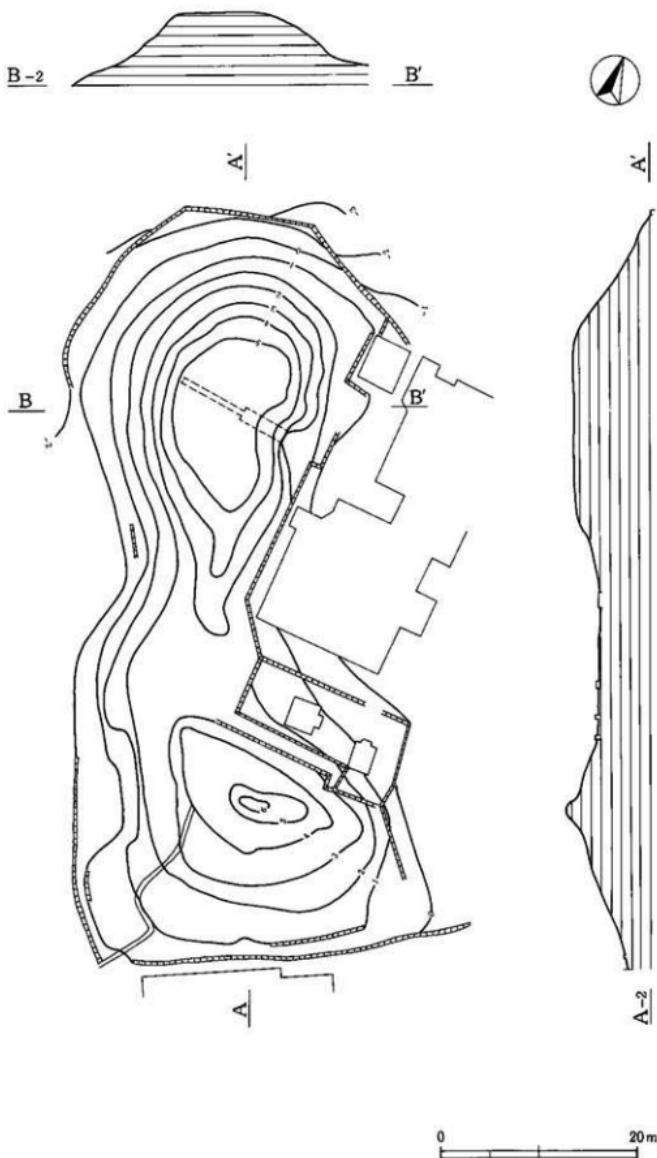
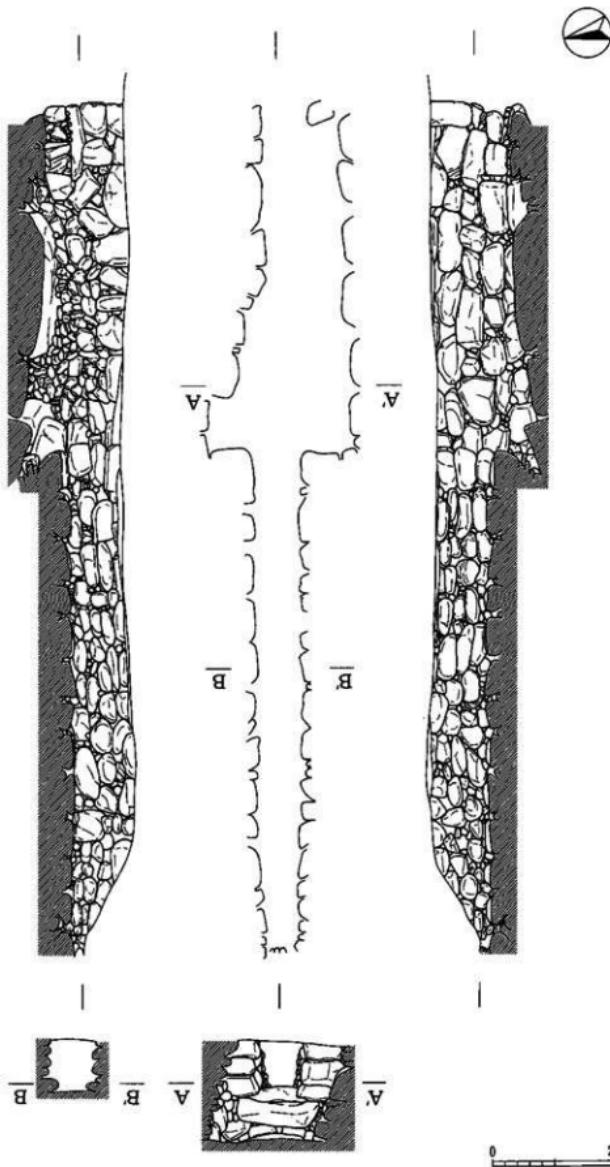


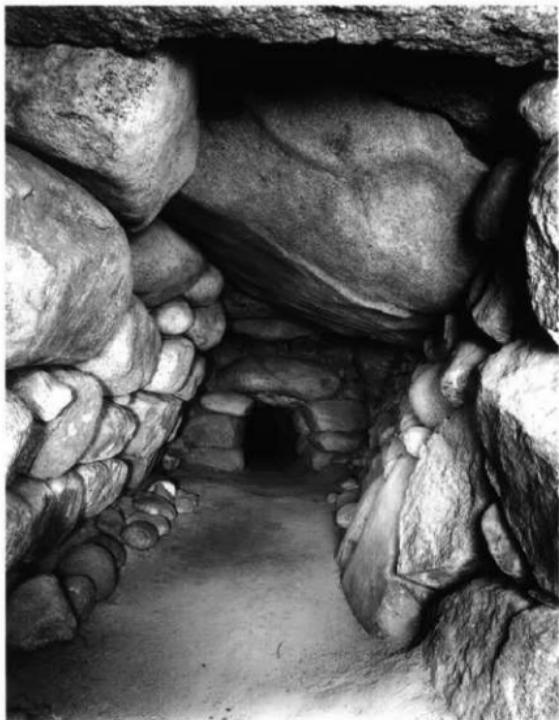
図15 墳丘測量図

(文献aより再トレース)



挿図16 横穴式石室実測図

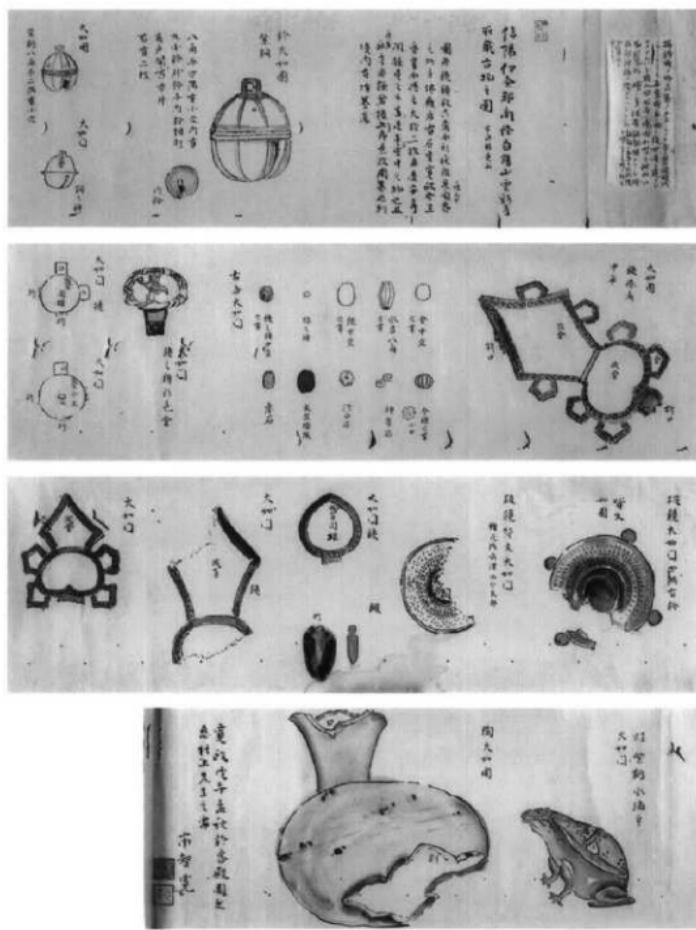
(文献より再トレース)



横穴式石室 玄室から羨道部を見る (平成18年撮影)



羨道部



市岡智寛「雲彩寺所藏古物之図」寛政10(1798)年



銅鈴・金環

挿図17 銅鈴 (文献dより)

7 代田山狐塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾代田1403-71
- 2) 立地 段丘端部に立地し、南南東に向かって傾斜する標高約460mの緩斜面に築造されている。
- 3) 現状 墓丘には崩落部分もみられるが、墓丘の北側及び西側は比較的旧状を良く残している。
- 4) 調査歴 平成5年度 墓丘測量調査（文献b）
- 5) 形態・規模 前方後方墳 主軸方向N17° E 墓丘長約42.0m
前方部長約28.0m・高さ北西側約2.87m
前方部長約14m・幅約19m・高さ北西側約1.5m（文献b）
- 6) 外部施設 周溝
- 7) 埋葬施設 穹穴式石室の可能性あり（文献b）。
- 8) 出土遺物

2 概要

文献aによると、代田山2号古墳ともいう。『集成』では前方後円墳となっているが、その後、前方後方墳であることが確認された。飯田下伊那地方唯一の前方後方墳であり、後方部の長さの1/2となる短く低い前方部を持つという特徴がみられる。また、測量調査時には遺物等が採取されておらず、墓丘上にほとんど礫が見られないことから葺石等の外部施設はなかった可能性がある。なお、現状でも墓丘の西側及び北側には幅約6m前後の周溝を確認することができる。平成6年に長野県史跡に指定。

3 時期

出土遺物等がみられず、詳細な時期は不明であるが、墓丘の形態等から古墳時代前期と推定される。『集成』によると、7~8期に比定されている。

4 周辺の状況等

北西側に東西径22.3m、南北径19.6mの円墳である代田山1号古墳が存在したと伝えられるが現存しない。また、北側にも円墳の3号古墳が所在するが、災害時の土取等により墓丘の大半が削平されており詳細は不明である。東側の一段低い段丘面上には前方後円墳である代田獅子塚古墳が所在し、その周辺はがにが原遺跡等の縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡が確認されている。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
 b 飯田市教育委員会 1994『長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査』
 c 中司照世他 1992「伊那谷の前方後方墳」『土筆』2

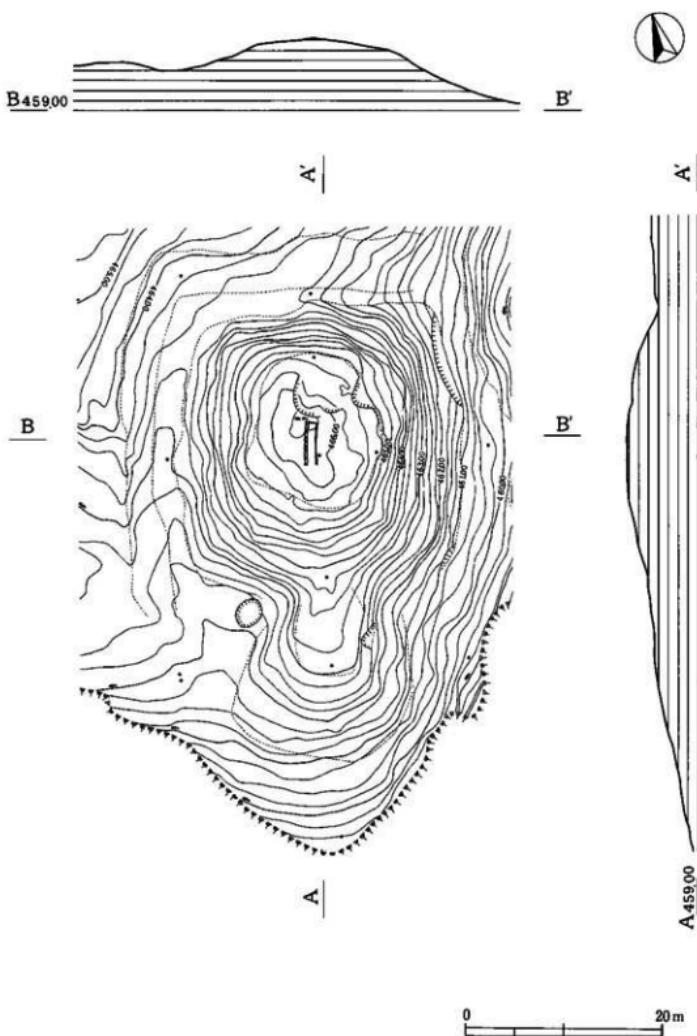


図18 墓丘測量図

(文献より一部改変)

8 茶柄山3号古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾287-1
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川の開析により形成された舌状に伸びる中位段丘の東側端部に立地する。標高はおよそ442mを測る。
- 3) 現状 全体のおよそ1/2が残存する。残存部分は墓地として利用されている。
- 4) 調査歴 平成7年度 一般国道153号飯田バイパス建設に先立ち発掘調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N53°E 墳丘長推定50m
- 6) 外部施設 周溝・葺石
- 7) 埋葬施設 穫穴式石室の可能性あり
周溝内に埋葬施設3基
- 8) 出土遺物 墓葬施設1…鏡1・刀子1
墓葬施設3…鉄劍1・鉄刀1・鐵鎌6・鏡2・L字形鐵器1・ガラス小玉5・土師器(杯1・壇1)・砥石2
周溝…須恵器(壺1・杯片1・龜3他)・土師器(壺3・杯1・高杯片多数・壇1)

2 概要

文献aでは、3号古墳、4号古墳が近接し、それぞれ円墳と捉えられていたが、前方後円墳の可能性も指摘されていた。また、3号古墳からは鉄劍・鉄刀が出土したとされている。しかし、平成7年度の発掘調査により3号古墳、4号古墳が1基の前方後円墳となることが確認された。墳丘は墓地造成のため大半が破壊されており、後円部北西側及びくびれ部付近で葺石が確認された。周溝は一部確認されたのみで詳細は不明である。周溝内の埋葬施設は木棺直葬とみられ、後円部北西側に2基(埋葬施設1・2)、前方部南西側に1基(埋葬施設3)確認されており、埋葬施設1・3より上記の遺物が出土している。

3 時期

周溝から出土した土師器・須恵器の年代から5世紀後半と判断される。

4 周辺の状況等

茶柄山古墳群は8基の古墳より構成され、3号古墳の西側およそ100mの同一段丘上に前方後円墳の御射山獅子塚古墳が存在する。

古墳群は3号古墳以外が円墳と推定される。平成7年度に2・3・5・9号古墳が調査され、9号古墳周溝内と墳裾より7基、古墳に近接して1基の馬の埋葬土壙が確認されている。また、2号古墳に近接して2基の馬の埋葬土壙が確認されており、このうち1基(土壙10)からは鉄製輪金具と三環鈴が出

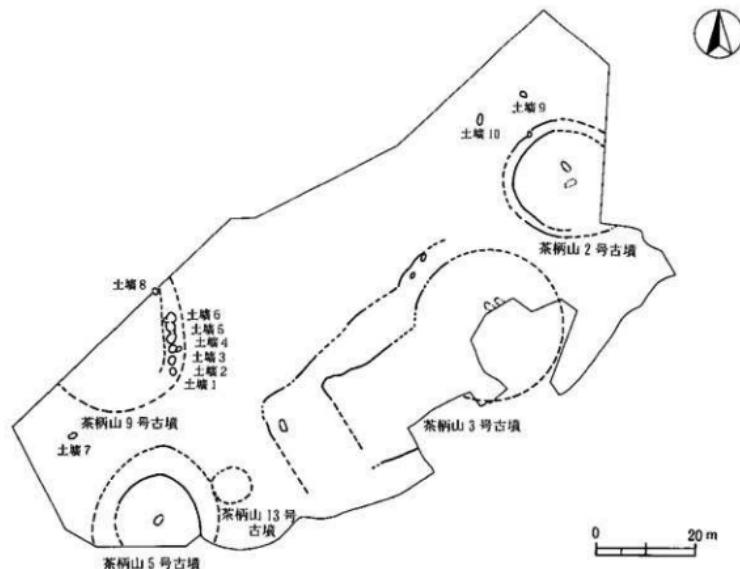
土し、馬具を装着したまま埋葬されたことが確認されている。また、古墳群南西側に近接する八幡原遺跡からは段丘端部に集中して方形周溝墓24基、土壙墓2基が確認されている。このうち方形周溝墓7は周溝内側法面に貼石が確認され、土壙墓からは鉄刀・箇・鐵鎌・鐵斧等が出土している。これらの方形周溝墓の構築時期は周溝内等の出土遺物から4世紀末から5世紀前半に位置付けられている。また八幡原遺跡に連続して妙見山古墳が所在する。妙見山古墳は一辺12mの方墳であり、古墳盛土から須恵器甕・杯の破片が出土している。

墓域形成の集落を特定できないが、段丘下には上溝遺跡等がある。

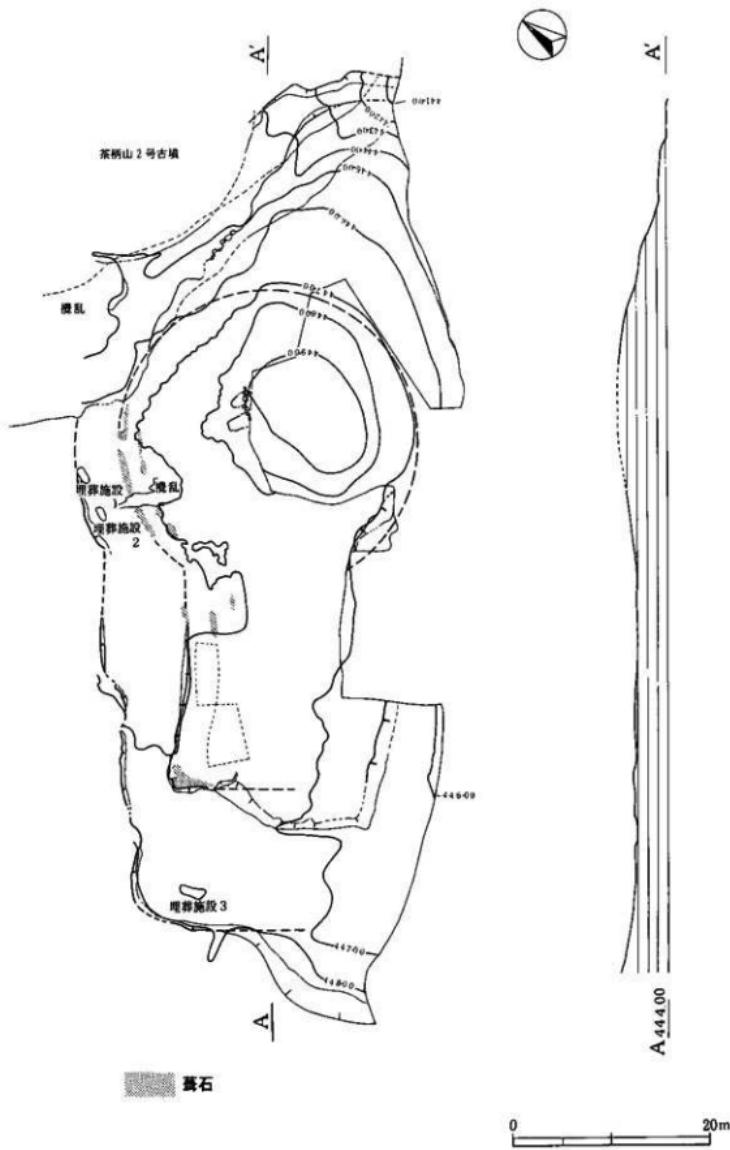
引用文献

a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻

b 小林正春 1994「長野の古墳－下伊那の古墳時代の埋葬馬」『日本考古学協会1994年度大会研究発表要旨』



挿図19 茶柄山古墳群調査区全体図



挿図20 墳丘測量図



茶柄山古墳群調査区全景（西側上空より）



埋葬施設3



前方部西側周溝出土須恵器

9 御射山獅子塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾久井284他
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川の開析により形成された舌状に伸びる段丘の東北側端部に立地する。標高はおよそ453mを測る。
- 3) 現状 後円部北側及び前方部西側端部が一部削られているが、全体として保存状況は良好である。周囲は宅地及び墓地として利用されている。
- 4) 調査歴 昭和57年 墳丘測量調査（文献 b）
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N64°E 墳丘長58.0m 後円部径25.6m 前方部幅44.8m 後円部と前方部の比高差1.7mで前方部が高い（文献 b）
- 6) 外部施設
- 7) 埋葬施設 横穴式石室があったとされる（文献 a）。
- 8) 出土遺物 土師器3・須恵器4（大甕片1他）（文献 a）

2 概要

文献 aによると、前方部の幅が後円部径より大きく、前方部が後円部に比し張り出す特徴がある。大正年間の下伊那史調査の数十年前には後円部に横穴式石室が存在し、周囲の開墾により破壊され石材が運び去られたと伝えられているが、現状では横穴式石室は確認できず、後円部頂にあるくぼみの状況は、横穴式石室の存在も伺わせる。また、石室内から鏡の出土も伝えられているが、所在は不明である。平成15年に飯田市史跡に指定されている。

3 時期

茶柄山古墳群の年代観から類推し、同様の5世紀代とすることが妥当と考えられる。

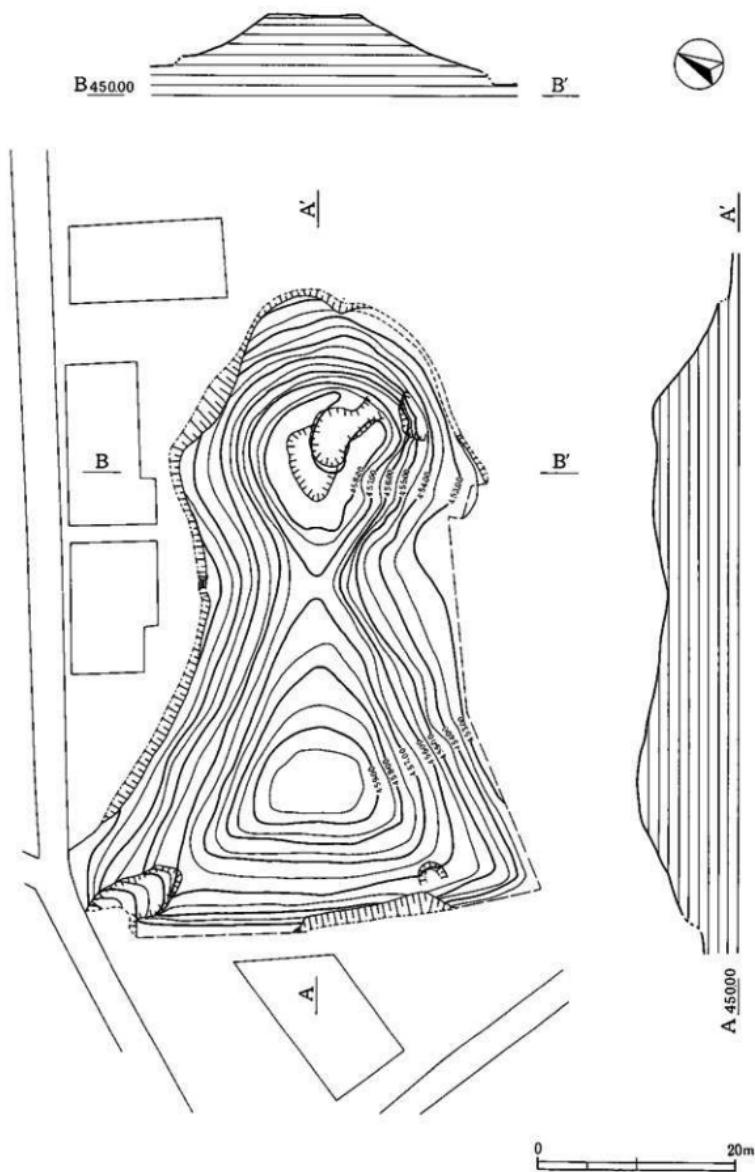
『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

本古墳東北側の同一段丘上に所在する茶柄山古墳群は8基の古墳より構成され、3号古墳は墳丘長が推定で50mの前方後円墳である。また、9号古墳は調査で周溝内および墳裾より7基、古墳に近接して1基、さらに2号古墳に近接して2基の馬の埋葬土壙がある。このうち1基（土壙10）からは鉄製輪金具と三環鈴が出土しており、馬具を装着していたことが確認されている。また南西側に所在する八幡原遺跡では、4世紀末から5世紀前半と推定される方形周溝墓が24基、土壙墓2基が確認されており、八幡原遺跡から東側に連続する段丘端部には一辺12mの方墳である妙見山古墳が確認されている。

引用文献 a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻

b 松尾昌彦他 1982「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」『信濃』第34巻第11号



挿図21 墳丘測量図

(文献より再トレス、一部追加)

10 羽場獅子塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾上溝3187他
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川および思井川の開析により形成された標高約414mの段丘の北東突端部に立地する。
- 3) 現状 前方部は削平されているが、後円部は児童公園内に所在し、葺石と推定される礫が散在している。
- 4) 調査歴 平成12年度 墳丘測量調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N45° E 墳丘長44.3m（前方後方墳の可能性あり）
後円部径21m・高さ北西側約2.8m 前方部幅13.6m・高さ2.4m（文献a）
- 6) 外部施設 葦石（文献a）
- 7) 埋葬施設
- 8) 出土遺物

2 概要

大正年間には墳丘が存在したが、昭和26年以前に前方部が崩され、現在の形状になったとされる。地域では墳丘上に祀られた三峯神の祠の存在から「三峯様の塚」と言われている。墳丘上には葺石と推定される人頭大の礫が散在しているものの、埴輪は確認されていない。石室等の伝承もなく、未発掘の可能性が高い。また、古墳の現状等から前方後方墳の可能性が指摘されている。（文献a）

3 時期

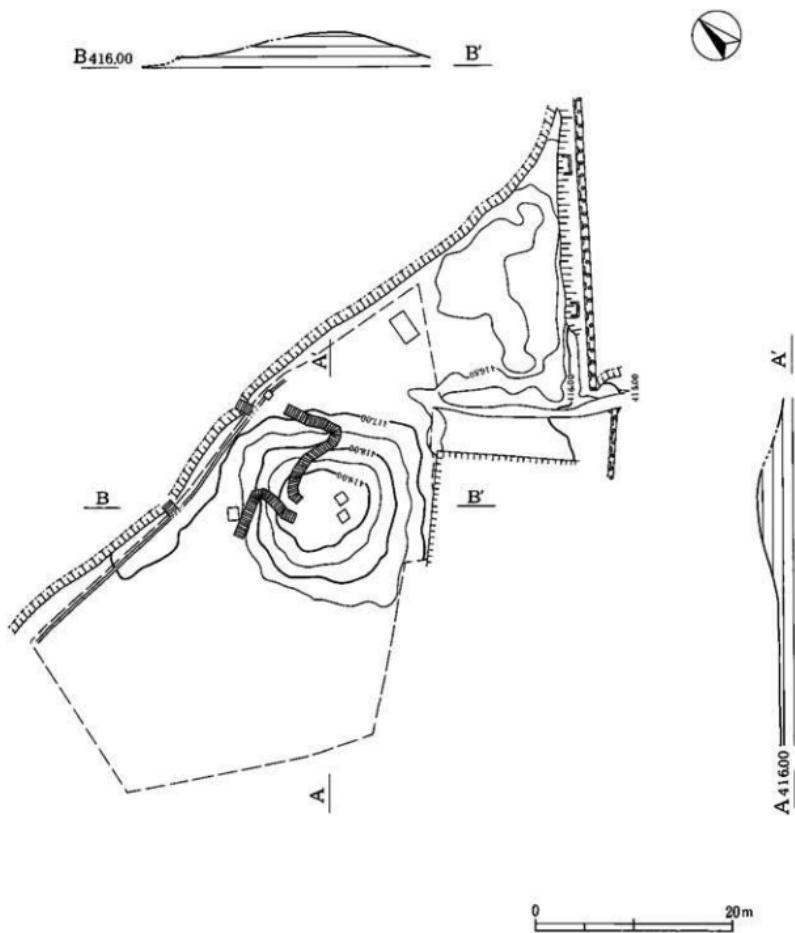
出土遺物等がみられず、詳細な時期は不明である。墳丘の状況から前方後方墳の可能性があり、竪穴系の埋葬施設をもち、5世紀を遡る年代が推定される。

4 周辺の状況等

南東側の一段低い段丘面上に妙前古墳群が近接する。妙前古墳群は15基の円墳から構成されており、このうち妙前大塚（3号）古墳では、2基の埋葬施設から県宝に指定された金銅装眉庇付舟をはじめとする武具・武器・工具・玉類が出土し、5世紀後半と考えられる。また、妙前古墳群周辺からは縄文時代中期から平安時代にかけての集落が確認されており、古墳時代後期の住居址等も多数検出されている。また、南東側の低位段丘上に所在する寺所遺跡からは、5世紀後半の円形・方形の低墳丘墓4基が確認されており、3基の墳丘墓の周溝及び近接する土壙内部から馬骨（歯）が出土している。

引用文献

a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻



摺図22 墓丘測量図

(平成12年度 测量調査より)

御射山獅子塚古墳 羽場獅子塚古墳



御射山獅子塚古墳全景

(平成18年撮影)



羽場獅子塚古墳全景

(平成18年撮影)

11 姫塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾上溝3366-1他
- 2) 立地 天竜川の支流飯田松川の開析により形成され東西へ舌状に伸びる段丘の北端部に立地する。標高はおよそ422mを測る。
- 3) 現状 墳丘裾部分が宅地や田畠利用のため削平され石垣積みとなっている箇所が多い。また後円部上には祠が祀られている。
- 4) 調査歴 昭和58・59年 石室測量調査（文献b）
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N60°E 墳丘長40m 後円部径23.6m・高さ5.4m
前方部幅23.6m・高さ5.2m（文献a）
- 6) 外部施設
- 7) 埋葬施設 横穴式石室 ほぼ真南に開口 石室全長4.2m以上
玄室長2.9m・幅1.8m・高さ1.4m
羨道部長1.3m以上・幅1.1m・高さ1.2m 赤彩あり（文献c）
- 8) 出土遺物 七鈴鏡1

2 概要

本古墳の石室は、後円部の墳丘中程に構築されており、ほぼ南向きに開口している。現在、羨道上部に石橋が架けられ、墳丘上の祠への参道として利用されていることから、羨道の入口周辺は後世の石積みと判断される。石室の形態は玄室部分に向かって右側に袖部をもつ片袖式で、側壁には川原石を用い、持ち送りが顕著にみられる特徴がある。また、石室内部に赤色顔料が塗布されており、現在も確認することができる。出土遺物の七鈴鏡は、享保年間以前に前方部から出土したと伝えられる。（文献a）

3 時期

石室形態及び位置から6世紀初頭と推測する。『集成』によると、8期に比定されている。

4 周辺の状況等

周辺には11基の円墳とおかん塚古墳・上溝天神塚古墳・姫塚古墳の3基の前方後円墳を含めた14基が上溝古墳群とされている。また、上溝古墳群西側の一段高い段丘上には茶柄山古墳群、東側には前方後円墳の羽場獅子塚古墳、一段低い段丘上には妙前古墳群が飯田松川に面する段丘端部に連続して所在する。また、上溝古墳群の東側にひろがる一段低い段丘上には、水城遺跡・妙前遺跡等の縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡が確認されている。

引用文献

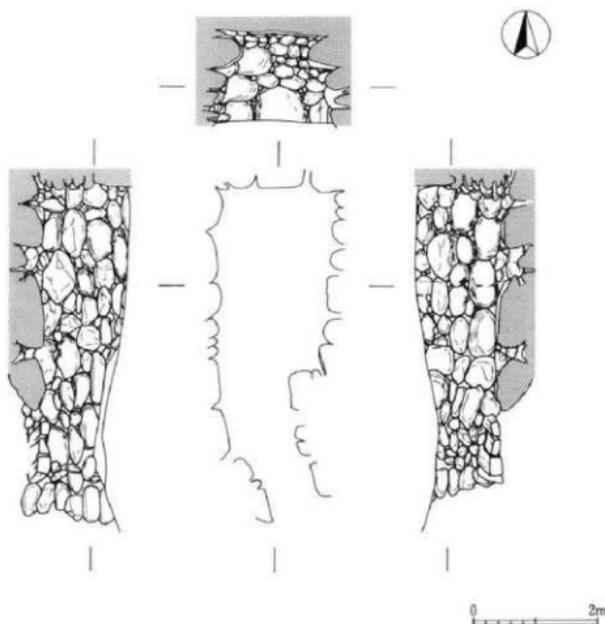
a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻

b 白石太一郎 1988「伊那谷の横穴式石室(一)(二)」『信濃』第40巻第7・8号



古墳全景

(平成18年撮影)



挿図23 横穴式石室実測図

(文献bより再トレース)



横穴式石室

(平成18年撮影)



同上

あげみぞてんじんづかこふん
12 上溝天神塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾上溝3384他
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川の開析により形成され東西へ舌状に伸びる段丘の南端部に立地する。標高はおよそ423mを測る。
- 3) 現状 墳丘を神社及び集会所として利用されてきたため、古墳としての原形は大きく変えられている。前方部は削平され一部に集会所が設けられ、後円部周囲にも石垣が巡らされている。また、後円部墳丘上には天神社が祀られ、社を取り囲むように石垣が積まれている。このため後円部の東側のみ墳丘を確認することができる。
- 4) 調査歴 昭和58年度 集会所建設に先立ち周溝及び墳丘一部発掘調査（文献b）
昭和58・59年 石室測量調査（文献c）
平成3年度 石室入口の崩落に伴い清掃調査および石室測量調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N75°E 墳丘長40m
後円部径推定21.8m・高さ7.9m 前方部幅推定17.3m・高さ2.7m（文献a）
昭和58年度調査による修正
主軸方向N78°E 墳丘長推定41.5m 後円部径22.5m 前方部幅31.0m
- 6) 外部施設 周溝および周溝の外側を区画する溝・葺石
- 7) 埋葬施設 横穴式石室 主軸方向N18°E 石室全長10.8m
玄室長7.7m・幅奥から2.4~2.7~2.5m・高さ奥から3.0~2.6m
羨道部長3.0m・幅1.8m・高さ2.2m（平成3年度調査による）
- 8) 出土遺物 鏡1・鐵鎌10・劍頭？（文献a）
土師器（杯・高杯）・須恵器破片（昭和58年度発掘調査）
刀装具（銀装圭頭柄頭1・鈎2・賣金具3・鞘尻金具？1）・鐵鎌多・馬具
(板状立聞環状鏡板付轡2・引手1・留金具20以上・辻金具・鉗具10以上・鞍金具2)・帶金具垂飾部1以上・金環6・玉類（銀製空玉6・銀製山梶玉2・金銅製山梶玉4・ガラス大玉8・ガラス小玉65・漆玉10・管玉2・白玉11）・裝飾付須恵器1・土師器（杯・暗文土器1）
(平成3年度石室清掃調査)

2 概要

本古墳には江戸時代から地域住民の信仰対象として墳頂部に天神社が祭られ、大正年間には上溝地区の集会所が建設され、地域住民の生活拠点として現在に至る経過がある。この集会所改築に先立ち昭和58年度に前方部端の墳丘調査が実施されている。この調査では、前方部側で盛土の工程を把握することができた。また、前方部北側で周溝の外側を区画する溝の一部を確認した。さらに、墳丘下部には5世紀代の堅穴住居址の存在が確認されている。

石室崩落に起因し、平成3年度に実施された石室内清掃・測量調査では上記の遺物が出土している。

石室内は後世の搅乱によりかなり荒れていたが、古墳の時期や石室の構造といった点で成果を得ることができた。出土遺物は6世紀代のものが中心となるが、暗文土器が出土していることから、7世紀末から8世紀後半まで追葬ないしは何らかの祭祀行為が行なわれていたと考えられる。

本古墳の石室は大型の自然石塊を用いており、いわゆる無袖式のものであるが、側壁の一部に内側に突出するものがあり袖を意識している可能性がある。立面上には天井石を下げることによって玄室と羨道部を区分する。

なお、現在石室は完全に復元され一般に公開されている。

3 時期

出土遺物から、6世紀前半の築造と判断される。

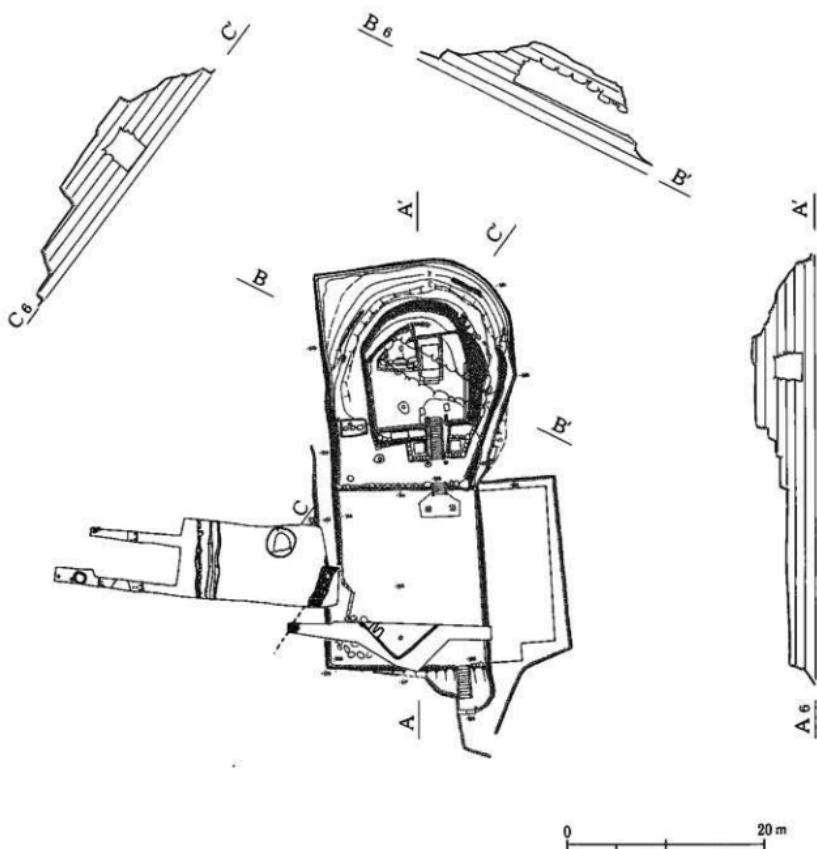
『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

上溝天神塚古墳周辺には11基の円墳、おかん塚古墳・姫塚古墳の2基の前方後円墳が所在し、上溝天神塚古墳を含めた14基が上溝古墳群として捉えることができる。このうち、姫塚古墳は上溝天神塚古墳の北東側およそ140mに、おかん塚古墳は西側へおよそ90mと極めて近接した位置にある。しかしながら現在は前方後円墳を除き円墳はすべて消滅している。これらの円墳の中で、上溝11号古墳は簡易圓場整備に先立ち平成14年度に発掘調査が実施されており、両袖式の横穴式石室、銀象嵌柄頭・鉄刀・須恵器杯等が出土している。一方、上溝古墳群西側の一段高い段丘上には茶柄山古墳群が所在し、東側には前方後円墳の羽場獅子塚古墳、一段低い段丘上には妙前古墳群が飯田松川に面する段丘端部に沿うような位置で所在している。また、上溝古墳群の東側にひろがる一段低い段丘上には、水城遺跡・妙前遺跡等の縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡が確認されている。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
- b 下伊那誌編纂会 1990『下伊那史』第一巻
- c 白石太一郎 1988「伊那谷の横穴式石室(一)(二)」『信濃』第40巻第7・8号



挿図24 墓丘測量図

(文献6より一部改変)



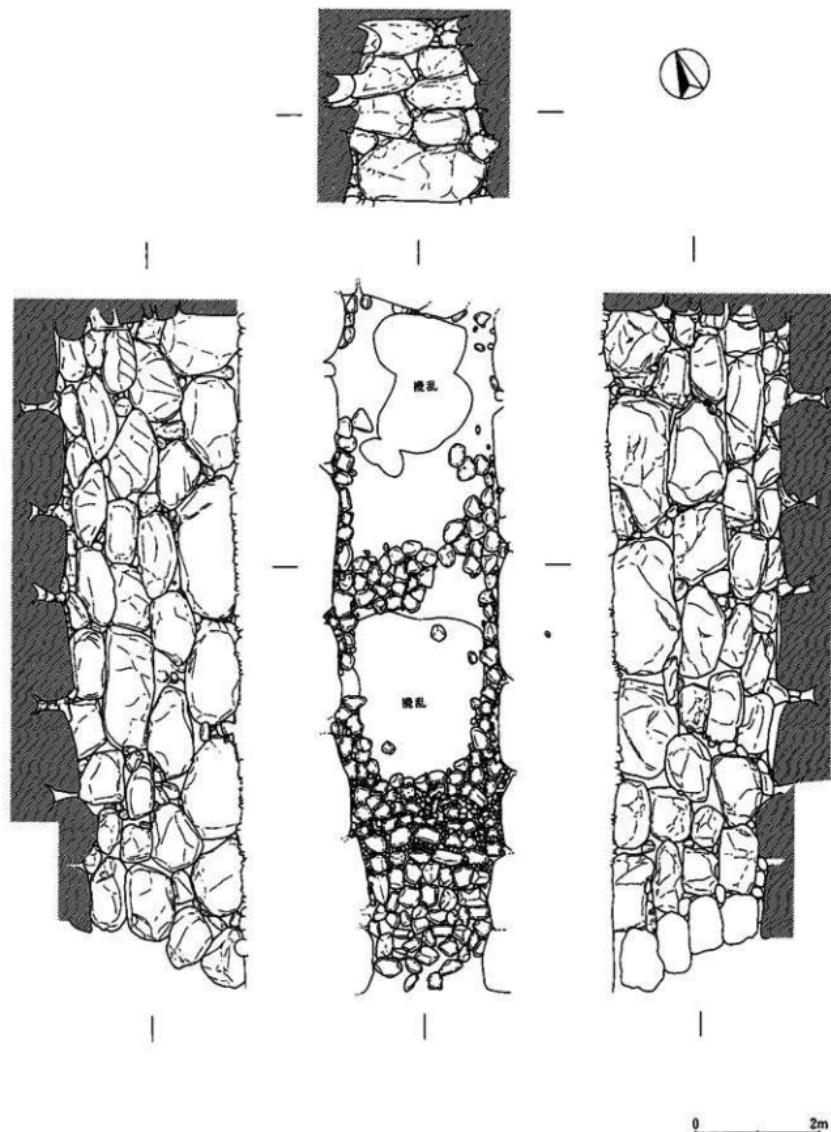
横穴式石室

(平成18年撮影)



前方部埴丘盛土断面

(昭和58年度調査時)



挿図25 横穴式石室実測図 (文献cより 平成3年度調査による一部追加)

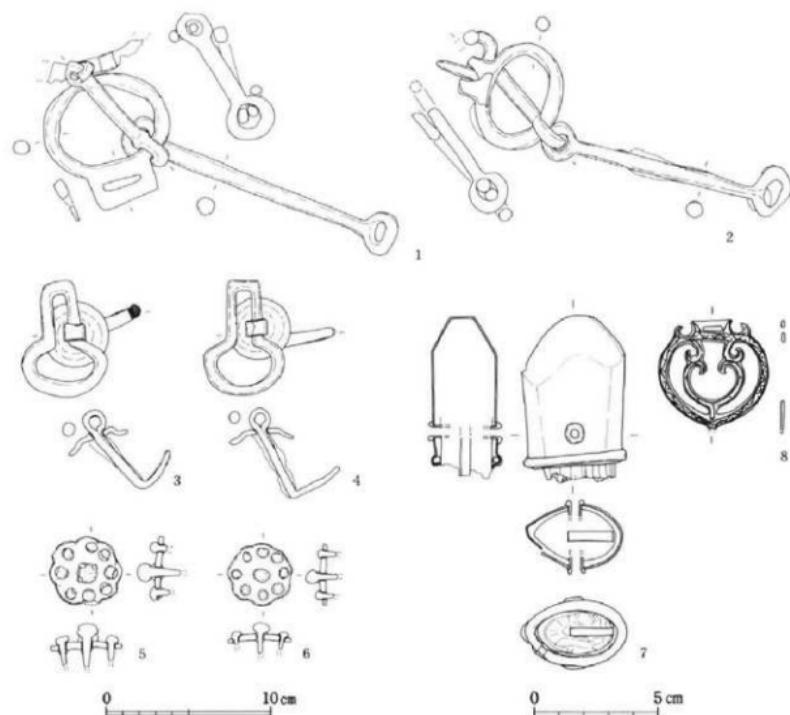


横穴式石室

(平成18年撮影)



同 上



擇図26 馬具・銀装主頭柄頭・帶金具



閉塞石周辺 遺物出土状況

(平成3年度調査時)



轡



銀裝馬頭柄頭



鞍金具・飾金具



帶金具



裝飾付須惠器



暗文土器

13 おかん塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾上溝2806他
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川の開析により形成され東西へ舌状に伸びる段丘上に立地する。標高はおよそ422mを測る。
- 3) 現状 下伊那史調査時には既に前方部と後円部が道路によって分断されており、前方部も昭和41年に土取りのため消滅した。現在は後円部のみ残る。周囲は宅地化し、後円部東側は一部墓地として利用されている。
- 4) 調査歴 昭和41年 前方部横穴式石室発掘調査（文献b・c）
昭和57年 後円部石室測量調査を実施（文献d）
平成18年 後円部石室羨道部確認調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N120° E 墳丘長現存41.8m（推定50m）
後円部径14.5m・高さ6.1m 前方部幅12.7m・高さ3.9m（文献a）
- 6) 外部施設
- 7) 埋葬施設 後円部…横穴式石室 主軸方向N15° E 石室全長9.2m
玄室長4.55m・幅奥から3.5～3.23m・高さ3.4m
羨道部長4.65m・幅1.6m・高さ1.82m（文献d）
平成18年度 羨道部調査による修正
主軸方向N12° E 石室全長10.6m 羨道部長6.05m・高さ1.9m
前方部…横穴式石室 主軸方向N12° E 石室全長3.1m以上
幅1.3～1.4m 高さ1.5～1.8m（文献e）
- 8) 出土遺物 後円部石室…鉢12・環珞1、ほかに鐵刀・馬具・須恵器等を発見したとあるが詳細不明（文献a）
前方部石室…鐵鎌11・鹿角装刀子1・馬具15（轡・杏葉・銛具・飾金具他）・白玉2)・須恵器破片3（高杯・壺）・土師器破片10（高杯）（文献e）

2 概要

明治初年に開口されたと推定される後円部の横穴式石室は、明治末年には石材が充買され、破壊寸前であったが、地元住民や地主の熱意により破壊から免れた経緯を持つ。この石室は大型の自然礫を用いた両袖式であるが、平面的に羨道と玄室の区別が明瞭であるばかりでなく、玄室部の天井を高く築造しており、視覚的にも明瞭な区別ができる特徴を有する。一方、前方部の石室は土取り中に発見され調査が実施されたが、残存部分の形状からは無袖式の可能性が高い。調査の記録によると石室は既に盜掘を受けて羨道部は破壊され、石室の途中に石を積み重ねて塞ぎ直していることが判明している。側壁及び天井石はすべて花崗岩の転石で、丸みを帯びており、床面には径5～10cm位の石が一面並んでおり、その下には黄色の粘りのある砂土を確認したとされている（文献b・c・e）。前方部及び後円部の石室

はほぼ平行する位置関係に築造されており、馬背塚古墳と同様な石室の配置が指摘されている（文献c）。

3 時期

横穴式石室の形態から、6世紀後半と判断される。

『集成』によると、10期に比定されている。

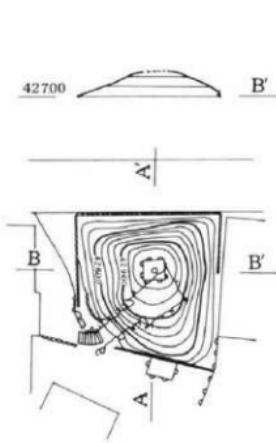
4 周辺の状況等

おかん塚古墳は14基の古墳から構成される上溝古墳群に含まれる。おかん塚古墳の東側およそ90mには、前方後円墳の上溝天神塚古墳が、また北東側には前方後円墳の姫塚古墳が近接する。しかしながら現在は前方後円墳を除き円墳はすべて消滅している。また、上溝古墳群西側の一段高い段丘上には茶柄山古墳群が所在し、東側には前方後円墳の羽場獅子塚古墳、一段低い段丘上には妙前古墳群が飯田松川に面する段丘端部に沿うような位置で所在している。また、上溝古墳群の東側にひろがる一段低い段丘上には、水城遺跡・妙前遺跡等の縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡が確認されている。

- | | |
|------|---|
| 引用文献 | a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻 |
| | b 大沢和夫 1966「おかん塚石室発掘の記」『伊那』6号 |
| | c 大沢和夫 1971「飯田市のおかん塚」『一志茂樹博士喜寿記念論集』 |
| | d 松尾昌彦他 1982「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」『信濃』第34巻第11号 |
| | e 下伊那誌編纂会 1990『下伊那史』第一巻 |

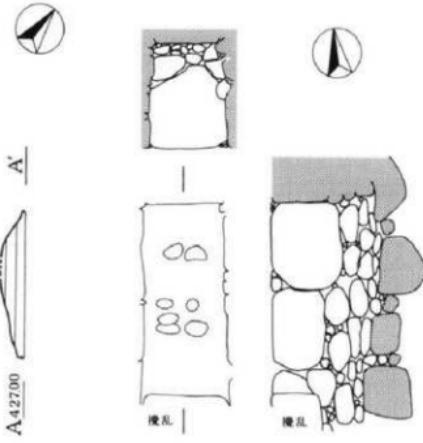


古墳全景（南から） 大正11年撮影（下伊那教育会 市村文庫）



0 20 m

挿図27 現在残る後円部墳丘測量図



0 2 m

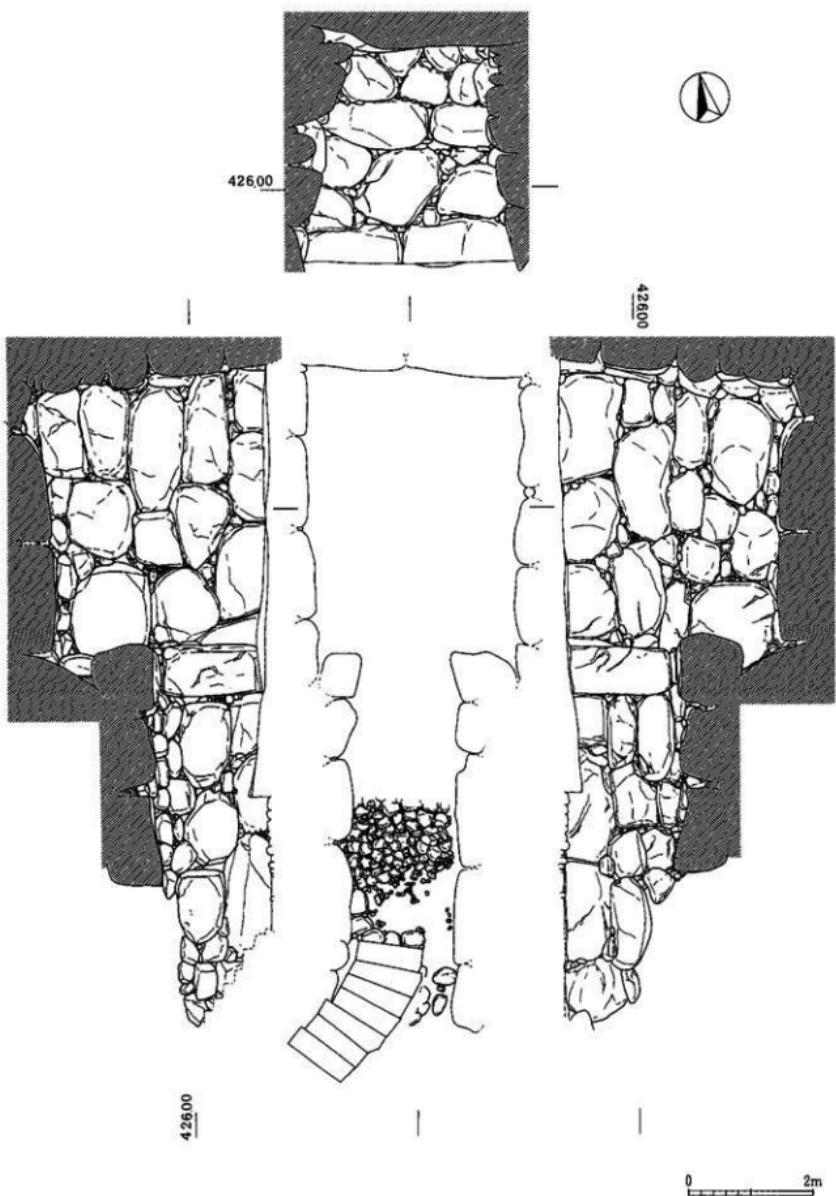
挿図28 前方部横穴式石室実測図

(文献5より再トレス)



現在残る後円部全景（南東から）

(平成18年撮影)



摺図29 後内部横穴式石室実測図 (文献dより平成18年度調査により一部追加)



横穴式石室入口

(平成18年撮影)



同 羨道部



横穴式石室 玄室 (平成18年撮影)



同 玄室より羨道部を見る

みさじろししづかこふん
14 水佐代獅子塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市水城3457他
- 2) 立地 上溝古墳群の立地する段丘面より一段低い段丘面のほぼ中央部に立地する。妙前古墳群とは同じ段丘上に所在する。標高はおよそ406mを測る。
- 3) 現状 前方部西側及び後円部北東側は既存住宅により破壊されている。墳丘上には祠等が祀られている。近年、古墳周辺の宅地化が進み、景観が大きく変わりつつある。
- 4) 調査歴 平成16年 周溝部分試掘確認調査
平成18年 墳丘測量調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N36° E 墳丘長54.2m
後円部径27.4m・高さ4m 前方部幅21.4m・高さ4m (文献a)
平成18年の墳丘測量調査による修正 主軸方向N28° E 墳丘長約60m
- 6) 外部施設 周溝・埴輪
- 7) 埋葬施設 石室が現存するとされるが、現状では確認できない (文献a)
- 8) 出土遺物 鉄刀・須恵器片10以上 (文献a)
円筒埴輪片・土師器片・須恵器片 (平成16年度試掘調査)
鉄刀3・鉄矛2・鐵鎌120以上、馬具他 (文献b)

2 概要

後円部に石室が現存するとされ (文献a)、墳丘上には長径1m程度の大型の礫が散見される。平成16年度の試掘調査では後円部西側で周溝の外側端部が確認され、内部から埴輪片が出土している。平成18年作成の墳丘測量図によると、西側隅本来の後円部が最も残っていると考えられ、前方部側は現在古墳へ上がる道となっている北端部が残丘と判断すると、等高線で406mの箇所がおおよそ墳裾となることから、墳丘長は約60mになるものと推定される。

3 時期

埴輪等から5世紀代と推定されることから、竪穴系の埋葬施設の可能性がある。
『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

水佐代獅子塚古墳から南側へ約30m離れて2基の円墳、北東側に1基の円墳があるとされるが現存しない。試掘調査では周溝の外側に方形周溝墓、また古墳の南西側隣接地で平成9年の集会所建設に先立つ発掘調査では、古墳時代中期の墳丘墓1基と平安時代の集落が確認されている。一方、北東側の同一段丘上には妙前古墳群および縄文時代から平安時代にかけての集落址である妙前遺跡があり、北西側の上位段丘面には前方後円墳3基を含む上溝古墳群が展開している。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二卷
- b 松尾村誌編集委員会 1982『松尾村誌』

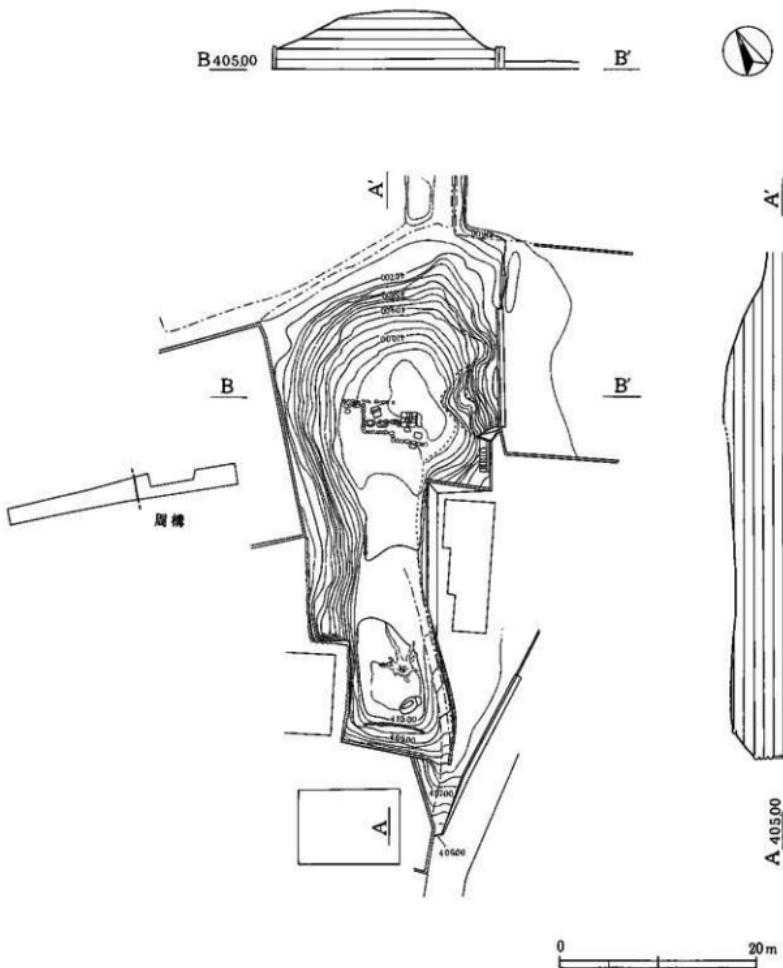


後円部（東から）

(平成18年撮影)



前方部（南から）



15 代田獅子塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾代田1563他
- 2) 立地 天竜川の支流飯田松川・毛賀沢川に開析された、天竜川中流域右岸の第3段丘上に位置し、標高は410mを測る。
- 3) 現状 北側と西側は水田により直線状に削平され、さらに東および南側は宅地化されている。また、墳丘についても後円部は個人住宅、前方部は果樹園及び墓地となつており、大きな改変を受けている。さらに近年周囲の宅地化が進行している。
- 4) 調査歴 昭和55年 墳丘測量調査（文献c）
平成5年度 墳丘一部石垣積み替えの際立会調査
平成16年度 古墳隣接地の試掘調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N18° E 墳丘長61m
後円部径40.6m（復元径推定44.4m）・高さ7.95m
前方部幅20.0m・高さ5.50m（文献d）
- 6) 外部施設 葦石・埴輪（文献a・b・c・d）
- 7) 埋葬施設 横穴式石室があったとされている（文献a）が、現状では確認できない。
- 8) 出土遺物 底部穿孔壺形土器・円筒埴輪・壺形埴輪他（文献c・d）
鈴（三環鈴か）・玉類・刀劍・土師器・須恵器破片（文献a）

2 概要

文献aによると、代田1号古墳、代田獅子塚古墳とも呼ばれる。

前方部は、畠地及び宅地化により一部改変されているが、本来の形としても後円部と前方部との比高差は約2.4mになる。墳丘長61mの前方後円墳であり、昭和55年に筑波大学考古学研究室により墳丘の測量調査が行われた。平成5年度に墳丘一部石垣積み替えの際立会調査を実施し、埴輪片が出土した。平成16年度に古墳隣接地を試掘調査したが、周溝は確認できなかった。

また、後円部側の残存状況から前方後方墳である可能性が指摘されている（文献d）。

墳形については、墳丘が改変を受けているため判断が難しいため、詳細については今後の調査にゆだねるものとし、ここでは前方後円墳として扱うものとする。

3 時期

文献cによると、出土した円筒埴輪は川西宏幸氏の埴輪編年のV式に比定され、墳形や葦石から6世紀を大きく超らないとしている。文献dでは、前方後方墳であることと埴輪の存在から、4世紀中葉から後葉に位置付けられるとしている。

底部穿孔壺形土器や壺形埴輪は、他の5世紀代の古墳からの出土例があり、本古墳も5世紀代と判断できる。

代田獅子塚古墳

『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

本古墳の周囲には4基の円墳があり、代田・上毛賀古墳群と呼称される。さらに、一段下位の段丘面には、大型の前方後円墳を有しない下毛賀古墳群がありこれらを含めて一つの古墳群と捉えられる可能性が指摘されている（文献c）。下毛賀古墳群を範囲内に含む田圃遺跡では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての墳丘墓群が調査されている。

- 引用文献
- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
 - b 下伊那誌編纂会 1991『下伊那史』第一巻
 - c 長野県史刊行会 1983『長野県史』全一巻（三）
 - d 設楽博己他 1981「下伊那地方における前方後円墳の実測調査」『信濃』第33巻第10号
 - e 中司照世他 1992「伊那谷の前方後方墳」『土筆』2



古墳全景（西から） 大正11年撮影（下伊那教育会 市村文庫）



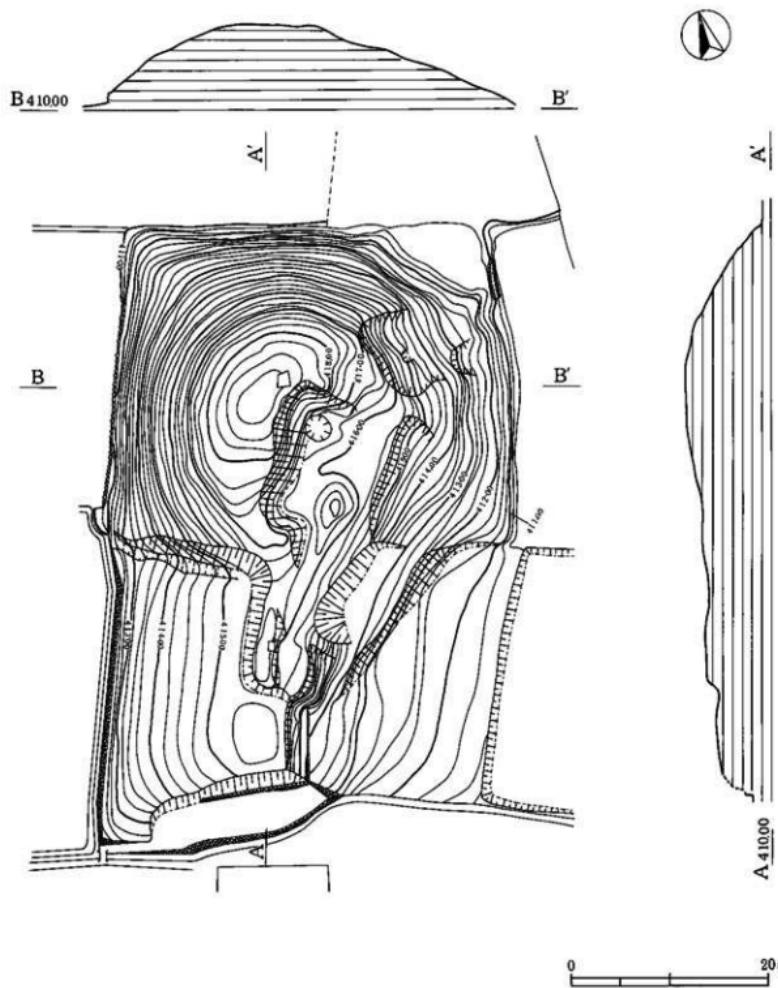
古墳全景（西側上空から）

（平成6年撮影）



同上（西から）

（平成18年撮影）



挿図31 堤丘測量図

(文献dより再トレース、一部追加)

やわたやまこふん
16 八幡山古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市松尾1403-2
- 2) 立地 天竜川の支流である飯田松川と毛賀沢川に開析された中位段丘の縁辺部に位置し、標高は478mを測る。
- 3) 現状 前方部は削平され遺存していないものの、後円部墳丘・周溝の遺存状態は良好である。八幡公園内にある。
- 4) 調査歴 なし
- 5) 形態・規模 帆立貝形古墳
残存している後円部墳丘は東西23.7m・南北28.5m・高さ2.2~3.3m（文献a）
- 6) 外部施設 周溝・葺石
- 7) 埋葬施設 大石の露出はなく石室の有無は不明（文献a）
- 8) 出土遺物 鉄刀1（文献a・bによれば埋め戻されたとされる）
鉄刀3・鉄劍1・鉄斧1（文献b）

2 概要

かつて円墳と把握されていた（文献a・b）が、立地や前方部に削平を受けた痕跡があることから、帆立貝形古墳と考えられる。東北西の3面には周溝が現存する。延長56m、幅2.7~4.3m、深さ0.7~1.0mで、特に北面が良好に遺存している（文献a）。

昭和44年に四阿を建設した際、頂上から5cm掘り下げたところから鉄刀・鉄劍・鉄斧が出土した。石室らしい施設はなく、赤土の上にほぼ南北一直線上にあったとされる（文献b）。

3 時期

墳丘形態及び出土遺物から、5世紀代に比定される。

4 周辺の状況等

同じく八幡原の台地上には前方後方墳の代田山狐塚古墳（長野県史跡）・円墳の代田山1号古墳、方墳の妙見山古墳が点在するが、小河川の下刻により台地はそれぞれ分断されている。本古墳の下位段丘面には後期の円墳である八幡町古墳があり、集会所建設に先立ち横穴式石室の基底部が一部調査されている。本古墳築造を担った集団については、八幡町が中世以降門前町として発展・市街地化しているため、発掘調査がなされておらず、詳細は不明である。

- 引用文献
 a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
 b 松尾村誌編集委員会 1982『松尾村誌』

17 権現堂1号古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市駄科1185-3他
- 2) 立地 天竜川の支流である毛賀沢川と新川に開析された段丘の縁辺部に位置し、標高は429mを測る。
- 3) 現状 宅地化等により西側と前方部の一部がやや削平されているが、総じて墳丘の残り良好である。しかし近年周囲の宅地化が進行している。
- 4) 調査歴 平成11年度 墳丘測量調査
平成16年度 隣接地で発掘調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N50° E 墳丘長60.9m
後円部径28.2m・高さ7.4m 前方部幅26.2m・高さ4.6m（文献a）
平成11年度測量調査 墳丘長60m 後円部径推定34m 前方部径推定35m
- 6) 外部施設 墳輪
- 7) 埋葬施設
- 8) 出土遺物 円筒埴輪片
鉄剣片2・鉄刀2以上・矛・甲（冑）・馬具（鏡板片1・金具1他）・鉄塊・土師器破片1・須恵器破片4（文献a）

2 概要

文献aによれば、明治16・17年頃、大正11年と後円部の墳丘頂を掘り下げたところ上記遺物の出土をみており、その時大石がでなかったとされている。平成16年度の発掘調査で溝跡が確認されたが本古墳に伴うものである可能性もあるが、調査範囲が狭く特定できなかった。

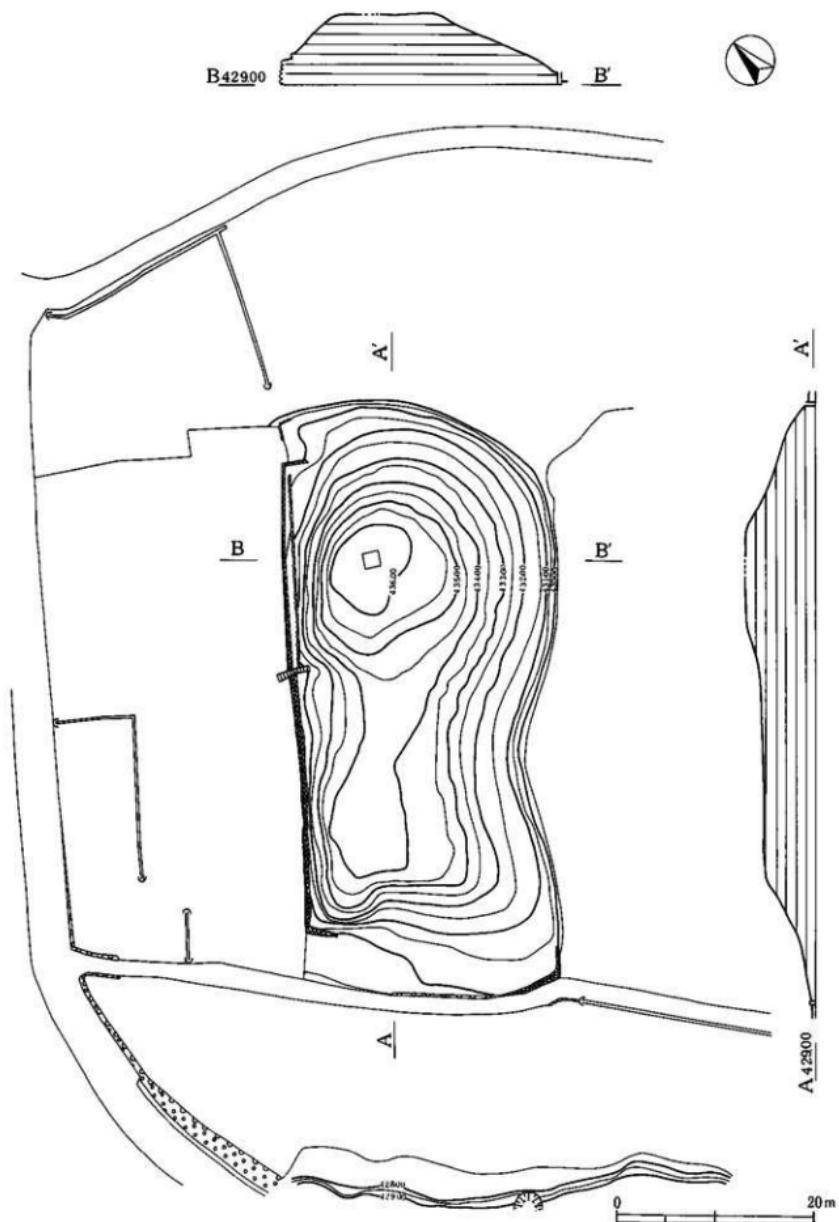
3 時期

文献aには出土遺物から古墳時代後期とし、文献bは埴輪から6世紀を前後するものとしている。出土遺物や竪穴系の埋葬施設が推定されること、墳丘の形態から5世紀に遡る可能性も高い。
『集成』では8期に比定されている。

4 周辺の状況等

本古墳の南側には神送塚古墳など5世紀代の円墳が存在している。本古墳の同一段丘面上の北側約500mには塚越1号古墳が所在する。現在の行政区画で駄科区に確認されている前方後円墳はこの2基のみである。隣接する安宅遺跡では8世紀以降の掘立柱建物址群・溝跡等が確認されている。

- 引用文献**
- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
 - b 設楽博己他 1981「下伊那地方における前方後円墳の実測調査」『信濃』第33巻第10号



掲図32 墓丘測量図

(平成11年度 測量調査による)

18 塚越1号古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市駄科346-1他
- 2) 立地 天竜川の支流である毛賀津川と新川に開析された段丘のほぼ中央に位置し、標高は433mを測る。小段丘の直下にあるため、小段丘の湿地帯に突き出たような状況にある。
- 3) 現状 前方部は宅地により削り取られており、墳丘の残りは良くない。横穴式石室が現存し、狭いが開口している。近年周囲の宅地化が進行している。
- 4) 調査歴 平成16年度 東側隣接地で個人住宅増築に先立つ試掘調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N120° E 墳丘長60m (推定72.2m)
後円部径26.4m・高さ7.8m 前方部幅15.5m・高さ7.8m (文献a)
- 6) 外部施設
- 7) 墓葬施設 横穴式石室 主軸方向N44° E 石室全長9.8m以上
玄室長5.25m・幅奥から3.75~3.6m・高さ2.54m
羨道部長4.55m以上・幅1.75m・現状の高さ1.15m (文献a)
- 8) 出土遺物 丸玉5 (文献a)

2 概要

旧竜村の地図によれば墳丘長は72.2mになる。石室は、羨道部を約5.5m破壊したとの談話があり、本来羨道部長は10m近くあったとされる(文献a)。石室入口には土砂が流入して現在中へは入れないが、石の配置は粗雑であるが、巨石を用いた大規模なものである。形態は、おかん塚古墳及び馬背塚古墳前方部石室と共通する。平成16年度の試掘調査では、後円部東側周溝の外側が確認されている。

3 時期

文献aによれば、丸玉を除き出土遺物は散逸しているので、遺物からは判断できない。横穴式石室の形態からして6世紀後半の築造と判断される。

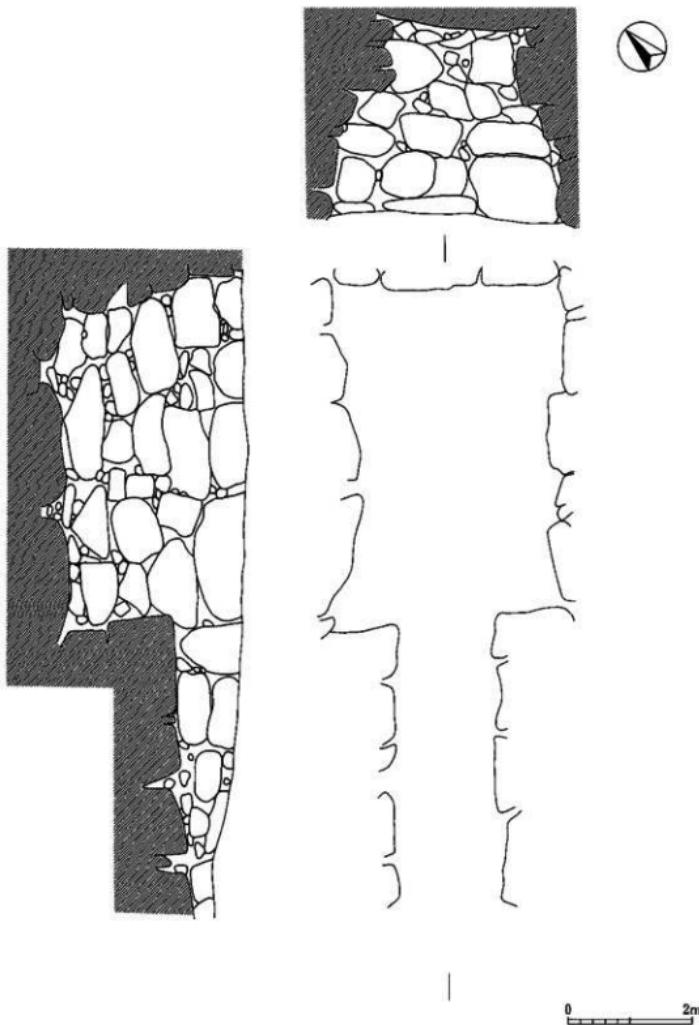
『集成』によると、10期に比定されている。

4 周辺の状況等

同一段丘面上には、権現堂1号古墳が本古墳の南約500mに所在する。現在の行政区画で駄科区に確認されている前方後円墳はこの2基のみである。隣接する安宅遺跡では、平成4年度に実施した発掘調査により、古墳時代から段丘崖下の湧水地帯を利用した一定規模の水田經營があったことが指摘されている。さらに8世紀以降の掘立柱建物址群・溝址等が調査されている。

引用文献

a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻



挿図33 横穴式石室実測図

(文献aより再トレース)



権現堂 1 号古墳全景（東から）

（平成18年撮影）



塚越 1 号古墳全景（南西から）

（平成18年撮影）

まるやまこふん 19 丸山古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市桐林3195他
- 2) 立地 西沢川と駒沢川に開析された、幅400m程の比較的細長い段丘の先端部に位置する。標高は427mを測る。
- 3) 現状 宅地化等により前方部の一部が削平されており、残存する後円部墳丘は墓地・竹林である。
- 4) 調査歴 なし
- 5) 形態・規模 前方後円墳 前方部削平により推定で墳丘長約60m（文献a）
- 6) 外部施設 葦石ありか（文献a）
- 7) 埋葬施設 竪穴式石室の可能性（文献a）
- 8) 出土遺物 短甲か（文献a）

2 概要

嘉永3年に後円部墳頂に深さ3mの墓穴を掘った時に、桶形の甲が出土したとの伝承があり、竪穴式石室と推定されている（文献a）。

本古墳の西方には大塚・兼清塚古墳が近接しており、これら3基の前方後円墳は竜丘地区でも最古の一群とみられている。

3 時期

竪穴式石室であろうことと周辺の古墳との関連からして、5世紀代の築造とみられる。

『集成』によると、7～8期に比定されている。

4 周辺の状況等

大塚古墳・兼清塚古墳が西方に所在する。直接本古墳に関連するものではないが、古墳時代から古代にかけての周辺の集落址としては、本古墳の位置する小段丘の下位には小池遺跡が、西沢川を挟んだ東側に前の原遺跡が隣接する。小池遺跡は昭和48年度の発掘調査により、古墳時代後期～平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址が調査されている。前の原遺跡の昭和63年度に実施した発掘調査では、古墳時代後期の一辺11mの竪穴住居址が調査されている。また、古墳時代後期以降の9間×2間の身舎に東・西・北面に扉のついた掘立柱建物址と区画施設とみられる2本の柱が矩状に連続する柱穴列が調査されている。古代の当地方において特筆される遺構である。また本古墳の北西約700mの位置にある駒沢川流域では、奈良時代から平安時代にかけての窯址群が確認されているほか、北方およそ800mの場所には古瓦が出土することから、前林廃寺の存在が推定されている。

引用文献

a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二卷



古墳全景

(平成18年撮影)

おおつかこふん

20 大塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市桐林2024・2031-2他
- 2) 立地 西沢川と駒沢川に開析された、幅400m程の比較的細長い段丘の先端部に位置する。標高は429mを測る。
- 3) 現状 前方部を削平され宅地・畑地化しており、後円部が旧状に近く、現在一部墓地として利用されている。西側墳丘下部は、墳丘形に沿って水田区画があり、周溝の痕跡とも判断される。
- 4) 調査歴 平成11年度 墳丘測量調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向 前方部削平により推定N64° E 墳丘長73m
後円部径東西35.4・南北49m・高さ7.5~9m(文献a)
平成11年度測量調査による修正 主軸方向N50° E 墳丘長推定53m
- 6) 外部施設 蓋石・埴輪(文献a)
- 7) 埋葬施設 竪穴式石室の可能性(文献a)
- 8) 出土遺物 円筒埴輪破片・形象埴輪破片(甲冑?・水鳥頭部1)(文献a)
円筒埴輪・形象埴輪(家)・五鈴鏡(平成18年度)

2 概要

各所に蓋石が散見されるほか、後円部の墳頂の断面には巨石が露出しており、竪穴式石室の側面が露出したものと推定される。(文献a)。後円部は比較的良好に墳丘が残存している。

墳丘規模については、文献aでは73mをしているが、周囲の地割の状況から周溝の範囲を想定できることと西側に近接して兼清塚古墳があることから、前方部は現状で墳丘が残っているところがほぼ本来の墳裾と考えられる。これによると約53mになる。丸山古墳が60m、兼清塚古墳が63.6mであることから、本古墳も60mを大きく越えないと推定される。

後円部からは円筒・形象埴輪が出土している。平成18年度に前方部墳丘より五鈴鏡が出土した。

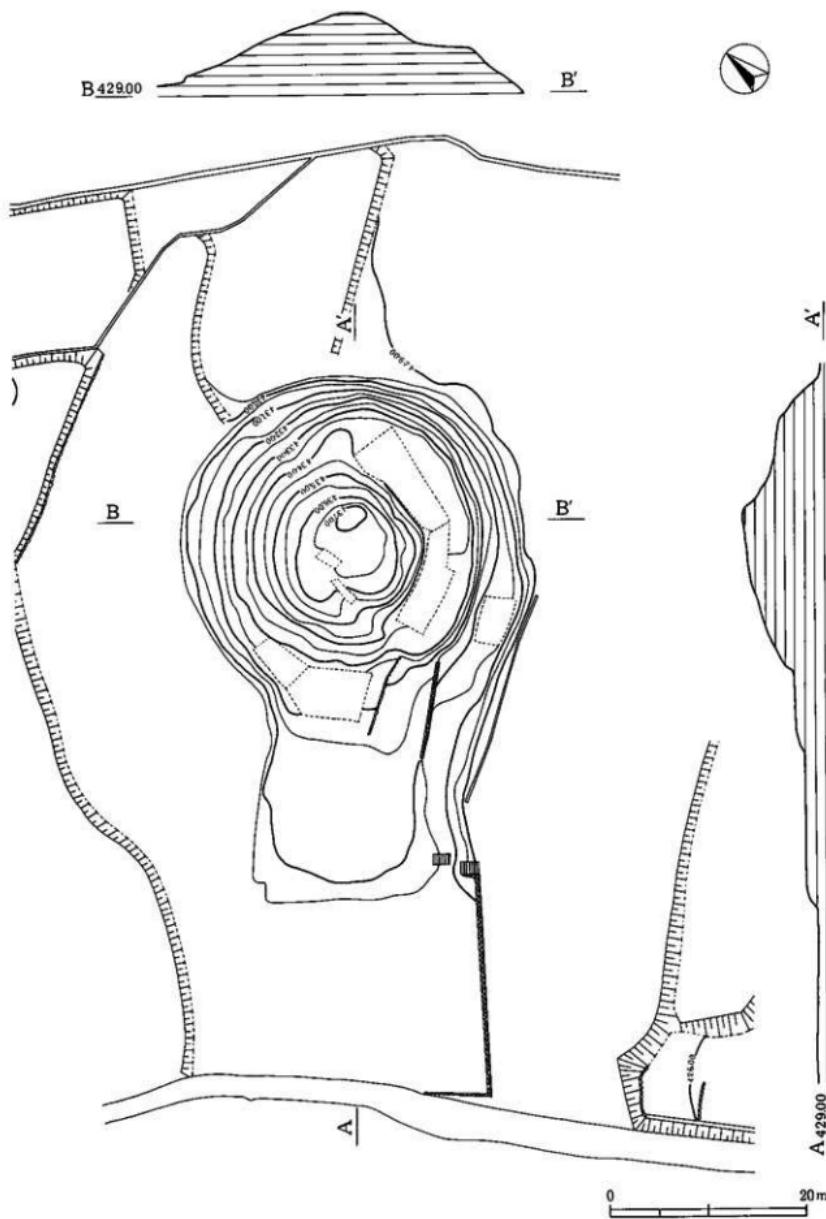
3 時期

竪穴式石室であろうことと周辺の古墳との関連からして、5世紀代の築造とみられる。

『集成』によると、7~8期に比定されている。

4 周辺の状況等

先述した丸山古墳と同様である。



挿図34 墓丘測量図

(平成11年度 測量調査による)



古墳全景（西から）

（平成18年撮影）



五鉢鏡

円筒埴輪・形象埴輪

けんせいづかこふん 21 兼清塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市桐林2043他
- 2) 立地 天竜川の支流である新川の左岸の段丘東端部縁辺に位置し、標高は約429mを測る。
- 3) 現状 宅地・畠地化により、墳丘の原形は失われており、楕円形の築山が残るに過ぎない。大塚古墳から連続して墳丘西側に低地が廻っており、周溝痕跡と判断される。
- 4) 調査歴 平成11年度 墳丘測量調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N30° E 墳丘長63.6m
後円部径28m 前方部幅28m・高さ3.5~5m (文献a)
- 6) 外部施設
- 7) 墓葬施設 竪穴式石室の可能性 (文献a)
- 8) 出土遺物 二神二獸鏡1・四獸鏡1・内行花文鏡1・鏡残欠1・鉄刀1ほか刀劍類・鐵鎌多数・鉄矛・甲類・勾玉3・丸玉43 (文献a)

2 概要

全長63.6mの前方後円墳であったとされるが、現在は60m程度が残る。後円部にはかつて石室が存在したが、開墾に際して破壊され、石材は他所へ持ち去られたという。側壁が小型の川原石で構築され、また墳丘の下部まで削平が及んでいないことから、竪穴式石室である可能性が高い。鏡が4面出土していることで知られ、このうち二神二獸鏡は朱がついており、銘の読み方については「吾作明竟 幽口三商 衆徳玄道 配象万彌 曾年益寿 子孫蕃昌」などいくつかの説がある(文献a・b)。

3 時期

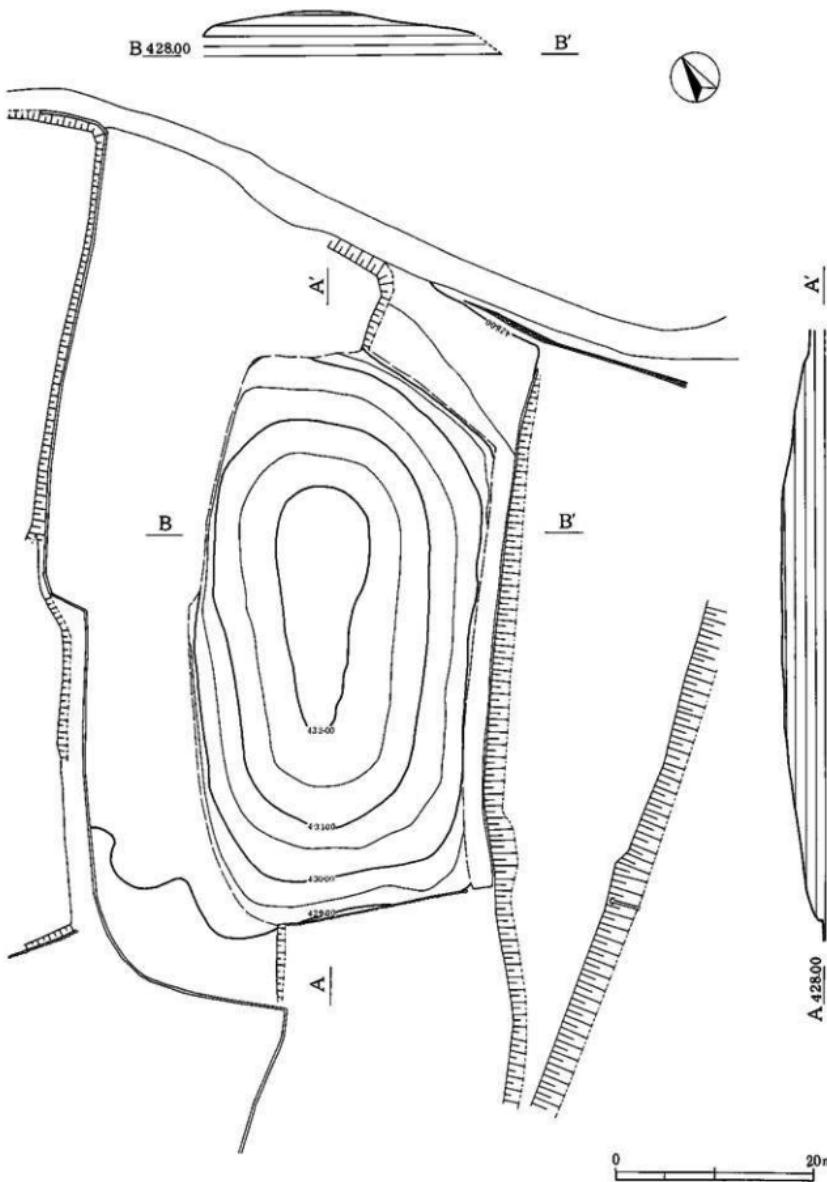
文献a・bでは、二神二獸鏡を舶載鏡とし、出土遺物の内容と竪穴式石室の存在から古墳時代中期中頃以降、中期後半でも比較的古い時期を与えている。しかし、鏡については舶載鏡か否か、また銘文の読み方にも異なる見解も出されている。丸山・大塚古墳の存在、周囲の古墳の状況から5世紀代と判断される。

『集成』によると、7期に比定されている。

4 周辺の状況等

先述した丸山古墳と同様である。

- 引用文献**
- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
 - b 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第三巻
 - c 長野県刊行会 1983『長野県史』全一巻(三)



擇図35 墓丘測量図

(平成11年度 測量調査による)

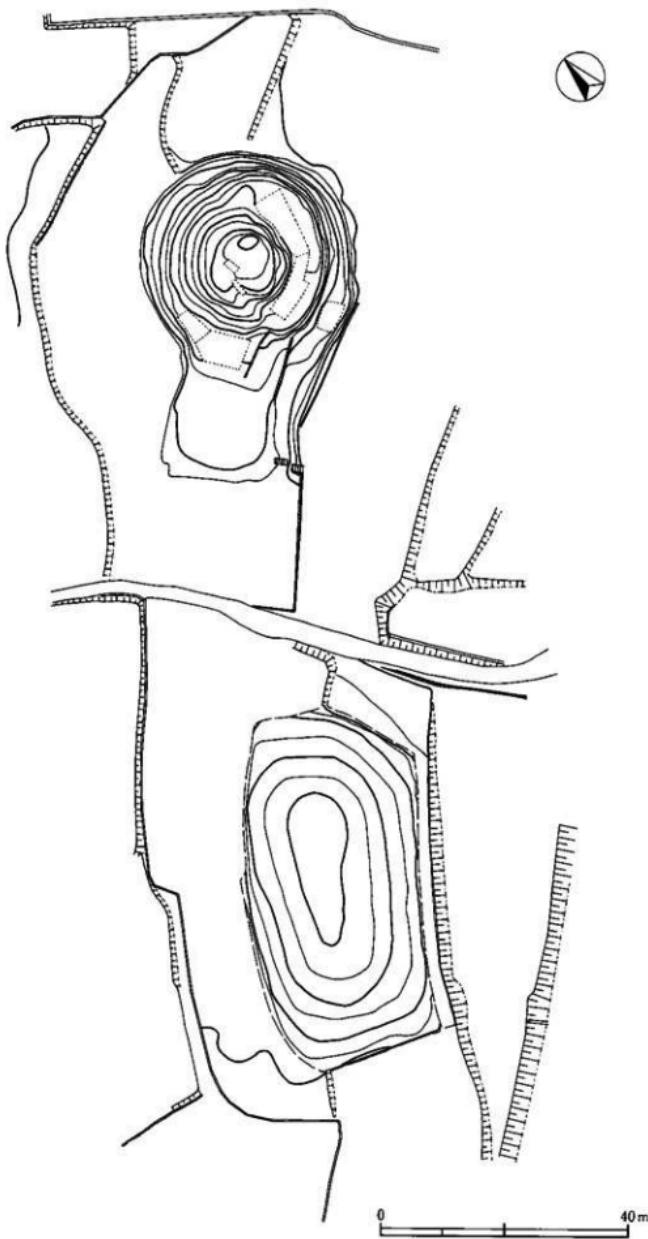


古墳全景（北西より）

（平成18年撮影）



鏡



擇図36 大塚古墳と兼清塚古墳

22 塚原二子塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市桐林3046-1・3047-1・3049-1他
- 2) 立地 天竜川の支流である駒沢川と袋沢川に挟まれた小段丘の端部に位置する。標高は405mを測る。
- 3) 現状 前方部端部を部分的に削平されているものの、墳丘の残りは良好である。
- 4) 調査歴 昭和32年 耕作時くびれ部付近より埴輪列出土（文献c）
昭和55年 墳丘測量調査（文献d）
平成2年度 道路建設に先立つ後円部周溝発掘調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N35°E 墳丘長約72m
後円部径41.4m・高さ4.5~6m 前方部前端幅44.6m・高さ5~6.5m（文献a）
墳丘長約67.5m 後円部径約37.5m 前方部幅約41m（文献d）
平成2年度の発掘調査によると墳丘長約72mと推定
測量時の方位再確認によりN30°Eに修正
- 6) 外部施設 周溝および周溝の外側を区画する溝・葺石（平成2年度発掘調査）
埴輪-くびれ部で埴輪配列の一部確認（文献c）
- 7) 埋葬施設 穹穴式石室の可能性
- 8) 出土遺物 円筒埴輪片・朝顔形埴輪・形象埴輪片・青・土師器片・須恵器破片（文献a）
円筒埴輪・形象埴輪（蓋）（文献d）
円筒埴輪・形象埴輪（蓋ほか）（平成2年度発掘調査）

2 概要

当古墳の位置する台地には、1基の前方後円墳と3基の帆立貝形古墳、12基の円墳から構成される古墳群が存在し、塚原古墳群と呼ばれている。当古墳は塚原1号古墳とも呼ばれ、塚原古墳群の盟主たる前方後円墳である。

平成2年度の発掘調査で後円部北側の周溝を確認した。周溝内からは多量の埴輪片が出土したが、墳丘上からの転落によるものであるため配列は確認できていない。また、一部葺石が確認できたことから、後円部側の墳裾をおおよそ把握できた。これによると、文献aと同様、墳丘長は約72mになると判断される。後円部側の周溝は幅約7mで、さらにその外側を区画する幅約3mの溝が巡る。区画溝は途切れる部分があるが、この溝が全周するとすれば全長は100m以上になる。

埋葬施設は穹穴式石室とみられる。市内で最も良好な墳丘の古墳である。昭和43年、飯田市史跡に指定されている。

3 時期

周辺の状況や埴輪、墳丘形態からして、古墳時代中期、5世紀後半の築造とみられる。

『集成』によると、川西氏埴輪編年のIVないしV式とされ、7～8期に比定されている。

4 周辺の状況等

塚原古墳群は台地の大部分が農地として利用されており、古墳群の残りは良い。塚原古墳群は16基からなり、古墳時代中期を中心とする古墳群とみられる。この台地の下に小段丘があり、前方後円墳で横穴式石室を有する金山二子塚古墳と8基の円墳からなる金山古墳群がある。前者一帯は上塚原、後者は下塚原・金山と呼ばれており、密接な関連を有するものと考えられる。

本古墳と関連を有する集落遺跡として、前の原遺跡・小池遺跡・塚原遺跡・ガンドウ洞遺跡などが考えられる。このうち、塚原二子塚古墳の一段下位の段丘上にあるガンドウ洞遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代後期にかけての複数期の集落が調査されている。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
- b 長野県史刊行会 1983『長野県史』全一巻(三)
- c 伊那史学会 1957「口絵解説」『伊那』5月号
- d 設楽博己他 1981「下伊那地方における前方後円墳の実態」『信濃』第33巻第10号



古墳全景（東側上空から）

(平成3年撮影)

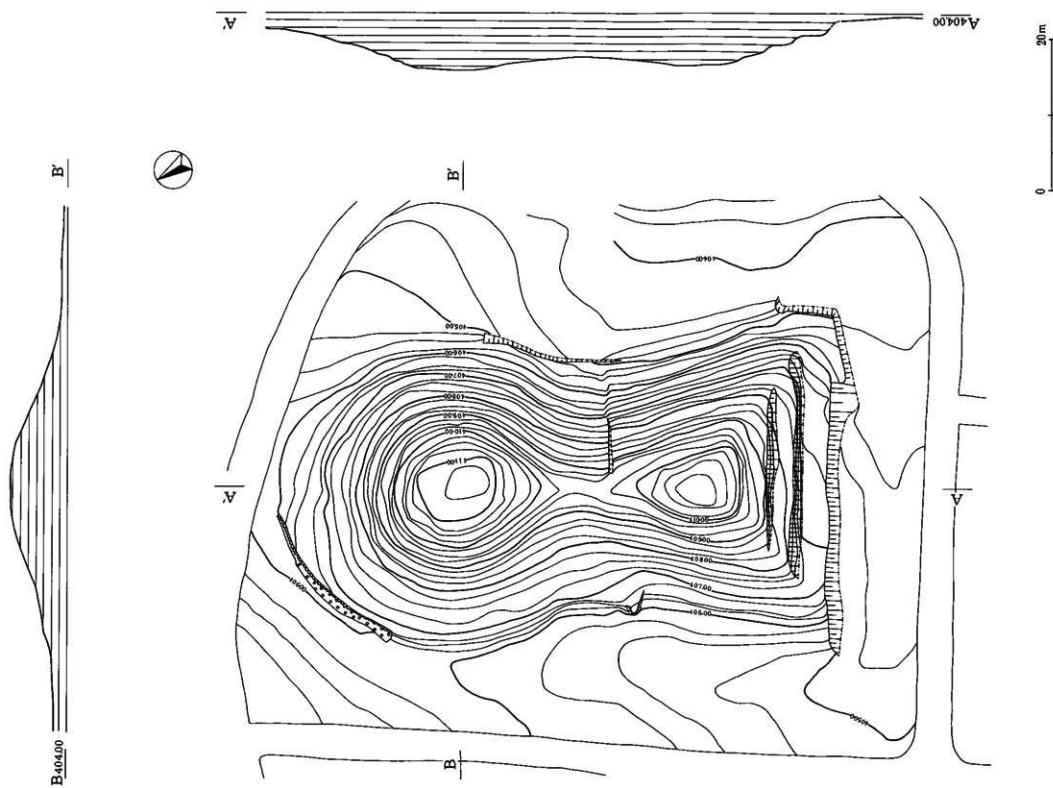


古墳全景（西から）

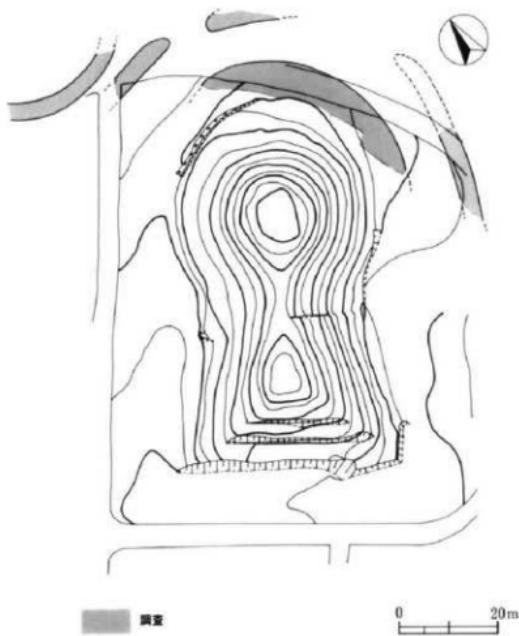
(平成18年撮影)



同上（東から）



挿図37 墓丘測量図 (文献dより再トレース、一部追加)



挿図38 後円部北側調査による周溝および外側を区画する溝位置図



形象埴輪

形象埴輪(蓋)

円筒埴輪

つかばら3ごうこふん
23 塚原3号古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市桐林2816他
- 2) 立地 天竜川の支流である駒沢川と袋沢川に挟まれた小段丘のほぼ中央に位置する。
標高は407mを測る。
- 3) 現状 開墾等により、前方部はほとんど失われている。周囲は宅地化している。
- 4) 調査歴 平成10年度 試掘確認調査（文献b）
平成12年度 墳丘測量調査
- 5) 形態・規模 帆立貝形古墳 主軸方向N19° E 墳丘長推定45m
後円部径約29m・現存する高さ約3m（平成12年度墳丘測量調査による）
- 6) 外部施設 墓輪（文献b）
- 7) 埋葬施設 竪穴式石室の可能性（文献a）
- 8) 出土遺物 円筒埴輪片（文献b）

2 概要

文献aでは、径東西26.1m、径南北22.2m、高さ3.3～4.4mの円墳とされていたが、墳丘の現状を再検討した結果、帆立貝形古墳であることを確認した。平成10年度の確認調査では、前方部周溝前端部が確認できることから、周溝を含めると50mを越える古墳となると推定される。塚原古墳群に3基ある帆立貝形古墳（塚原3号・鏡塚・鐵塚古墳）の一つであり、古墳群の西端部に位置する。

3 時期

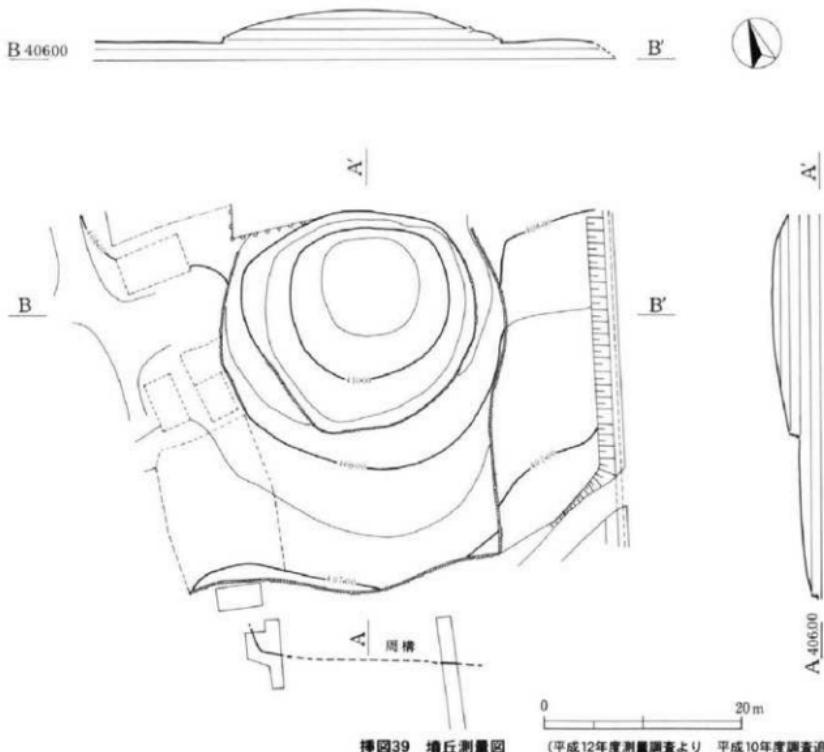
帆立貝形古墳で竪穴式石室の可能性が高いこと、周辺の古墳との関係から5世紀後半代の築造と考えられる。

『集成』によると、塚原二子塚古墳と相前後する時期としている。

4 周辺の状況等

先述した塚原二子塚古墳と同様である。3基並列する帆立貝形古墳の北端の古墳である。

- 引用文献 a 下伊那誌編纂会 1965『下伊那史』第二巻
 b 飯田市教育委員会 1999『恒川遺跡群菜師垣外遺跡・宮垣外遺跡他市内遺跡』



擇図39 墳丘測量図
(平成12年度測量調査より 平成10年度調査追加)



古墳全景

(平成18年撮影)

かがみづかこふん 24 鏡塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市桐林2886-1他
- 2) 立地 天竜川の支流である駒沢川と袋洞沢川に挟まれた小段丘のほぼ中央に位置する。標高はおよそ405mを測る。
- 3) 現状 開墾等により前方部は削られ低平化しているが、後円部は比較的良好に残る。
- 4) 調査歴 昭和42年度 国道151号改良工事に先立ち発掘調査（文献b）
昭和49年度 道路改良工事に先立ち発掘調査・測量調査（文献c）
平成12年度 墳丘測量調査
- 5) 形態・規模 帆立貝形古墳 主軸方向N19° E 墳丘長推定45m・現状する高さ約2.5m（平成12年度墳丘測量調査による）
- 6) 外部施設 墳丘の西側で葺石・埴輪配列を確認（文献b）
- 7) 埋葬施設 穹穴式石室の可能性
- 8) 出土遺物 鏡3（文献a）
円筒埴輪片・形象埴輪片・須恵器片・土師器片（文献b）

2 概要

塚原古墳群中の1基で塚原4号古墳ともいい、かつて鏡が3面出土したことから鏡塚古墳と呼ばれている。文献aでは、径東西30.5m 径南北28.9m 高さ3.4~5.7mの円墳で横穴式石室と推定されている。昭和42年度の調査では墳丘西側の葺石と2段に配列された埴輪列の一部を確認、昭和49年度の調査では南側の一画で幅6.35m 深さ1.2mの周溝を確認している。発掘調査では埋葬施設は確認されていない。その後、墳丘の現状を再検討した結果、帆立貝形古墳であることを確認した。確認された周溝と残存状況から、墳丘長45m・高さ2.5mの帆立貝形古墳と判断される。

3 時期

帆立貝形古墳で竪穴式石室の可能性が高く、他の古墳との関係から5世紀後半代の築造と考えられる。『集成』によると、塚原二子塚古墳と相前後する時期としている。

4 周辺の状況等

先述した塚原二子塚古墳と同様である。3基並列する帆立貝形古墳の真ん中の古墳である。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
 b 飯田市教育委員会 1967『鏡塚発掘調査報告書』
 c 飯田市教育委員会 1975『前の原・塚原』
 d 滝沢誠他 1988「飯田市南部における古墳の実測調査」『信濃』第40巻第12号

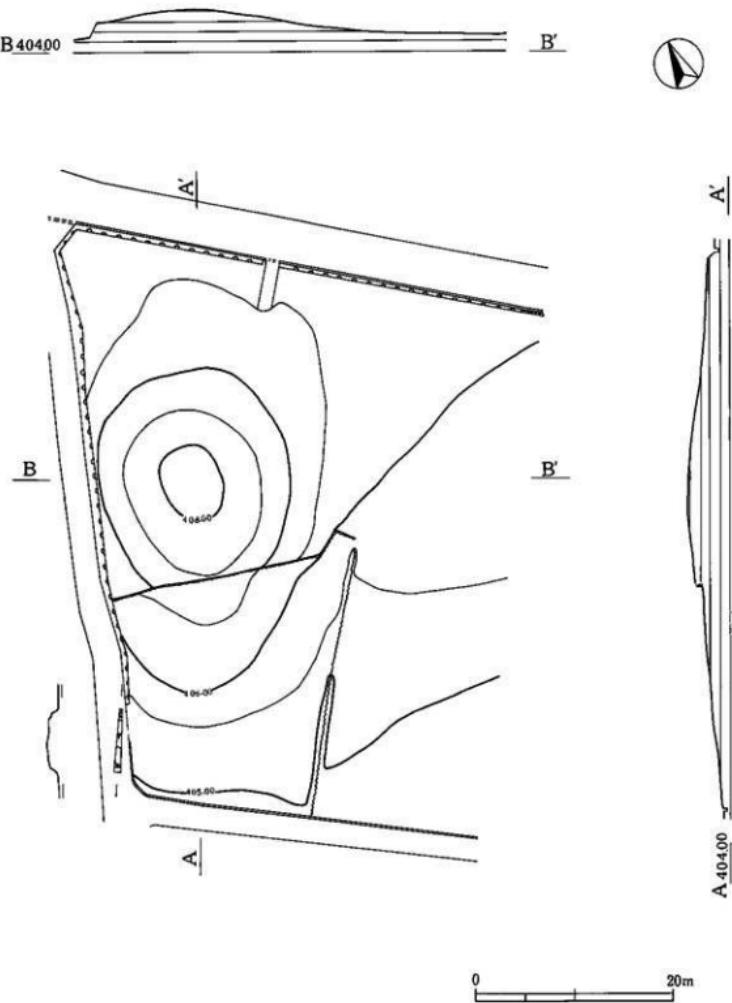


図40 墳丘測量図 (平成12年度測量調査より昭和49年度調査追加)



古墳全景

(平成18年撮影)

25 鎧塚古墳 よろいづかこふん

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市桐林2875-1他
- 2) 立地 天竜川の支流である駒沢川と白井川に開析された段丘の縁辺部に位置し、標高は404mを測る。
- 3) 現状 墳丘および周囲は畑や果樹園となっており、墳丘北側斜面は大きく改変を受けている。前方部は低平化している。
- 4) 調査歴 昭和62年 墳丘測量調査（文献b）
平成17年度 墳丘西側で立会確認調査
- 5) 形態・規模 帆立貝形古墳 主軸方向N39° E 墳丘長推定45m
後円部径約35m・高さ3.8m 前方部幅推定20m（文献b）
- 6) 外部施設 墓輪（文献b）
- 7) 埋葬施設 竪穴式石室の可能性（文献a）
- 8) 出土遺物 四獸鏡1・鉄刀2・横矧板紙留短甲1・馬鐸1（文献a）
円筒埴輪・朝顔形埴輪片（文献b）

2 概要

塚原古墳群の主墳、塚原二子塚古墳を取り巻く帆立貝形古墳のうちの1基で、塚原5号古墳ともいい、短甲が出土したことから鎧塚の名がある。文献aでは下伊那最大の円墳と記載されているが、墳丘の南西側にやや方形を呈する高まりがあることから、塚原3号古墳・鏡塚古墳とともに帆立貝形古墳と判断される（文献b）。平成17年度に墳丘西側での立会確認調査では周溝は確認できなかった。主軸方向については、方位の再確認をした結果、並列する塚原3号古墳・鏡塚古墳との位置関係と墳丘残存状態から判断して、N27° Eを示すと考えられる。

3 時期

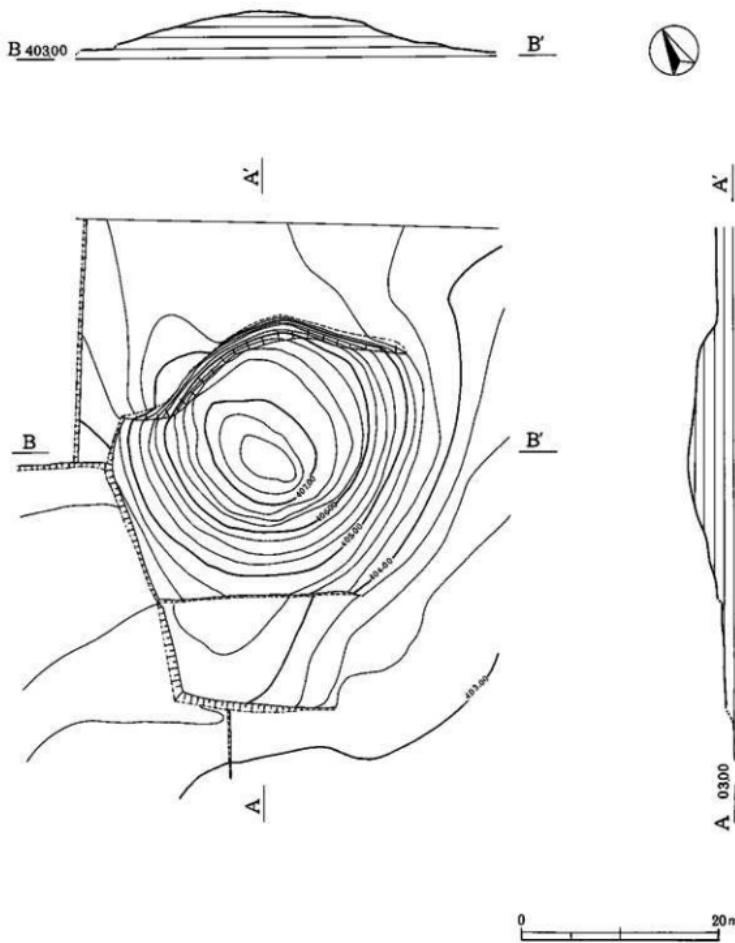
周辺の状況から判断して5世紀後半と考えられる。なお、文献bでは、横矧板紙留短甲は5世紀後半、大型の馬鐸は5世紀末から6世紀以降に盛行、また埴輪に黒斑がみられないことから5世紀以降としている。出土品の年代観の開きは発掘調査による出土品でないため遺物の帰属の問題としている。

『集成』によると、塚原二子塚古墳と相前後する時期としている。

4 周辺の状況等

先述した塚原二子塚古墳と同様である。3基並列する帆立貝形古墳の南端の古墳である。

- 引用文献 a 下伊那誌編集会 1955『下伊那史』第二卷
b 滝沢誠他 1988「飯田市南部における古墳の実測調査」『信濃』第40巻第12号



挿図41 墳丘測量図

(文献6より再トレース、一部追加)



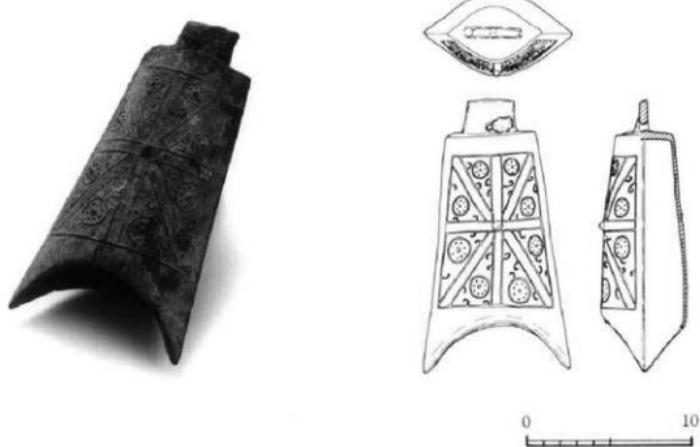
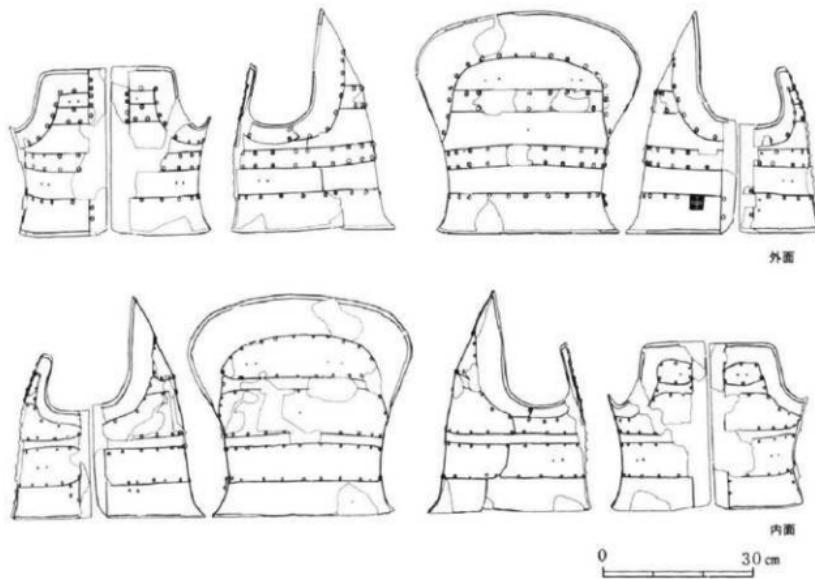
古墳全景（南西側上空から）

(平成3年撮影)



古墳全景（南から）

(平成18年撮影)



馬鈞

插圖42 橫矧板鋸留短甲(上)・馬鐸(下)

かなやまふたごづかこふん 26 金山二子塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市上川路19-1他
- 2) 立地 天竜川の支流である駒沢川と白井川に開析された台地の縁辺部に位置し、標高は384mを測る。
- 3) 現状 宅地化等により西側と北側の一部が削平され、前方部も削平されて畠となっている。また、墳丘上も畠として耕作がなされており、墳丘の遺存状況は悪い。
- 4) 調査歴 平成11年度 墳丘測量調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N80°E 全長49.1m（推定約63m）
後円部径37.2m・高さ6.4~7.9m 前方部幅36.4m・高さ6.1m（文献a）
- 6) 外部施設 墓輪
- 7) 埋葬施設 後円部…横穴式石室 玄室のみ残存 主軸方向N55°E
長さ3.64m・幅1.21m・高さ0.76m 赤彩あり
前方部…横穴式石室 破壊されて遺存せず（文献a）
- 8) 出土遺物 後円部石室（環鈴1・金銀環・青・砥石）、前方部石室（鈴9・轡）
この他、玉類（勾玉・管玉）の出土が伝えられるが詳細不明。
現存資料（虎頭鈴5・三環鈴1・砥石2・土師器高杯片2）（文献a）
円筒埴輪

2 概要

文献aによると、前方部に横穴式石室を有するとあるが、現在は確認できない。後円部の石室は小規模な石材を用い、全体規模も大きくななく墳丘中腹に開口する。石室内壁面に赤色顔料が塗布されている。現在は土砂が堆積して石室内への立ち入りは困難である。

3 時期

石室の赤色塗彩や、石室の形態および出土遺物から、6世紀前半に位置付くと考えられる。
『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

本古墳は9基からなる金山古墳群の主墳であり、上部の台地上には16基からなる塙原古墳群があり、塙原古墳群から金山古墳群へと連続して築造がなされたと考えられる。また、御猿堂古墳や2基の横穴式石室を有する馬背塙古墳とは指呼の間にある。さらに、本古墳と関連を有する可能性がある集落遺跡として、前の原遺跡・小池遺跡・塙原遺跡・ガンドウ洞遺跡などが考えられる。



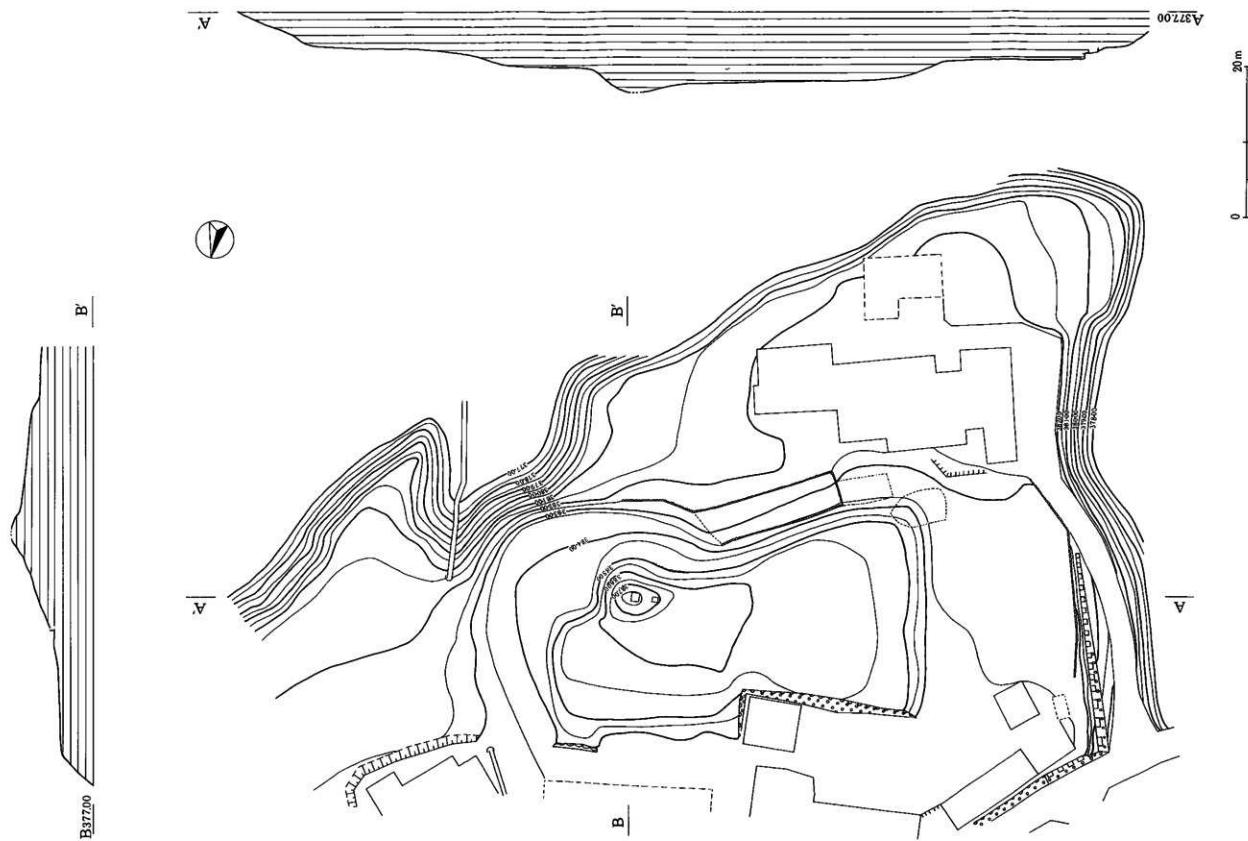
古墳全景（北から）

(平成18年撮影)

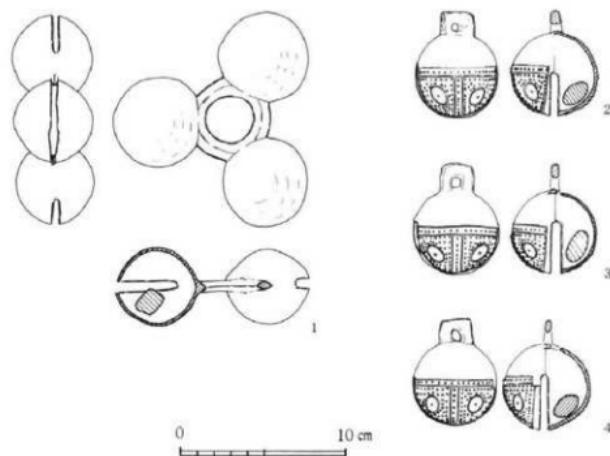


同上（南から）

(平成18年撮影)



摺図43 墓丘測量図（平成11年度測量調査による）



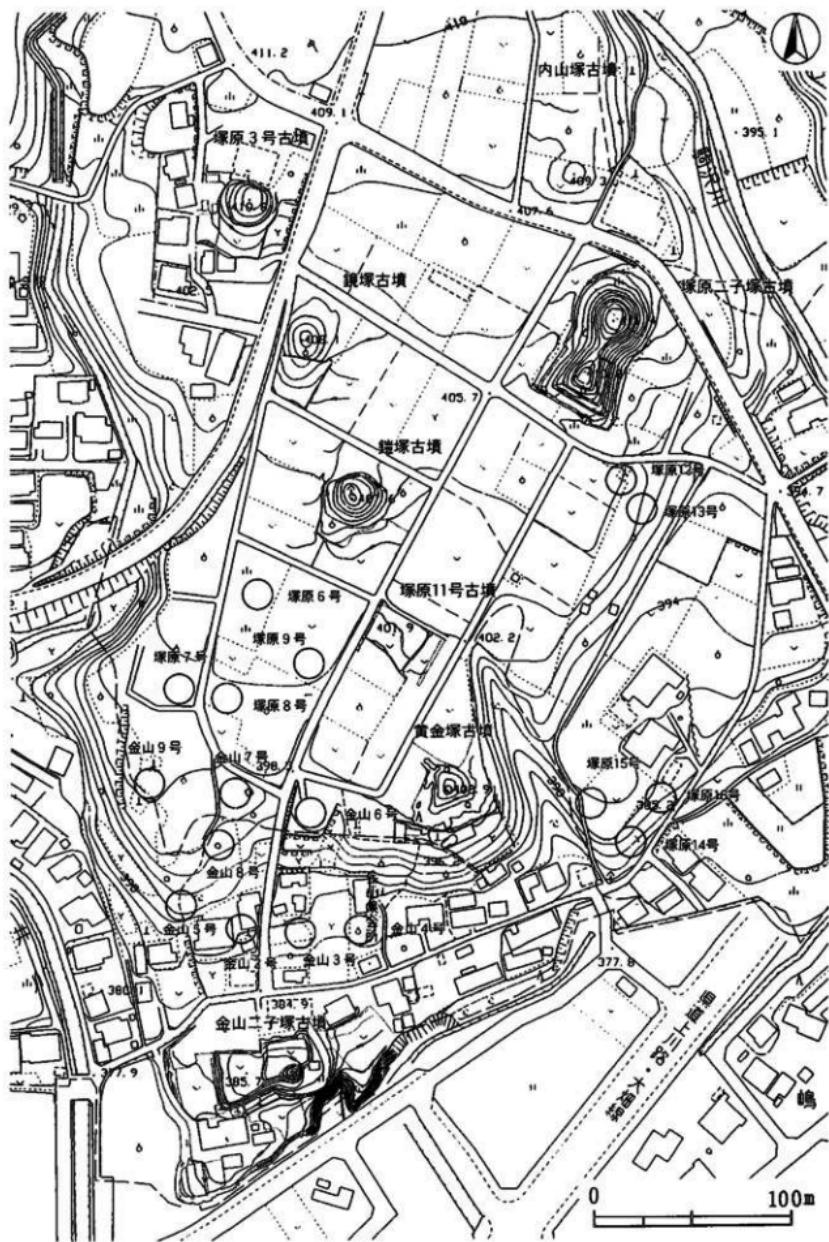
插図44 三環鈴（後円部）・虎頭鈴（前方部）



後円部横穴式石室
(平成18年撮影)



三環鈴

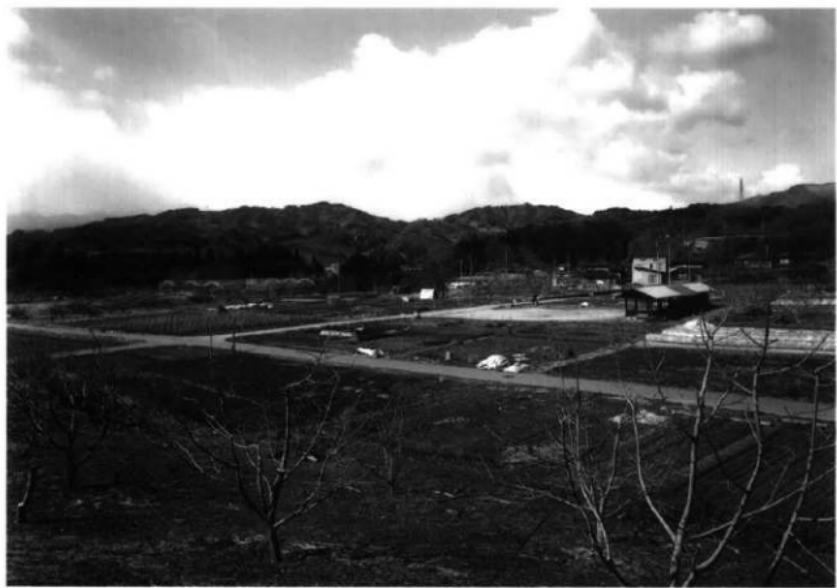


挿図45 塚原古墳群・金山古墳群全体図



塚原古墳群全景（北側上空から）

（平成3年撮影）



塚原二子塚古墳墳丘上より鏡塚古墳・錦塚古墳を望む

（平成18年撮影）

おさるどうこふん
27 御猿堂古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市上川路882-1・882-2・878他
- 2) 立地 天竜川の支流である久米川左岸に位置し、標高は390mを測る。
- 3) 現状 宅地により後円部の東および北側の一部が削平されている。近年の宅地化で、周囲から視認できにくくなっている。また、墳丘上は墓所が営まれている。
- 4) 調査歴 昭和58・59年 墳丘測量調査（文献c）
昭和62年 墳丘・横穴式石室測量調査（文献d）
平成17年度 民間開発に先立ち試掘調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N121° E 墳丘長約65.4m
後円部径31.4m・高さ8.5m 前方部幅34.8m・高さ9m（文献d）
平成17年度調査時の方位再確認により、主軸方向N116° Eに修正
- 6) 外部施設 周溝および周溝の外側を区画する溝周溝および外側を葺石・埴輪
- 7) 埋葬施設 横穴式石室 主軸方向N29° E 墳丘長13.01m
玄室長10.26m・幅奥から2.35~2.1~1.76m・高さ2.9m
羨道部長2.75m・幅1.5m・現状の高さ0.6m（文献d）
- 8) 出土遺物 円筒埴輪・形象埴輪破片（韁・盾他）
画文帯四仏四獸鏡1・鏡片（盤龍鏡片か）3・鉄劍片1・鉄刀片2・鉄製環頭柄頭1・鞞尻1・鞞金具3・挂甲小札2・鐵齒片1・巻1以上・雲珠1以上・杏葉1・金具2・土師器杯1・座金1・金属薄板2・鐵器片10・切子玉1・勾玉1・純金薄板2
この他、大鈴・鏡1・金環3・勾玉7・管玉11・劍頭2（龍・鳳凰）・鉄刀・鐵鎌が出土したとされるが詳細不明（文献a）
円筒埴輪・人物埴輪（盾持ち人1）（文献d）

2 概要

画文帯四仏四獸鏡（昭和28年 重要文化財指定）の出土で知られる前方後円墳で、昭和44年に長野県史跡に指定された。

当地方で最も多く採用された形態の横穴式石室をもつ。これまで無袖式とされてきたが、文献dでも指摘されているように、最下段の側壁にわずかに内側に突出するものがあり、袖が意識されていた可能性がある。また、昭和62年の測量調査の際に、北側くびれ部から盾持ち人の埴輪が出土したという。

平成17年の墳丘北側の調査で、周溝のさらに外側を区画するとみられる幅2~4.5mの溝を確認した。調査範囲が限られているため、墳丘を巡るものであるかは確認できていない。この溝からは埴輪が出土しており、周溝との間に埴輪が立てられていた可能性もある。区画溝が巡るとすれば、全長100m以上となる。

3 時期

横穴式石室の形態や墳丘中腹に開口していること、出土遺物、人物埴輪に形骸的な盾表現がみられることなどから、6世紀前半ないし中葉に位置付けられる。

『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

3基からなる西古墳群の主墳であり、4基の円墳からなる権現古墳群と近接する。また、一段上位の台地上に馬背塚古墳があり、同一系譜上に位置付くものと考えられる。集落址では、開善寺境内遺跡の一画にあり、発掘調査の結果5・6世紀代の竪穴住居址等が調査されている。

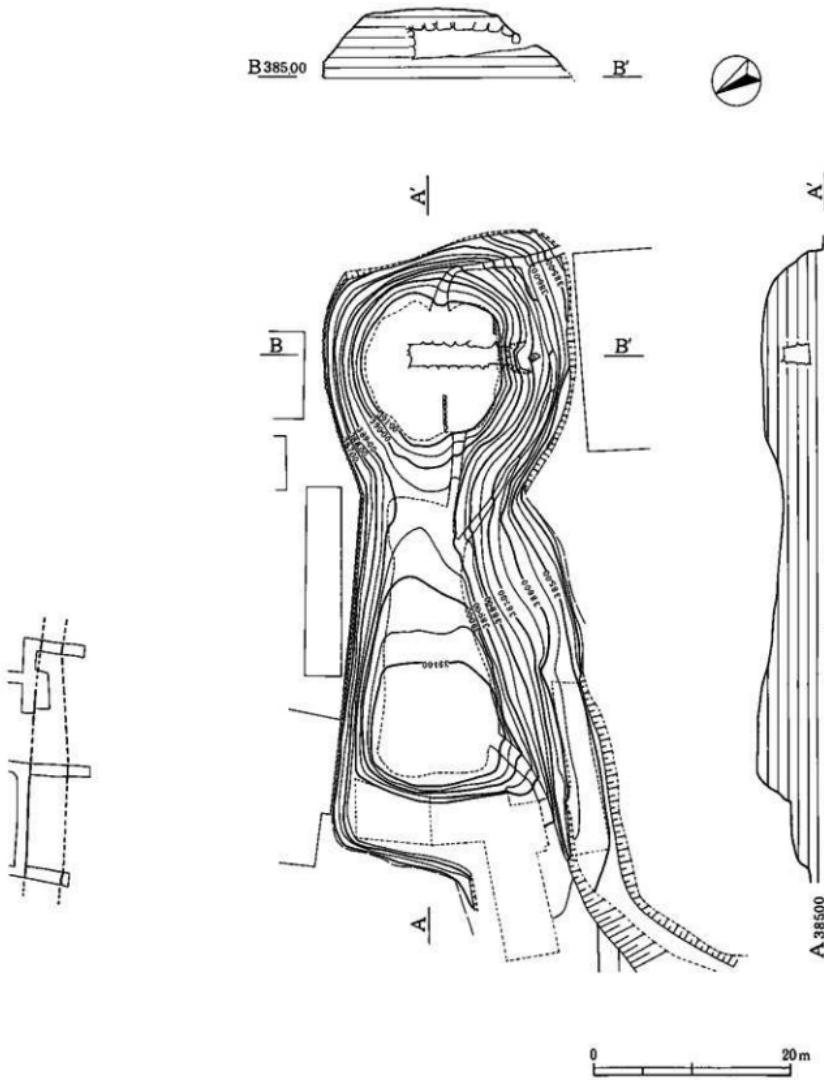
引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
- b 長野県史刊行会 1983『長野県史』全一巻(三)
- c 白石太一郎 1988「伊那谷の横穴式石室」『信濃』第40巻第7・8号
- d 滝沢誠他 1988「飯田市南部における古墳の実測調査」『信濃』第40巻第12号
- e 松尾昌彦 1983「下伊那地方における馬具の一樣相」『長野県考古学会誌』45



古墳全景（南西側上空から）

(平成6年撮影)



挿図46 墓丘測量図 (文献dより再トレス、平成17年度調査追加)



古墳全景（南西から）

(平成18年撮影)



前方部から後円部を見る

(平成18年撮影)

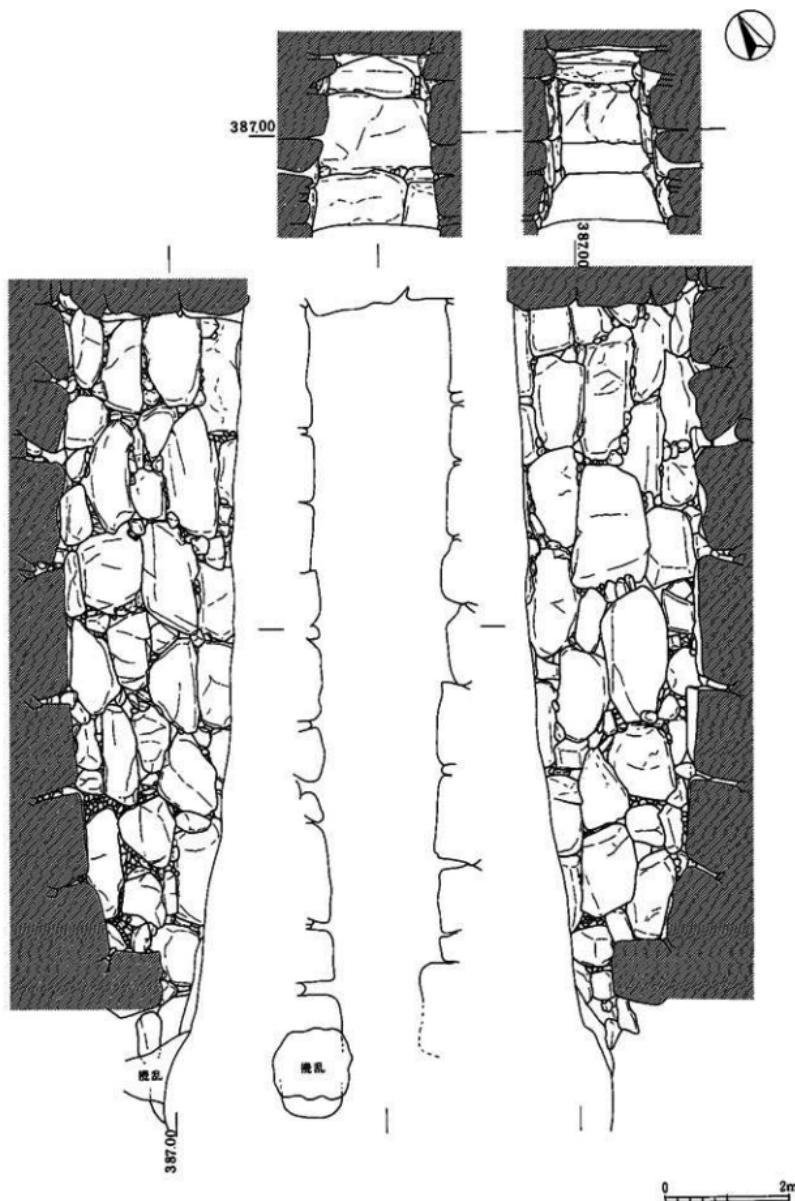
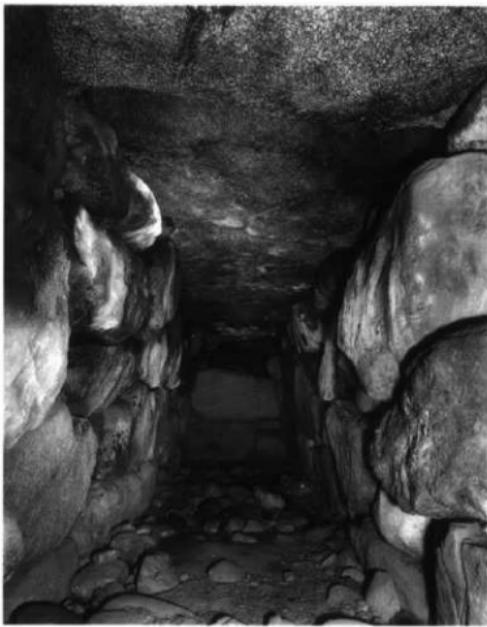


図47 横穴式石室実測図

(文献dより再トレース)

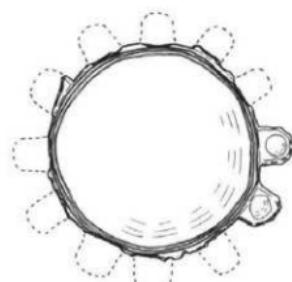


横穴式石室

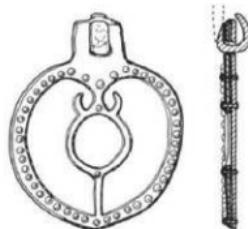
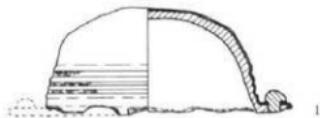
(平成18年撮影)



横穴式石室（奥壁から奥道部を見る）



杏葉・雲珠



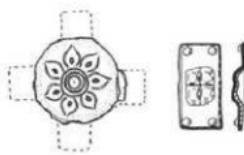
2



形象埴輪



3

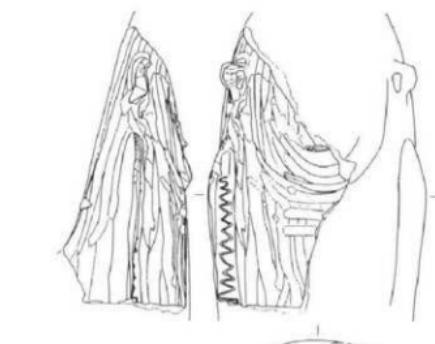


5

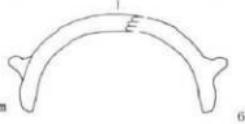


4

0 10 cm



0 20 cm



6

插図48 馬具・埴輪 (1・雲珠、2・3・杏葉、4・5・飾金具、6・盾持ち人)

(1～5 文献eより、6 文献dより)

ま せ づ か こ ふ ん
28 馬背塚古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市上川路284・286他
- 2) 立地 天竜川の支流である久米川と白井川に開析された台地の縁辺部、標高は420mを測る。
- 3) 現状 北東側は田地造成のため削平されかなり変形している。周囲は田畠であり、墳丘上も畠として耕作が行われ、墓・祠がある。諸開発の懸念は今のところない。
- 4) 調査歴 平成11年度 墳丘測量調査
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N54° W 墳丘長46.4m
後円部径19m・高さ6m 前方部幅20.8m・高さ5m (文献a)
- 6) 外部施設
- 7) 埋葬施設 後円部…横穴式石室 主軸方向N46° E、石室全長11.7m
玄室長8.4m・幅奥から1.9~2.1~2.0m・高さ約2.7m
羨道部長3.3m・幅1.8m・現状の高さ1.4m
前方部…横穴式石室 主軸方向N31° E 石室全長約11.9m
玄室長6.4m・幅奥から3.0~3.3~3.4m・高さ3.3m
羨道部長5.5m・幅2.0m・現状の高さ1.6m (文献d)
- 8) 出土遺物

2 概要

墳丘が後世の改変を大きく受けているため、古墳の向きについては異なる見解が出されていたが、文献dにおいても指摘されているように、西側墳丘を後円部、東側墳丘を前方部とする前方後円墳と判断される。平成11年度測量調査時では、墳丘規模などに大きな変化はないが、比較的墳丘の残存状況の良い北側の墳丘形態から判断して、前方部幅は文献aの数値よりもさらに広くなる可能性がある。本古墳は、出土遺物については知られておらず、築造時期などの判断に決め手を欠くが、後円部と前方部の両方に存在する横穴式石室が、本古墳の位置付けを考える上で重要なものとなっている。後円部石室は無袖式、前方部石室は両袖式と形態差が明瞭である。特に前方部の石室形態からみて、当地方でも最終段階に築造がなされた前方後円墳と考えられている。昭和44年に長野県史跡に指定された。

3 時期

石室や墳丘の形態から、本古墳の後円部石室は御猿堂古墳の無袖式石室に次ぐ時期のものとして、6世紀後半以降と位置付け得るものであり、前方部の巨石を用いた両袖式石室は6世紀末から7世紀前半に位置付けられる。

『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

上の坊遺跡では、5基の方形の低墳丘墓が調査されており、このうちの1基は貼石を持つと考えられるもので、5世紀中葉に位置付く。また、集落址では、開善寺境内遺跡・上の坊遺跡で発掘調査が実施され、開善寺境内遺跡では5・6世紀代の竪穴住居址等が調査されている。

引用文献

- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
- b 下伊那誌編纂会 1991『下伊那史』第一巻
- c 長野県史刊行会 1983『長野県史』全一巻(三)
- d 白石太一郎 1988「伊那谷の横穴式石室(一)(二)」『信濃』第40巻第7・8号



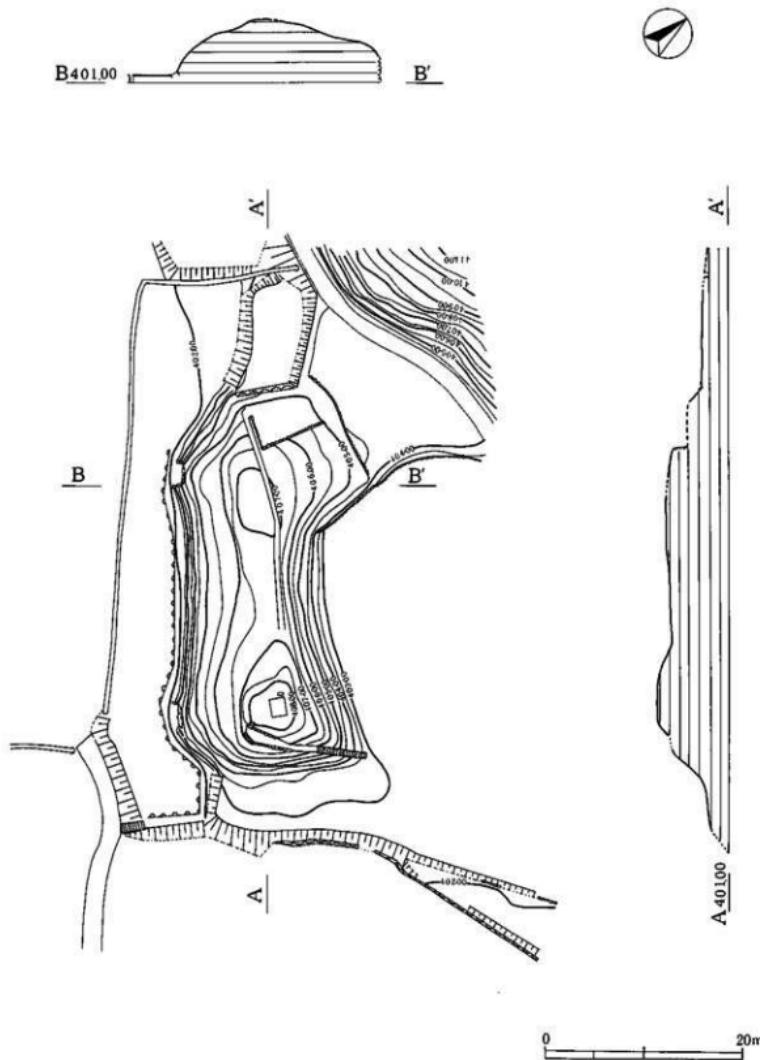
古墳全景（南側上空から）

(平成10年撮影)



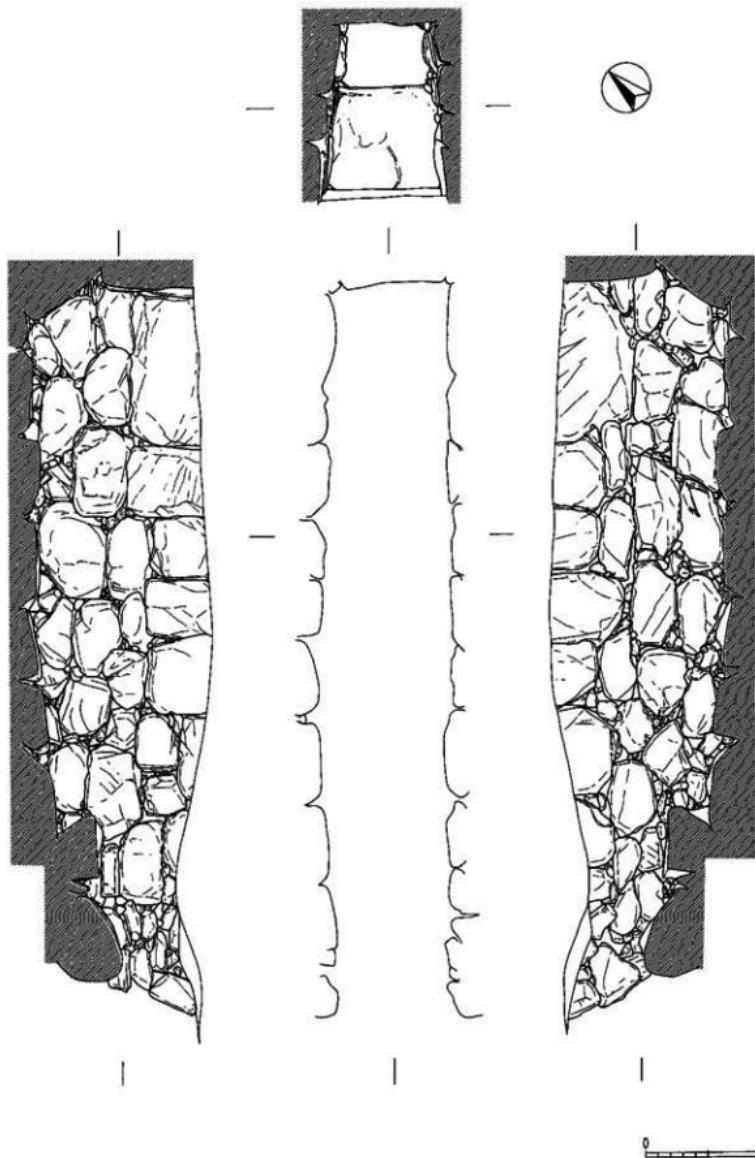
同上（南西から）

(平成18年撮影)



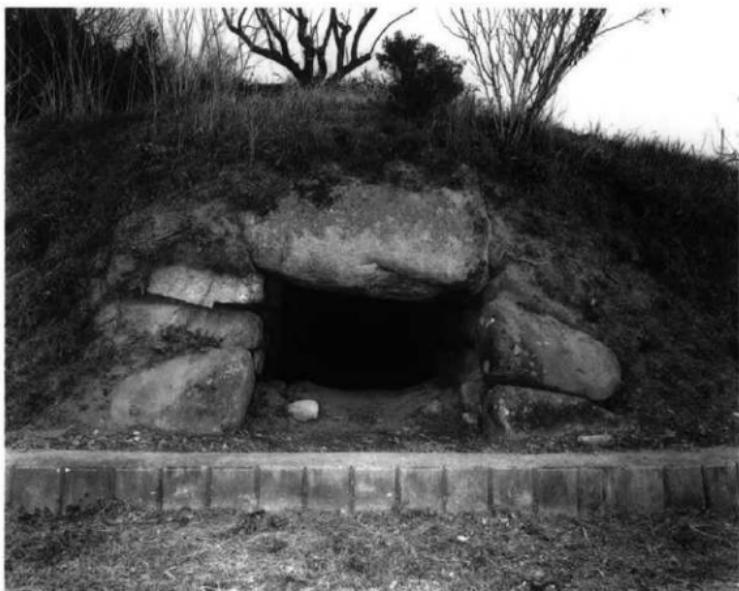
擇図49 墳丘測量図

(平成11年度測量調査による)



挿図50 後円部横穴式石室実測図

(文献dより再トレス)

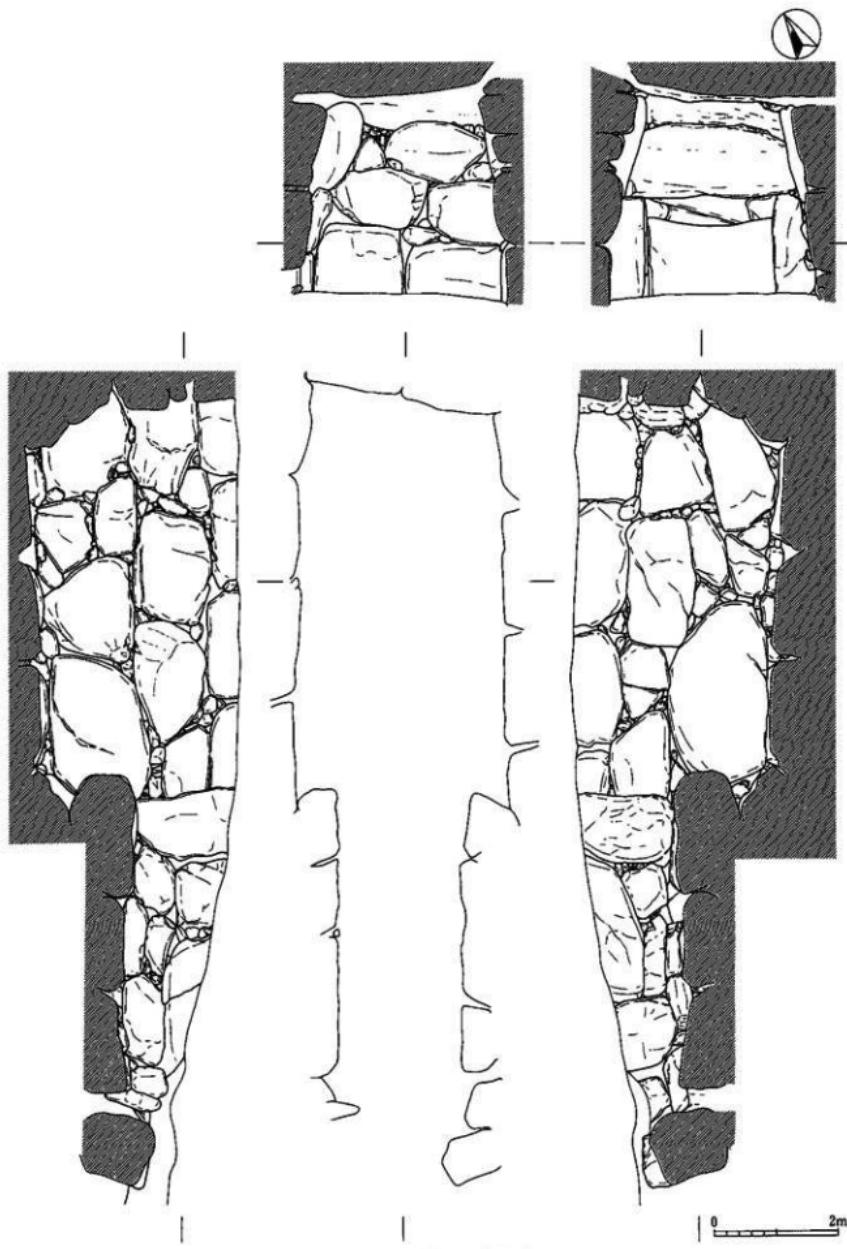


後円部横穴式石室

(平成18年撮影)



同上



挿図51 前方部横穴式石室実測図

(文献dより再トレース)



前方部横穴式石室

(平成18年撮影)



同上（奥壁より後道部を見る）

くぼた1ごうこふん
29 久保田1号古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 飯田市川路955-3他
- 2) 立地 天竜川右岸に位置し、標高374~378m、氾濫原に面した西から東に低く傾斜する低位段丘突端部に立地する。東側は天竜川の氾濫原が広がり、現河床まで500m程離れている。また、約200m北側には天竜川の支流である久米川が流れている。
- 3) 現状 発掘調査で確認された周溝および元々残っていた墳丘の下部は盛土工事によって埋められており、現在は墳丘の一部を見ることができる。
- 4) 調査歴 平成9~11年度 天竜川治水対策事業に先立つ発掘調査（文献c）
- 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N88°E 墳丘長61m
後円部径36.6m・周溝底からの高さ7.5m
前面部幅44m・周溝底からの高さ6.4m（文献c）
- 6) 外部施設 周溝および周溝の外側を区画する溝、周溝および区画溝は造り替えあり
葺石・造り出し（文献c）
- 7) 埋葬施設 横穴式石室とされるが、現在確認ができないため詳細不明（文献a）
- 8) 出土遺物 鉄矛1・石突2・兵庫鎖立闇環状鏡板付轡1・鏡板1・板状立闇環状鏡板付轡1・杏葉5・雲珠2・辻金具1・留金具2・鞍金具3・鎖2・金具2・五鈴鏡1・金環1・勾玉1・管玉2・丸玉5・小玉・切子玉3・銀製空玉2・須恵器片（高杯4）・土師器片（文献a・b）
円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪
周溝内における二次的祭祀行為によるもの
第I期区画溝…須恵器（壺・長頸壺・脚付長頸壺・提瓶・甕）・土師器（壺・長頸壺）
第II期周溝…須恵器（高杯・有蓋高杯・脚付長頸壺・長頸壺・短頸壺・甕・壺）・土師器（高杯・甕）・刀子・鐵鎌
第III期区画溝…土師器・須恵器・土製紡錘車 （文献c）

2 概要

久保田1号古墳は長野県最南端の前方後円墳であり、かつては正清寺という寺が古墳の南側を削平して建てられていたことから通称として「正清寺古墳」と呼ばれていた。

平成9年度から11年度にかけて行われた発掘調査では、後円部を東に向ける墳丘長61mの前方後円墳であること、葺石およびくびれ部の造り出しの存在等を確認した。また、周溝およびその外側を区画する溝が確認された。この区画溝は北側で方形の張り出し部分をもち、古墳を全周する可能性が高い。さらに周溝も区画溝も造り替えられており、造り替えに伴い規模は縮小されている。周溝および区画溝を含めた古墳の規模は第I期で90m以上、第II期では86m程度になると推定される。また、最終的な周溝

および区画溝の内壁には葺石と同様の石積みが施されている点に特徴がある。周溝内からは、須恵器や土師器がまとめて出土しており、何らかの祭祀的行為がなされたと考えられる。

3 時期

古墳の立地する一帯は、古墳時代中期を中心とする集落が5世紀末まで営まれている。古墳は造り替えがなされているが、集落廃絶の時期と出土遺物の時期等から、6世紀前半には最終的な形ができていたと判断される。周溝内での祭祀行為は6世紀後半以降に行われたと考えられる。

『集成』によると、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

川路地区では、当地方の古墳が築造され始めた5世紀後半のものとして、久保田1号古墳の南側約1.4kmのところに円墳で構成された月の木古墳群が存在するが、近接した場所に古墳群は確認されていない。古墳北側で調査された鎌魔王塚古墳は、当初陪塚と捉えられてきたが、築造時期が下り一世代程度の差が想定される。6世紀になると、周辺では横穴式石室を持つ円墳を中心とする小規模な円墳群が段丘崖下や上の段丘上に築造されるようになる。

集落について、古墳の周辺には古墳時代中期の集落が確認された久保田遺跡がある。周辺では他にも辻前遺跡、留々女遺跡、殿村遺跡等の集落遺跡が調査されているが、関連する古墳群より一段低い場所に集落が営まれており、このことから久保田1号古墳よりさらに低い地点に集落が存在していた可能性も考えられる。地籍は異なるが竜丘地区の御城堂古墳とは、久米川を挟み、指呼の内にあり、深い関連性が想定される。

引用文献

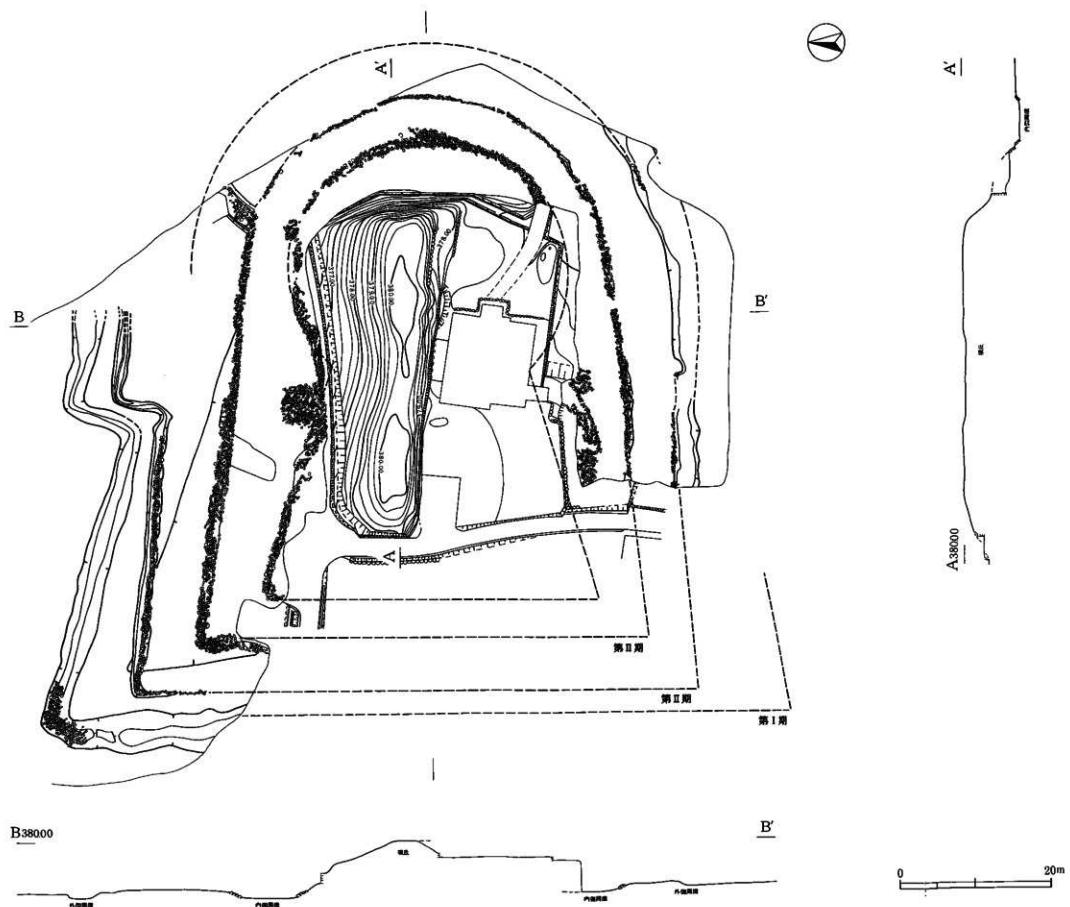
- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第二巻
- b 長野県史刊行会 1988『長野県史』全一巻（三）
- c 飯田市教育委員会 2003『久保田遺跡 久保田1号古墳 鎌魔王塚古墳 その2 古墳編』
- d 松尾昌彦 1985「信濃の馬具」『東日本における古墳時代遺跡・遺物の基礎的研究』



古墳調査区全景 (南西側上空から)



北側第II期周溝および区画溝 (西から)



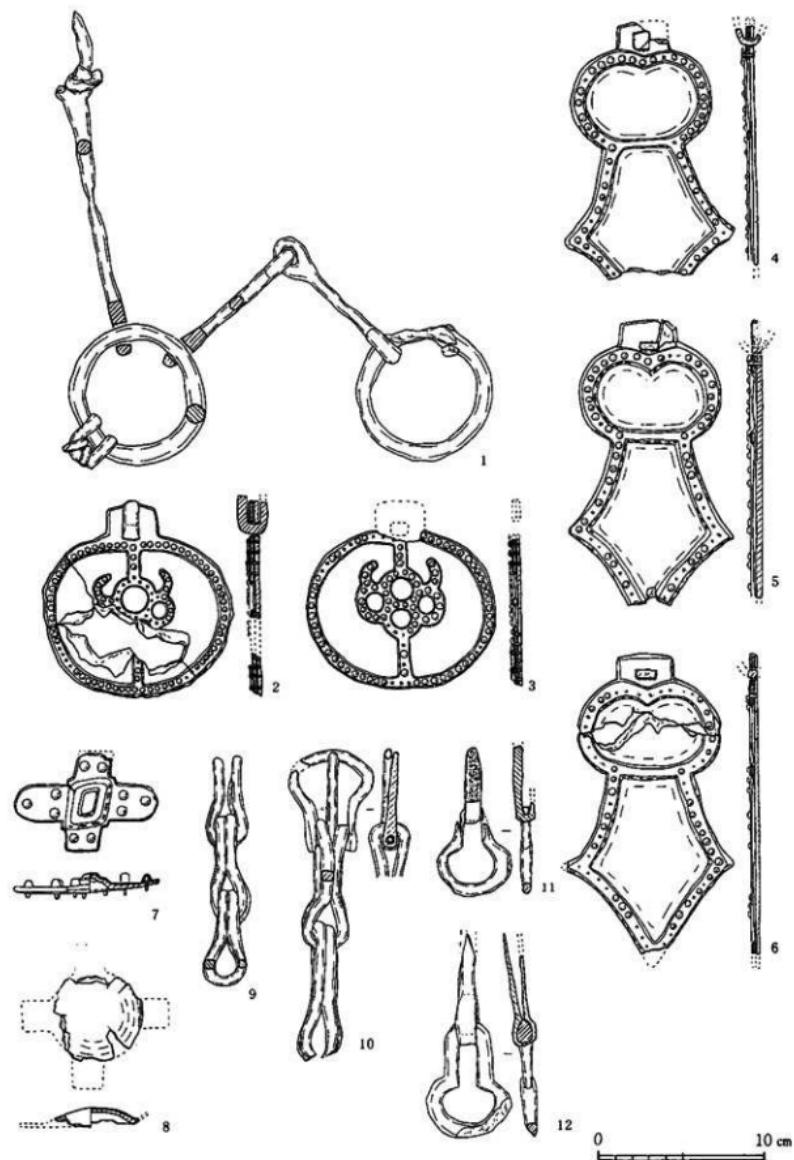
摺図52 墓丘測量図 (文庫cより)



後円部葺石および周溝（南から）



北側くびれ部（西から）



擲図53 馬具 (1-替、2~6-杏葉、7・8-辻金具、9・10-兵庫鎖、11・12-綱金具) (文献dより)



第Ⅰ期区画溝出土須恵器①



同 ②



南側周溝くびれ部周辺出土須恵器

同 ④

同 ③



南側周溝出土須恵器

円筒埴輪

30 郭1号古墳

1 基礎データ

- 1) 所在地 下伊那郡喬木村阿島3258
 2) 立地 帰牛原、城原に挟まれた標高420mを測る天竜川左岸の河岸段丘の北西端部に立地している。南には帰牛原の段丘崖が迫り、北側には天竜川の支流加々須川が西流している。
 3) 現状 喬木北保育園の用地内にあり、前方部の大半は削平されている。
 4) 調査歴 なし
 5) 形態・規模 前方後円墳 主軸方向N25° E
 後円部径東西24.4m・南北27.3m・高さ7.3m 前方部長38.2m (文献a)
 6) 外部施設
 7) 埋葬施設 横穴式石室 主軸方向N64° E 石室全長11.25m
 玄室長8.8m・幅奥から2.2~2.0m・現状の高さ2.2~2.75m
 羨道部長2.5m・幅1.6m・現状の高さ1.3m (文献a)
 8) 出土遺物

2 概要

文献aに記載される段階で、前方部の大部分は削られており、その後はすべて削り取られ、現在みられるような後円部と横穴式石室のみが残る。

天竜川東岸地域で唯一の前方後円墳で、横穴式石室は平面形が細長い形態のいわゆる無袖式である。石の積み方は花崗岩の大きな自然石を積み上げる方法で、竜丘地区の御猿堂古墳等との類似がみられ、当地方で最も多くの古墳で採用された石室形態をもつ。昭和41年、喬木村史跡に指定されている。

3 時期

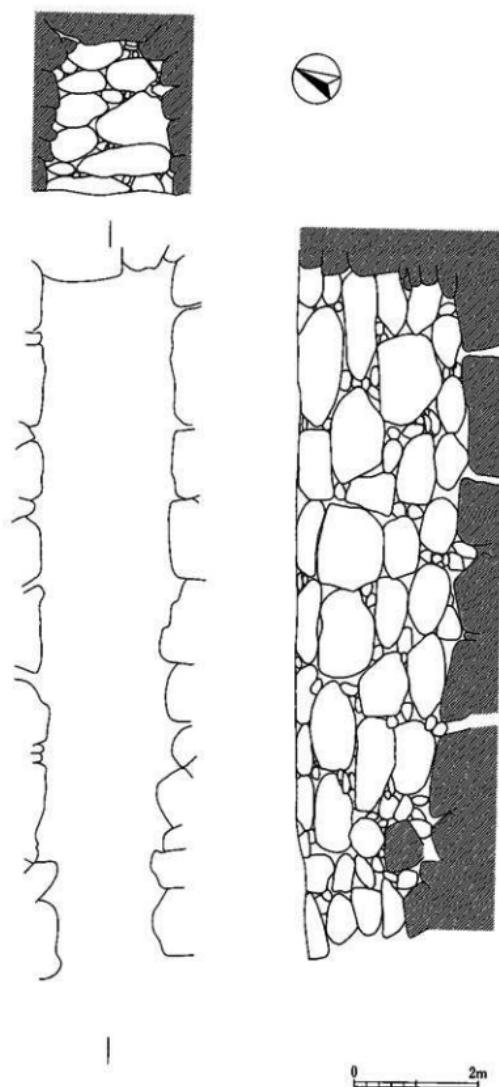
出土遺物が知られていないため、時期の特定ができないが6世紀代と考えられる。

『集成』では、9期に比定されている。

4 周辺の状況等

周辺には郭2号・3号・4号・5号古墳等の円墳群が分布している。中でも近接する2号古墳からは鉄刀・馬具・土器類の遺物が豊富に出土しており、遺物の出土がみられない1号古墳の時期を検討する上で重要な存在である。また、5号古墳からは埴輪が出土している。

- 引用文献**
- a 下伊那誌編纂会 1955『下伊那史』第三巻
 - b 長野県史刊行会 1968『長野県史』全一巻(三)



挿図54 横穴式石室実測図

(文献aより再トレース)

飯田における古墳の出現と展開

-資料編-

2007年3月 初版発行

2008年9月 2刷発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社
